

第五章 転落という主題——『われから』と人名録の間テキスト性

一、転落の人物たち

「成立事情は極めて解明がむずかしい」とされるものの、未完の『裏紫』（一八九六〔明治二九〕年）を別とすれば「一葉最後の作品」²であることが確かな『われから』³（初出『文藝倶楽部』第二巻第六編、一八九六〔明治二九〕年五月一〇日）は、したがって前章で論じた『わかれ道』の実質的な後続作ということになる。

同テキストは、かつてみずからの美貌にふさわしい華やかで贅沢な暮らしを得るために夫と幼子を捨てたヒロインの母の物語を交えつつ、その最愛の妻に去られたのち高利貸⁴となった亡父の巨富を相続したヒロインが姦通の噂を理由に入婿から邸を追放されるまでを物語った、いわば母娘二代にわたる年代記だが、結末において実子のない「奥様」（＝ヒロイン）と継子を生じた入婿の「妾」の形勢が逆転してゆくさまは、これが『わかれ道』の後続作であることを考えると興味深く思われる。

しかも、その「素人」「あがり」の「妾」である「飯田町のお波」の風貌——「髪の毛自慢の櫛巻で、薄化粧のあつさり物、半襟つきの前だれ掛とくだけて」が、お京のそれ——「意気な女、多い髪の毛を忙がしい折からとて結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ」と似通っていることを考えあわせれば、「見とも無いほど睦ましい」と噂されるほど「旦那」から寵愛をうけ「子宝」にも恵まれ、これから「奥様」の跡を襲うかもしれないお波とは、あるいはお京の行く末をめぐるひとつの可能性、それも最上の可能性を示しているとも深読みできるかもしれない。

だがむろん、今を時めく政治家であるその「旦那」金村恭助について、テキストが「限りも知れず広き世に立ちては耳さへ目さへ肥え」「身持ちの悪う成り給ふ」「意気な洒落もの」——つまり公的領域における実力に秀でていだけでなく、遊興の道にも長けた男性である点を幾度も強調しているかぎりにおいて、お波もまた、いずれ恭助の変心に遭遇するであろうことは想像に難くない。一葉の物語世界においては、立場形勢の逆転ないし成功出世はあくまで仮初のものであり、いつしか明治近代が指し示す優と劣、勝と敗の境界自体が不鮮明になってしまうのである。

おなじ脱構築の構図は、町の父・金村与四郎が高利によって築いた莫大な資産が、結局は、身内である町の手をすり抜けて、いわば他人である婿恭助に渡ってしまう結末にも認められるだろう。与四郎は貨殖だけに凄絶な執念を燃やし、人間性の放棄と引き換えに巨万の富を獲得したわけだが——「浮世の欲を金に集めて、十五年がほどの足掻きかたとは、人には赤鬼と仇名を負せられて、五十に足らぬ生涯のほどを死灰のやうに終りたる、それが余波の幾万円」、語り手はその与四郎について、別の場面で次のようにも語っているのである。「奥様の父御といひしは赤鬼の与四郎とて、十年の以前までは物すごい目を光らせて在したる物なれど、人の生き血をしぼりたる報ひか、五十にも足らで急病の脳充血、一朝に此世の税を納めて、よしや葬儀の造花、派手に美事な造りはすると、辻に立つて見る人に爪はちきをされて後生いかゞと思はるゝ様成し。」

「千鈞の重きを提げて大海をも跳り超え」るほどの努力を金銭の集積だけに傾け、まさに債鬼と化してその富を殖やすことのみに執着し、明治社会における屈指の富豪に成り上がっても、五〇歳にも満たない若さで突然あつげなく亡者となってしまう。与四郎の生涯をたどる語り手の口調には、富

裕者に対する鬱屈感情とともに、およそ成功や出世というものをめぐる無常観が垣間みられるのである。

しかも物語は、娘の町の代になって僅か一〇年ほどで、「奥様」町の気儘で驕奢な暮らしぶりを妬んだ「仲働き」の広めた噂がきっかけで、その莫大な資産すべてが恭助にいわず「横領。」されるかたちとなってしまふ。そんな致富と成功をめぐる有為転変の軌跡は、スケールの差こそあれ、前章『わかれ道』論、第四節で言及した樋口家の浮き沈みと軌を一にしている。この点においても、テクスト『わかれ道』と『わかれ道』の間にはある連続性が看取されると言えるかもしれない。

『われから』は『裏紫』とならんで、「女の情念の解放に作者の意志が向かっていた」（藪禎子氏）ことを示すテクストであることは確かであり、矮小解釈にはちがいないが、『めさまし草』や『明治評論』など初出当初の評においても、議論の中心は町の姦通の有無であった。だが他方でテクストは、富の移転と社会階層の下降、つまり〈転落〉を主題のひとつに据えてもいるのであり、それはテクスト終端を町と恭助の応酬に——それはまさに「家」という富の移転（＝収奪）が行なわれた瞬間の応酬にほかならない——に定めていることから明らかであろう。「此家をば家とおもふべからず、立帰らるゝ物と思ふな」「私は一人もの、世に助くる人も無し、此小さき身すて給ふに仔細はあるまじ、美事すてゝ此家を君の物にし給ふお気か、取りて見給へ、我れをば捨てゝ御覽ぜよ、一念が御座りまするとて、はたと白睨むを、突のけてあとをも見ず、町、もう逢はぬぞ。」

それまで明治社会の陽のあたる場所に確かに立っていたものが、あるいはその場所の一隅を占めようと人一倍「足掻き」努力していたものが、ふとしたきっかけから歩を踏み外し、社会階層をすべり落ちてゆく。突然不帰の人となる。非業の、または覚悟の自裁を遂げる。この『われから』の町と与四郎をはじめ、顧みれば、本論文でとりあげた『うもれ木』の入江籟三・お蝶、『暗夜』の松川父娘・高木直次郎、『にぎりえ』のお力・その父祖・源七・お初に、『十三夜』の高坂録之助、『別れ霜』（一八九二〔明治二五〕年）の松沢芳之助を加えると、樋口一葉はずっと明治近代における転落の人物を、零落してゆく人物ばかりを語りつづけてきたことが判然とする。

いま挙げた者たちばかりではない。

腕のよい居職人から「軽蔑れて、馬鹿にされて居る」「卑しい身分」（前出『妾』の「妾」に転身する『わかれ道』のお京も、前章で論じたように、やはり転落の人物であろうし、予めあらゆる「出世」の扉を閉ざされて和傘屋を「死場と極め」るほかなかった吉三も、洋傘の主流化によって社会階層を下降するのは必定である。『大つごもり』（一八九四〔明治二七〕年）に登場する資産家の総領息子山村石之助も、強欲な継母や父への意趣返しから貧民を饗応する「放蕩」「道楽」に耽り、いずれは廃嫡されて相続財産を大幅に減じられる「極まり」にある。だが、なにより同じ『大つごもり』でいえば、「骨やみ」を機に借財地獄へと転落した伯父安兵衛の一家を救済しなければならない「孝」を負ったお峰こそ、ほどなく「みずからの肉体を商品化する」「苦界」（高田知波氏）と足を踏み入れざるを得ないはずだ。『裏紫』（一八九六〔明治二九〕年）もまた、姦通をつづける富商の妻小松原律が露見を覚悟のうえで（捨られゝば結句本望）、すなわち裕福な嫁家からの追放という転落をも見据えたいうで、吉岡との逢瀬に向かうくんだりで断筆されているのである。

そのほか、『経つくえ』（一八九二〔明治二五〕年）の香月園や、『暁月夜』（一八九三〔明治二六〕年）の香山一重、『花ごもり』（一八九四〔明治二七〕年）のお新、『ゆく雲』（一八九五〔明治二八〕年）の上杉縫たちも、結婚という「世間さま並」（『にぎりえ』）の幸福を放棄し、或いはあえて鄙に逼塞する人生を選択

したという意味において、やはり転落の人物に含めることができるだろう。『うつせみ』（二八九五〔明治二八〕年）の雪子と植村録郎も、それぞれ発狂と自死というかたちで転落を遂げた人物たちである。そして次章で詳述するが、「子供中間の女王様」として自由闊達に毎日を過ごす『たけくらべ』（二八九五〔明治二八〕年）の美少女美登利を待ち受けるのも、まさに「憂き事さまぐ」な吉原の陰惨な現実なのであり、またその時こそは、「今日此頃の全盛」を誇る姉の大巻が「お職」の座から転落する時にちがいないのである¹¹。

いま挙げてきた者たちの多くは、当初は、明治近代を存分に生きているように見える。『われから』の町や与四郎、『暗夜』の蘭とその父、『裏紫』の律、『十三夜』の録之助、『大つごもり』の石之助らは、確立されたばかりの資本主義社会における勝者として豊かさを享受していたし、『うもれ木』の籟三・『にこりえ』の源七・『暗夜』の直次郎、『大つごもり』のお峰、『わかれ道』のお京らは、それぞれ立身出世主義、忠孝の道、勤勉な労働といった明治近代規範をだれよりも忠実に遵守していた。だが、そのように近代を率先して生きていたはずの彼／彼女たちは、じつはその深奥にそれら近代の文脈——上昇への欲望——と根源的に対立するものを潜在させていたのであり、彼／彼女たちの転落は、いわばみずから招き寄せたのかもしれないのである。

明治近代は、第一章で竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』、安丸良夫『近代天皇像の形成』、牧原憲夫『客分と国民のあいだ』などを参照しながら確認したように、国民ひとりひとりの上昇志向こそが国家を富強にさせる原動力になるという、立身出世主義に依拠していた。ここでは、金銭欲であれ名誉欲であれ、ひとりひとりの国民が自己の欲望をひとつでも多く叶えるよう努力することが最大限に評価されたのであり、そのような貪欲な欲望追求には「天皇の権威を介して〔…〕普遍的な意味¹²」すら付与されたのである。たとえば西周が「人世三宝説」で挙げたような「健康」「知識」「富有¹³」、あるいは社会的地位、威信、家族といった可視的な価値をどれだけ多く獲得できるか。それら諸価値の獲得を通してどれだけ国家貢献できるか。それが成功や出世の指標となり、おのずと個人の幸福のめやすともなったわけである。そうした「個人的欲望の無条件な肯定¹⁴」を余すところなく体現した人物が、たとえば本田昇（二葉亭四迷『浮雲』一八八七〔明治二〇〕年）であったことは言うまでもないだろう。

そのようにして、社会的優位にある者も劣位にある者も、あるいは劣位にある者であれば尚いっそう欲望を全開にし、時には前章で見たように、運への関心の高さとかたちで成功を強く憧憬する——つまりは広汎な人々が我勝ちに「坂の上」を目指し、国家がそれを全面的に後押ししていた時代のさなかに、先の彼／彼女たちは突如としてその隊列から離脱し、下降の道をたどってしまう。きわめて非功利的で、非理性的なふるまいである。主人公たち自身も、みずからが帯びてしまっている非理性について、次のように表現しているのである。「馬鹿らしい気違じみた、我身ながら分らぬ」『にこりえ』。そして、こうした不条理きわまりない主人公たちを造型した作者本人も、その「作意」を問われてこう応えた。「常々おのれも知らぬ心のそこに、怪しうひそむ物のありて」『みづの上日記』一八九六〔明治二九〕年五月二九日。

ちなみにこの一葉の回答は、先程から取り上げているテキスト『われから』（九）に登場する、ある一場面の創作意図について尋ねた斎藤緑雨にあてたものである。自邸で催された夫恭助の誕生祝賀会の晩、例年にも増して盛大な宴の喧騒を避けようと一人庭園にのがれた町が、「築山の背後の、お稲荷さまが社前」で自身の不吉な未来を予感し慄然とする、きわめて印象的なその場面。緑雨によ

れば、このとき町の胸中にぎざした「怪しき心」を、「三人冗語」の同僚幸田露伴は、「我れもいつしか母と同じき運命に廻り逢ふ事なからずやとの念¹⁵」から生じたものであるにちがいない、と断じたのだという。緑雨はその当否を作者一葉に直接問うたわけである。

この露伴の解釈は、親譲りの莫大な資産を保有し、有力政治家夫人としての地位もあり、そのきわだって艶麗な美貌による名声も所有しているという、まさに明治社会における特権的人生を享受している町が¹⁶、別段慕わしくも思っていない書生への不用意な接近によって、「われから」転落してゆくという不可解さに対して、正確にはその転落を予見しおのく町の「怪しき心」に対して、合理的解釈を与えようとしたものと思われる。露伴の考える合理的解釈とは、かつて町の父を捨てた母・美尾の因果による報い、すなわち因果応報である。

おそらく、この一葉と緑雨のやりとりの少し前に催されたい、鷗外、露伴、緑雨による覆面座談会「三人冗語」での「老人」の次の発言も、右の解釈との類似性からみて、露伴のそれと考えられようか。興味をそえられる詮索は措くとして、それを受けた「猪尾¹⁷」の発言と併せて、ここに改めてその内容を掲げてみたい。

「古風の小説ならば、お町の棄てられて後お美尾に会ふ一段ありて、大に因果の理を讀者にお美尾の口より云ひ聞かせ、母子の愛情を悲しき情景に擲めて、充分に涙を絞らするところある筈なり¹⁸」。「左様なくては叶はぬところ。勿論一葉にそれとなく此篇の後譚を書く心算があるに違ひない。お美尾「∴」死ぬやうな目も見た後「∴」生き延びてお町に会ふといふ一幕は屹度泣けるに相違ない¹⁹」。

ここで「老人」「猪尾」は、「古風の小説」、すなわち教化勸懲を目的とした女大学・女今川風の読本や後期草双紙²⁰の範型どおりに「大に因果の理を讀者に」訓ずる場面がないことを難じた²¹。うえで、あらためてその場面を挿入した後日譚が書かれることまで期待しているのである。だがじつは、この批判内容自体が『わかれ道』の本質的な新しさ、近代性を指摘していると言えるわけだが²²。

これに続く「頑固」は、よほど町の挙動が不可解かつ不愉快であったのだろう——『いさなとり』（一八九一〔明治二四〕年）では男性の初志を妨害する諸悪の根源として女性を形象するほどに謹厳な露伴がこれに扮したのではないかという想像は措く——、それをめぐって、「免しがたき淫婦の所行」、「不義ものと一喝して責むべき価値あり」、「法外千萬」、「癩といふものは藝妓娼妓若くは其類似の悪業をなしたることあるものに多き病「∴」然るに此篇のお町の挙動、万端藝娼妓くさきのみならず、癩まで有せるとは怪むべし」、「お町千葉といへる男と私通せることは疑ひなき事実」などと次第に怒気を強めながら指弾、ついにはその怒りの矛先を作者一葉にも向けている。「女は女同士相憐むの情に駆られて、作者一葉ついつかり心づかず、全くの冤罪のやう記したるより、常に似合はぬ過をなせるなるべし²³」。

要するに「頑固」は、母の「淫」蕩な血脈と「因果」をうけつぐ「不義もの」として、一刀両断的に町を規定することでその転落を必然視しようとしているわけだが、その傍らで東西医学言説を援用しながら、それを「ヒステリー²⁴」に起因すると、これもまたきわめて明快かつ合理的に説明づける「訳知り」（鷗外か）ともども、明治文壇を代表する大御所は、町の名状しかねる心の闇——「万におのが乱るる怪しき心」とそれがもたらす転落について、それ以上深く掘り下げることにはなかったのである。

そうした文界巨頭たちをよそに一葉は、この日も「当時の批評壇をのゝし²⁵」ってみせた緑雨を前にして——このとき四時間にもわたって語り合った緑雨について、一葉は「逢へるはたゞ二度なれど、

親しみは千年の馴染にも似たり²⁶」と綴っている——、「常々おのれも知らぬ心のそこに、怪しうひそむ物のありて、心細き感²⁷は常々有しに相違なかるべく」と語ったわけである。

「おのれも知らぬ心のそこに、怪しうひそむ物」による「馬鹿らしい気違²⁸じみた、我身ながら分らぬ」逸脱や転落。同時代のもっとも権威ある批評家たちには閑却された、あるいは閑却されなければならなかった、一葉の諸テクストを通底する、この逸脱や転落という主題について、最終章で結論的に論じる前に、一葉の諸テクストに共通する、ある構造について確認しておく必要があるだろう。それは、明治近代の正統性から逸脱し、転落してゆく主人公たちの前景には、着々と富を蓄積し、社会上層部にゆるぎない定位置を確保することに成功した者たちが布置されているという構造である。

本章では、その構造を確かめるための好個の一例として、『われから』を取り上げてみたい。先ずは、「富豪の時代²⁹」と称される同時代背景を確認するところから論を開始することとしよう。

二、「紅葉館」という記号

『われから』は、『わかれ道』と全く同様に、年の瀬も近づく真冬、深夜にもかかわらず、未だ眠りに就けない主人公の日常風景を語りおこすところからテクストが始まる。だが、その二つの風景は余りにくつきりと明暗が分けられている。作者の格別な意図すら感じさせるほどである。

一方は、寒風吹きつける「裏」長屋の一隅で「半天」を着込んで、今夜中に仕上げなければならぬ注文着の裁縫に追われており、自分を慕って訪ねてきた少年が一片の餅を焼こうとしても、「台処の火消し壺から消し炭を持って来て」、冷えた火鉢に埋けてやるゆとりすら無い。

もう一方は、「六枚屏風」などがしつらえられた「蘭麝にむせぶ」「八畳の座敷」で、「縮緬の抱巻」を羽織り「郡内」絹布団の上に座って、「小間使ひ」に埋けさせた最上質の「桜炭」入り「桐胴」火鉢を引寄せて「紫檀」の「煙草盆」にあった「朱羅宇の烟管」に火を点け、なすこともなく夫の帰宅を待っている。

ほぼ相前後して執筆された二つのテクスト。眠ることの出来ない女をめぐる二つの語りは、日清戦後の日本に存在した二つの世界の対照性をあざやかに浮かび上がらせる。

だが、この『われから』冒頭の語りには、いま掲げた以上に、二つの世界の径庭を象徴する記号が嵌め込まれている。出世するにしたがって、近來すっかり遊興上手になった夫の行状に思いをめぐらす町の思惟——「去歳の今頃は紅葉館にひたと通ひつめて」にある「紅葉館」である。

「紅葉館」（現東京タワー）とは、東京府が迎賓館様施設の誘致を企図して造成した芝公園「楓山」に、「本邦ノ首府タル東京ニシテ貴顕紳士ノ集會、朋友同好共遊ノ地ナキ³⁰」ことを惜しんだ読売新聞社主・子安峻らが発起人となって、一八八一（明治一四）年に開設された会員制社交場である。終戦時にいたるまで日本有数の格式を誇った同館は、一八九二（明治二五）年から一般客にも門戸を開放したとはいえ、設立時の「館則」第一項にも謳われているように（「當館ハ貴顕紳士ノ集會共遊ヲ旨トシ、雜客群集ヲ避ルカ為メニ大凡會員三百名ト定メ、其證券ヲ渡シ置クヘシ³¹」）、「有名人の参入希望者もそう簡単には入れない³²」、あくまで限定された「貴顕紳士の集會所³³」だった。金村恭助はここに通いつめていた、と物語言説は冒頭で告げているのである。

『われから』初出の翌年に出版された『臨時増刊 風俗画報 新撰東京名所図会』には、世上の評判高く、町も嫉妬した、「新柳二橋に一粒撰を絹漉にしても得難き³⁴」「五十余人の美姫³⁵」による

接待ぶりとともに、「高尚優美を旨とし虹梁駕瓦の華を極め³⁴」た同館内部の様子が紹介されているが、ここで注視したいのは、贅を尽くした幾つもの「廣間」のほかにも、数寄を凝らした「茶室」「利久堂」と「主上の行幸を仰³⁵」ぐ「便殿」、そして「故岩倉右大臣外有志の華族六十名にて設立³⁶」された「能楽堂」が併設されていた点である³⁷。よく知られている事柄ではあるが、茶道と能楽こそ、維新後、短期間で社会階層を這い上がっていった富豪たちが³⁸、みずからの威信と正統性を裏づけ、発信するための二大文化装置にほかならなかった³⁹。彼らにとつて、天皇や華族たちの好尚によって権威づけられたそれらハイカルチャーに通暁することこそが、〈成り上がり〉から「貴顕紳士」へと脱皮するための重要なコードだったのである。

ここからおのずと「紅葉館」の主客たちの顔ぶれが明らかとなるだろう。近代有数の数寄者たち、たとえば安田善次郎や三野村利助——彼らは、同館が一九九三（明治二六）年、合資会社として発足した際の株主でもある⁴⁰——たちである。むろん、三野村の背後には数寄者茶道の重鎮・益田孝と三井系実業家たちが、益田の背後には有名な大師会のメンバーたちが、あるいは朝吹英二を介して三菱系実業家たちが、安田の背後には数寄者茶事の最高峰といわれた和敬会の澁澤栄一をはじめとしたメンバーたちが存在しよう⁴¹。

同時代において「紅葉館」なる固有名詞は、数寄の嗜みを介して縦横につながる、こうした「貴顕紳士」集団の存在とその隆盛を、なにより明示する記号であったにちがいない。『東京名所図會』（一八九〇〔明治二三〕年二月）も次のように記述している。「紅葉館ハ〔…〕会員及び其他の懇親親睦等の宴席に供するものなり傍らに能楽堂ありて能狂言を演ずる所とす事に貴顕紳士の遊宴に供すると云ふ⁴²」。

じつは、明治二〇年代から三〇年代初頭——まさしく樋口一葉のテキストが生成された時代こそ、「紳士」が「発見⁴³」され、「紳士」なる語が広く流通した、〈紳士の時代〉にほかならなかった⁴⁴。永谷健『富豪の時代 実業エリートと近代日本』によれば、所得税法導入（一八八七〔明治二〇〕年）を画期に、納税額というきわめて明確な掲載基準にもとづく人名録が『日本紳士録』（交詢社、一八八九〔明治二二〕年）を皮切りに続々と刊行され、「富裕な納税者集団⁴⁵」が「紳士」として定義されていたからである。

なかでも、あらゆる人名録において、圧倒的な納税額と多くの肩書とによって突出した存在感を示していたのが、「財閥当主や新興実業家⁴⁶」たちだった。岩崎久弥・弥之助、三井高保、安田善次郎、澁澤栄一、浅野総一郎、大倉喜八郎・・⁴⁷。すなわち先に述べた数寄者たちである。『われから』初出同年刊の第三版『日本紳士録』において納税額上位を独占していた彼らは、同時に、両岩崎を除いた全員が、一九〇四〔明治三七〕年時点の和敬会メンバーでもある（三菱からは日本郵船社主近藤廉平が参加）⁴⁸。

「同時代における刊行物の一ジャンルを形成した⁴⁹」ほどの「人名録ブーム⁵⁰」は、彼らに対する人々の関心の並々ならぬ高さを物語っている。人名録という流行メディアを通して、そのように貴顕紳士が広く一般に「可視化⁵¹」された時代、別言すれば、「富裕な納税者集団」である「彼ら」とその他大勢の「われわれ」という視点が登場した時代を背景に、『われから』は物語られているのである。

周知のように『われから』はモデル小説であり、金村恭助は立憲改進黨系衆議院議員⁵²にして『毎日新聞』（テキスト初出時における紙名）社主の沼南島田三郎——同紙の初代社長は紅葉館設立発起人の

読売社主・子安峻——が、町は同紙前身『横浜毎日新聞』総代島田豊寛の令嬢政子——一葉と萩の舎で同門——が、それぞれモデルとされている⁵³。「当代弁論界」随一の「能弁⁵⁴」（小野田翠雨『現代名士の演説振』一九二一〔明治四四〕年）として、貧民救済や廃娼など社会事業問題にも積極的に言及し⁵⁵、足尾鉾毒事件では古河を、後のジーマンス事件では三井を攻撃したことから反財閥的と評されることもある沼南だが⁵⁶、安藤良雄氏による三菱研究の文脈においては、大隈率いる改進黨系ジャーナリストのひとりとして、一八八一〔明治一四〕年の政変前後から、「強力な世論操作をおこなった⁵⁷」岩崎弥太郎ひきいる三菱と「ふかい関係をたも⁵⁸」ったと指摘されているのである。

官有物払下げ事件をめぐる、大隈―福澤―岩崎共謀説を裏づける、この安藤氏の指摘は措くとしても、沼南のいくつかの論説文からは大隈重信と濹澤栄一との交誼の深さがうかがわれ⁵⁹、とりわけこの政と財の二大領袖を介して「誰れとて世間に名の聞えぬもなく」とテキストに語られる貴顕紳士たちとの人脈——むろん単なる友誼を超えたきわめて政治的な相互関係——が形成されたと推測できらるろう。一八八一〔明治一四〕年の政変以前の沼南は、陸奥宗光や文部卿河野敏謙の推挙で文部権大書記官に就任⁶⁰していたから、官界にもその人脈の網の目は広がっていたはずだ。

テキストにある「水曜会のお人達や、倶楽部のお仲間」が「紅葉館」のメンバーを、金村邸の「茶室」が恭助の数奇趣味を意味しているかは、むろん全く不明ではある（『暗夜』の文脈では「倶楽部」は政治的派閥グループの謂であるようだ）。だが、政財官軍（昵懇の「鳥居」は「海軍」に属する）メディアにまたがるその人脈が、「紅葉館」の数奇者人脈と陰に陽に接合しているであろうことは、維新以降の「富豪」と政治家との「主客の関係分からぬ」ともいえるほどの癒着ぶり⁶¹を剔抉した山路愛山『現代金権史』（一九〇八〔明治四一〕年）や横山源之助『明治富豪史』（一九一〇〔明治四三〕年）からも明らかである。

その意味もふくめて、島田三郎に擬された金村恭助は「紅葉館」常連客たる資格を有する、いわば真正の貴紳とあって良いだろう。そもそも第一回総選挙から衆議院議員に当選し続けている島田三郎は、一八九〇〔明治二三〕年時点において、すでに直接国税一五円以上を一年以上納付する全人口の一・一パーセントに満たない存在⁶²、すなわち「富裕な納税者集団」の一員にほかならない。掲載基準を「前年度の所得納税者及県会議員選挙有権者中地租一五円已上納むる者⁶³。」と規定した『日本紳士録』をここで実際にひもとけば、「島田三郎」は第一版（一八八九〔明治二二〕年）では「毎日新聞社員 麹町区飯田町三丁目⁶⁴」、第三版（一八九六〔明治二九〕年）では「衆議院議員 三一八〇〇 地租一七七〇〇 麹町区中六番町三一 電話九一八⁶⁵。」と記載されており、その納税額の総額は他の掲載者とくらべても群を抜いている。市井の人々にとってはまぎれもなく、はるか雲上に仰ぎ見る「彼ら」の一人であったにちがいない。

さきほど、近代日本のエリートは誰かという好奇心をもつ人々のあいだで、人名録が競って受容され、その流行メディアを通して貴顕紳士の存在がひろく可視化されてゆくなかで、ある視点が生じた、と述べた。富裕な納税者集団である「彼ら」紳士と、そうでない圧倒的多数の「われわれ」という視点である。

じつは『われから』の要点は、一見そうとは気づかないが、「彼ら」の世界を「われわれ」の視点で物語っていることにある。いいかえればテキストは、「彼ら」と彼らをまなざす「われわれ」の二つの世界を含み込んでおり、語り手はつねに後者の世界から「彼ら」の世界の恭助と町を語っているのである。

“われわれ”の世界とは、たとえば、与四郎の「派手に美事」な葬儀の様子を「爪はちき」をしなから「辻に立つて見る人」の世界であり、金村家の莫大な財産のゆくえを噂するなかで富裕者にたいする悪感情をあらわにする仲働きの福や安五郎の世界であり、おなじく車夫の茂助や物縫いの仲や小間使いの米や髪結の留の世界である。さらには、与四郎に「抵挡」として邸を収奪された者の、なにより愛妻を「従三位の軍人様」に奪われた腰弁時代の与四郎の、そして本節冒頭で述べた『わかれ道』のお京らの——すなわち、全人口の一・一パーセントに満たない存在以外の、圧倒的多数の者たちの世界である。

その“彼ら”をまなざす“われわれ”の視線がもつとも具体的に現出しているのは、地の文、とりわけ語り手が町にあたえている呼称である。

次節ではその語りの態様を確認しながら、『われから』がいかにも“われわれ”の視点を深く内在化させたテキストであるかを析出しておきたい。その作業は、一葉のテキストがいかにも“彼ら”の世界を相対的に捉えているかを論ずる後節へと、接続されるはずだからである。

三・呼称の変移

『われから』研究史においては、小森陽一氏から「お町のことを「奥様」「奥さま」と呼びながら、金村家の崩壊を語る「語り手」の言葉。」⁷は『女中』たちの『こゑ』と同じ位相にある、家の内部の潜在的外部としての言葉。⁷であるとの指摘がなされ、関礼子氏からも「奥、女、中、的。」⁸（傍点原文）であると同時に「世間の視線と同質化。」⁹した複数的な視線をもつ語り手の位相に着目した論考が提出された。他方、藪禎子氏からは「奥様、奥方、町子、お町が随時用いられる。これは、表記の不統一という以上に、表現意識の問題。」⁷であるとの新たな見解が示され、戸松泉氏からも「語り手は表層で名流夫人らしからぬ「奥さま」の未成熟さを敬語を使用してアイロニカルに語りつつ、一方で「町子」が深層に抱え込んだ孤独と不安の必然性を追っている（語り手はこの二層の語りのなかで呼称の区別を明確に施している）⁷」との示唆深い意見が提示されている。

それら先学の指摘をふまえつつ、改めてテキストを読みなおすと、語り手は町について物語るさい、わ・ず・か・三・場・面・を・の・ぞ・け・ば、一貫して「奥方」あるいは「奥さま」「奥様」と、隔たりを保って呼び称えている。それが偶然的の所為でないことは、次の事柄から確認することができるだろう。

恭助の誕生祝賀会、あでやかに美装した町が宴に華を添える場面（八）。「派手者の奥さま此日を晴れにして、新調の三枚着に今歳の流行を知らしめ給ふ（…）町子はいとゞ方々の持はやし五月蠅く、奥さん奥さんと御盃の雨の降るに」。ここで例外的に語り手が「町子」と語るのは、招待客からの「奥さん奥さん」の呼びかけと混同しないための配慮と思われるが、それでも一向に違和がないにも関わらず、語り手はこの直前では相変わらず「派手者の奥さま」と語っており、「派手者の町子」とは決して語らない。

この地の文から分かるように、語り手の「奥さま」なる敬称へのこだわりは、「今歳の流行」を追うことができ、その奢侈を誰はばかることなく誇示もできる——そんな華やかな驕りを身にまとわせた主人公の特権的身分性に対する、語り手側の距離感のあらわれと考えることができるだろう。距離感とは、「奥さま」としての身分にたいする敬意や憧憬、羨望の念に、「奥さま」ならではの「我がまま」な「気随」や「機嫌かい」にたいする懐疑や批判の念が入り混じった、隔たりの感覚の謂であ

る。朴訥な貧書生の千葉にしばしば町が焼く、あくまで自己本位な「お節介」をめぐって、語り手が「自慢も交じる親切」と冷ややかに言い放つ箇所は、その後者の念——懷疑と批判——がもつとも露わになった場面であるが、それでも、近隣で有名となっている朝の入浴習慣もふくめ、気ままで「贅沢」で「蕩楽」なふるまいの一切が許される町の特別な身分性それ自体にたいして、語り手が礼節をもって応じていることは確かである。主語「奥さま」の述語に尊敬語「給ふ」が用いられていることが、それを如実に示している。

関礼子氏が指摘するように、テキスト全体を見渡しても、語り手が行為主体である町を語るさいは、「奥様」〔…〕仰しやれば、「奥さま憐がり給ふ」、「奥さま爪はぢき遊ばせば」、「お指図し給ふ奥さまの風を見れば」、「奥様は暫時のほど二階の小間に気づかれを休め給ふ」のように、敬称—尊敬語によつて語られる場合が多い⁷²。当時の女性の書き物、とりわけその地の文が『源氏物語』のそれ（ないし草子地）を至高の規範としていたことは平田由美『女性表現の明治史』に詳らかだが⁷³、やはり『源氏』を正典と定めていた萩の舎で文学的リテラシーを獲得した一葉も、女性の書き手に要請されていたこの文体コード——『源氏』風の「優美」「高尚⁷⁴」——に則つて、敬語の多用される物語風の語りを踏襲したとも考えられる。だがそれなら尚のこと、なぜその語りのスタイルは首尾一貫していないのだろうか。つまり、残りの二場面に限って、なぜ語り手は町を敬称—敬語で語ることを止めているのか。

残る二場面のひとつは、(九)に登場する稲荷の社前での町の物思いの場面。露伴と緑雨の議論的となった、あの場面である。やや長くなるが、その全体を引用する。

(九)

此家は町子が十二の歳、父の与四郎抵当ながれに取りて、夫れより修繕は加へたれども、水の流れ、山のたゞずまい、松の木がらし小高き声も唯その昔のまゝ成けり、町子は酔ごち夢のごとく頭をかへして背後を見るに、雲間の月のほの明るく、社前の鈴のふりたるさま、紅白の綱ながく垂れて古鏡の光り神さびたるもみゆ、夜あらしさつと喜連格子に音づるれば、人なきに鈴の音からんとして、幣束の紙ゆらぐも淋し。

町子は俄かに物のおそろしく、立あがつて二足三足、母屋の方へ帰らんと為たりしが、引止められるやうに立止まつて、此度は狛犬の台石に寄りかゝり、木の間もれ来る座敷の騒ぎを遙かに聞いて、あゝあの声は旦那様、三味線は小梅さうな、いつの間に彼のやうな意気な洒落ものに成り給ひし、油断のならぬと思ふと共に、心細き事堪えがたう成りて、締つけられるやうな苦しさは、胸の中の何処とも無く湧き出ぬ。

良久しうありて奥さま大方酔も覚めぬれば、万におのが乱るゝ怪しき心を我れと叱りて、帰れば〔…〕

「奥さま」から「町子」への呼び名の変移について、さしあたり考えられる理由は、町の内言「あの声は旦那様、三味線は小梅さうな、いつの間に彼のやうな意気な洒落ものに成り給ひし、油断のならぬ」に焦点化するあまり、語り手がそれまで町に対して取りつづけてきた距離感を喪失した、というものである。しかしこの場合とまったく同様に、恭助と「藝者」や「芳原の式部」との遊宴三味気をもむ町の心中思惟に焦点化したテキスト冒頭では、語り手はくりかえし「奥方」と語っているの

だ。語り手がここに来てとつぜん敬称で語ることを止めた理由、語り手が行為主体に対する距離感を縮めた理由は、他にあることになる。

おそらくその理由は、この場面がまさしく町の運命の分岐点であり、物語の転換点にあたる場面であることと深く関わっているだろう。つまり当該場面こそ、それまで「金村の奥様」「金村が妻」として「彼ら」の世界の「女王」に君臨していた町——内田魯庵は町のモデル島田政子について「才貌双絶の艶名を鳴らし」「…」今なら女優といふやうな眩しい粉黛を凝らした島田夫人の美装は行人の眼を集中し、番町女王としての艶名は隠れなかった。「…」知らないものは藝者でも無し、娘さんでも無し、官員さんの奥様らしくも無しと眼を睜つて美貌と美装に看惚れた⁷⁵。『思ひ出す人々』一九一五（大正四）年）と回想している——が、結末に用意された転落に向かつて、下降への階段に足をかけた場面にほかならないからである。

じつさい物語進行上、この場面を境として、町がしだいに憂愁を深めてゆく出来事がつぎつぎと生起する。(十)「我れと我が身に持て悩みて奥さま不覚に打まど」うほどの「鬱ぎ症」の悪化、(十一)「奥さま〔…〕顔みらるゝ事愁らやと思しぬ」という「飯田町のお波」の発覚、(十二)「奥さま〔…〕心に籠めて愁はしげの体」となる恭助からの養子縁組の提案。そして終節(十三)で「さまざま物をおもひ給へば、奥様時々お癪の起る癖つきて」「奥様いと憂き身になり」、ついに金村邸から追放される「憂かりし」「夜」へと至るのである。

慣れ親しんできた風雅な自邸の、おもいがけず不気味で禍々しい別貌に、町が「にわか物のおそろしく」なるこの場面は⁷⁶、それまで親密だったみずからの世界にとつぜん裂け目が入ったさまを暗示している。これまで自身が立っていた確かな世界が足元から流失し、まったく異質な世界に呑み込まれてゆくさまを暗示しているともいえようか。つまりこの「怪しき」場面は、それまで安住してきた「彼ら」の世界が急に彼方に遠のき、「彼ら」の世界をまなざすこちら側の世界に、町が転位する未来を象徴する場面にほかならない。ちなみに、「才貌双絶の艶名を鳴らし」、「番町女王」（前掲『思ひ出す人々』）とまで形容された、当代きつての名流夫人であった町のモデル島田政子は、邸を追放されたのち「さる商家のおもひもの⁷⁷」（二葉『蓬生日記』）——つまり前章で確認したように、使用人と同視される「妾」（柳浪の前掲書名）へと転落してしまう。

語り手は、以下に示すように、町の視線の方向性をきわめて精確に説明することを通して、その転位、すなわち後の転落を、ここで予兆的に物語っているのである。

まず町は邸宅を後にして「庭へ出で」、「お稻荷さまが社前なるお賽銭箱へ仮初に腰をかけ」る。そこで、邸の建つ前方を向いた身体をねじって「背後」を振り向き、打ち捨てられすつかり寂れてしまった社をながめるうちに、その「人なきに鈴の音からんとして、幣束の紙ゆらぐ」様子に「俄かに物のおそろしくなり、立あがつて二足三足、母屋の方へ帰らんと為たりしが、引止められるやうに立止まつて、此度は狛犬の台石に寄かゝり、木の間もれ来る座敷の騒ぎを遙かに聞」く。

こうして町は、この邸のかつての主が富貴繁盛を祈願して勧請したのであろう⁷⁸。「稻荷」神社がもうけられた庭奥の昏がりの中から、はるか前方のまばゆい光源を見、その下で盛大に繰り広げられている祝宴の主役、明らけし治世の貴顕である恭助の唄声にしばし耳を澄ますのである⁷⁹。闇から光の方向へ、暗から明の方向へと望見される視線が強調された語りの構図である。

この一連の語りがすべて「町子」で統一されている理由は、はるか彼方の「彼ら」を振り仰ぐその

視線が、「われわれ」の視線にほかならないからだ。この瞬間、町はたとえてみるならば、豪壮にして雅趣あふれるこの庭園邸宅を「抵当」として収奪された敗者の側に、つまり「彼ら」の世界に参入しようとして果たせなかった圧倒的多数の「われわれ」の側に立って——「引止められるやうに立止まつて」——しまっている。「心細き事堪えがたう成りて、締つけられるやうな苦しき」は、この瞬間を境として、住み慣れた「彼ら」の世界から脱落し、他なる世界へと移ろつてゆく予感から生じた、町の底知れぬ不安感をあらわしているだろう。思えば一葉も、萩の舎通いに象徴される本郷山の手生活に訣別して、吉原裏の未知の塵中へと移る前後、「心ぼそしとはかゝる時をこそ。」、「心ぼそくのみある。」と綴っていた。

このように、かかる場面が「われわれ」の世界への町の転入を暗示する場面であればこそ、「われわれ」の視点を内在させる語り手は、わざわざ敬称—敬語を用いて、他人事のようによそよそしく語ることを停止しているわけである。その証拠に、「良久しうありて奥さま大方酔も覚めぬれば」、つまり町がこの「怪しき」感覚から解放されて「奥さま」としての我を取り戻すと、語り手もたちまち他人行儀な敬称語りに戻ってしまう。

だが、ふたたび語り手が行為主体である町から敬称をとりはずす場面こそ、いま述べてきた町の不吉な予感がとうとう現実のものとなる、テキスト終端部なのである。

金村家の財産権をめぐって交わされる、町と恭助との息詰まるようなその応酬場面においては、語り手は全財産を恭助にうばわれ追放される町を、敬称どころか三人称「町子」で語ることにすら放擲し、町と完全に一体化した語りを展開する。ここでは「恭助」のみが三人称で語られ、町をめぐるあらゆる人称は捨て去られる。出来事は「憂かりしはその夜のさまなり、車の用意何くれと調べさせて後、いふべき事あり此方へと良人のいふに、今さら恐ろしうて書齋の外にいたれば」といったぐあいに、終始一貫して町の視点から物語られており、ここに至つてようやく語り手は町にたいするいっさいの隔たりを取り払い、のみならず、いわば完璧な視点人物となった町と渾然一体化するのである。

西川祐子氏は「登場人物お町にたいして作者一葉が深く思い入れをするかとおもえば、他方では距離をおく、一種ねじれた視線³⁾」を指摘したが、「彼ら」の世界から「われわれ」の世界へと町が転位、転落した場合のみ彼女と同化し、それ以外の場面では、たしかに彼女に終始「距離をおく」語りのありようからは、ひるがえつてその語り手の存在自体が、「われわれ」の世界にきわめて自覚的に自己同一化する語り手の存在自体が浮き彫りとなるだろう。同時に、人名録ブームのなかで人々が富裕な紳士たちへと振り向けた、たぶん好奇心まなざしを超えた語り手の特異な視線——「彼ら」の世界を相対化しようとする視線——が、そこから透けて見えもするのである。

語り手あるいはテキストは、「彼ら」の世界をどのようなものとして、あるいは「彼ら」をいかなる人物として眼差しているのだろうか。次節ではそれを見定めてゆきたい。

四・町の物思い／紳士たちの欲望

『われから』において、「彼ら」に向けられた「われわれ」の視線のありようが、もともと批判的なかたちで現出しているのは、(十一)の次の場面である。

都合の悪るいは此処の家には一人も子宝が無うて、彼方に立派の男の子といふ物だから、行々

を考へるとお気の毒なは此処の奥さま、何うも是れも授り物だからと一人が言ふに、仕方が無い、十分先の大旦那がしぼり取った身上だから、人の物に成ると言つても理屈は有るまい、だけれどお前、不正直は此処の旦那で有らうと言ふに「…」己れは斯う見えても不義理と土用干は仕た事の無い人間だ、女房をだまくらかして妾の処へ注ぎ込む様な不人情は仕度でも出来ない、あれ丈腹の太い豪い^{あち}のでは有らうが、考へると此処の旦那も鬼の性さ、二代つゞきて弥々根が張らうと、聞人なげに遠慮なき高声、

雲上の他人事として無責任に、意地のわるい好奇心も交えながら、ここでふたりの下男下女が主として語っていることからは、「豪い^{あち}」貴顕紳士であるはずの恭助の裏面である。おそらく「われわれ」のうちに残存しているのだろう儒教的倫理観からすると、あまりに「不正直」「不義理」「不人情」な蓄妾であり、家付きの妻の眼を掠めて財産を意のままにするという意味では、あまりに過ぎた強欲性である。

貴紳をめぐるこうした露悪的な発話は、テキスト初出からおよそ一〇年ほどのちの発兌になる、前掲した、山路愛山『現代金権史』や横山源之助『明治富豪史』の言説内容と、おどろくほど似通っている。とりわけ、この噂話と同様の、蓄妾などの乱脈な私生活、不当な手段による致富という、大別すれば富豪たちのふたつの裏面を、事情通たちが一人称で語る『明治富豪史』の「流説風の語り⁸³」を先取りしているかのようなのである。

じつは『現代金権史』と『明治富豪史』には、貴顕たちの多くに共通する、もうひとつの看過しがたい裏面が語られている。「金力」万能の時代を象徴⁸⁴するとともに「金力と政治権力とが不可分に融合してしまった明治国家の実態⁸⁵」をも示していると今日評されるその裏面とは、華族との閥閥形成とそれによる権勢拡大である。前掲『富豪の時代』によれば、近代日本の最上層にたどりつくためのさらなる足掛かりを求めて、富豪紳士たちが華族との政略婚に乗りだすのは一八九二〔明治二五〕年ごろからのことだが、ちょうど『われから』初出の翌月には、華族と姻戚関係をむすんでいた三井高棟、岩崎弥之助・久弥に実業家として史上はじめて爵位がさずけられ、世上の話題となっていた⁸⁶。

一八九三〔明治二六〕年、糊口の文学の道を捨てて実業につくことを決意したさいの一葉の日記文は、こうした富豪たちの栄誉栄華をながめた後ではいっそう悲痛だが——「もとより櫻かさしてあそひたる大宮人のまとゐなとハ昨日のはるの夢とわすれて「…」厘が毛なる利をもとめんとす されハとて三井三びしが豪奢〔前田愛編『全集樋口一葉』では「おごり」とルビ〕も願はず「…」母子草のは、と子と三人の口をぬらせば事なし」〔につ記〕一八九三〔明治二六〕年七月と表書、これもまた、富豪紳士たちの「途方もない威信上昇時代⁸⁷」のなかでこそ生みだされた表現であることは間違いない。前掲『富豪の時代』は、横山源之助の言説「日本の富豪も近頃大名華族または新華族と縁組するのがだいぶ流行つて来た」を引きながら、同時代、富豪たちのあいだに華族との「姻戚文化⁸⁸」が浸透していたことを析出しているが、そうした金力にあかせた閥閥獲得に象徴されるように、まさにこの頃、富豪紳士たちは華々しい「豪奢」「おごり」の時代を迎えていたのである。

かかる時代状況を俯瞰したうえでテキストに眼を戻して考えるに、町の「さまさま」な「物」「おもひ」の具体的内容とはいったい何であったのだろうか。本節では、「旧弊な制度の束縛の中に生き

る既婚女性。」すなわち「儒教的徳目の前に個を捨てるように育てられてきた女」性の抱え込む「やりきれない。」煩悶という先学の解釈に首肯しつつ、危機的な心身状態をもたらすほどの、その切迫した物思いの理由を別の角度からさらに検討してみたい。

町が金村邸を追放される直接原因は、癩の発作を介抱する書生との仲を怪しんだ風評ではあった。だが、「さまざま物をおもひ給へば、奥様時々お癩の起る癖つきて、はげしき時は仰向に仆れて、今にも絶え入るばかりの苦しみ」と一息に語られているかぎりにおいて、物思いさえなければ癩の発作は頻発せず、「無骨一遍律儀男の身を忘れての介抱」も要されず、したがって「人の目にあやしく、しのびやかなの叫び」も生じなかったことになる。してみれば町の運命を暗転させた真の原因こそは、この彼女の物思い、懊悩であったことになるわけである。町はなにを深くおもつて、かくもはげしく懊悩していたのか。

「恋しう懐かしき」「兄とも親とも頼母しき」恭助があるうことか外に妾を蓄えており、のみならず、その愛妾との間に嗣子も設けていたから、と考えるのは早計であろう。というのも、町がそれら衝撃的な事実を下男下女のうわさを通して知る以前から、彼女の懊悩はすでに始まっているからだ。例の稲荷の社前で町が異様な心的動揺を体験した、まさにその晩から、彼女はつぎのような深刻な気鬱におちいったのである。

「綺羅星」のごとき貴顕紳士が大勢つどい来て、かつてない大盛況のうちに宴が散会した深夜、酩酊半睡していた恭助のかたわらで「唯ならぬ」「面持」でいた町は、恭助に就摩できない理由を尋ねられて、「例に似合ず沈みに沈んで」こう発話している。

「私は言ふに言はれぬ淋しい心地がするので御座ります」「私は貴君に捨てられは為ぬかと存じまして、夫れで此様に淋しう思ひまする」「愷気沙汰で申のでは御座りませぬ、今日の会席の賑かに、種々の方々御出の中に誰れとて世間に名の聞えぬも無く、此やうのお人達みな貴郎さまの御友達かと思ひますれば、嬉しさ胸の中におさへがたく、蔭ながら拝んで居ても宜いほどの辱さなれど、つくく我が身の上を思ひまするに、貴郎はこれより弥ますくの御出世を遊して、世の中広うなれば次第に御器量まし給ふ、今宵小梅が三味に合せて勸進帳のいくさり、愷気では無けれど彼れほどの御修業つみしも知らず、何時も昔しの貴郎とおもひ、浅き心の底はかと無く知られまする内、御厭はしさの種も交るべし、限りも知れず広き世に立ちては耳さへ目さへ肥え給ふ道理」「嬉しき縁にて今斯く私が我まゝをも免し給ひ、思ふ事なき今日此頃、それは勿体ないほどの有難さも、万一身にそぐなはぬ事ならばと案じられまして、此事をおもふに今宵の淋しき事、居ても起ちてもあらぬほどの情なさ」。

長々とした、意味深長な発話である。あれこれと表現を変えながらも、詰まるところ、ここで町が訴えようとしている事柄——それは、想像していた以上の出世をすでに遂げ、さらなる出世の高みも視野に入りつつあるような恭助の無限大の可能性に引き比べた場合の、みずからの身の卑小性である。「弥ますくの御出世を遊して」「限りも知れず広き世に立ちては耳さへ目さへ肥え」「遂には倦かれ」「捨てられ」るようになることを、町はつよく危惧する。しかし、それが同時代の婦徳訓においてきびしく諫められていた。「愷気」ではないとも、彼女は強調する。つまり町は、恭助の「肥え」た耳目を満足させる存在が、今宵酒席に嬌色を添えた「小梅」ら花柳界の女たちではないことは、よ

く承知しているのである。もとより、どれほど恭助が彼女たちと遊び興じようと、あるいは妾宅に困おうと、家付きの正妻である町の座はゆるがない。現に物語冒頭から「紅葉館」や「芳原」など一流どころでの、当代きつての美女たちとの遊興三昧はおこなわれているのである。

それでもなお町が——恭助の政治家生活を資金面から支えることも出来（心安う志す道に走って、内を顧みる疚しさの無きは、これ皆養父が賜物ぞかし）、「新聞」の伝える「政界の事、文事」について恭助と談話を交わすことも可能で²、「華道」も「琴」もたしなみ、ひとたび外出をすれば「扮装のよきと天然の美しきと二つ」を併せもつその美貌から「新橋」に見誤られるほどの町が、恭助との縁を「身にそぐなはぬ事ならばと案じ」なければならぬのは、きわめて不可解である。

前の町の発話においてなにより看過しがたいのは、この「身にそぐなはぬ」という言葉にほかならない。現時点においてすら「嬉しき縁」によって恭助と結ばれたことを「勿体ないほどの有難さ」と語る町は、この上さらなる「御出世」を叶えて世界を拡大させてゆく恭助に、自分が「そぐなはぬ」ようになることを、すなわち釣り合う「縁」者でなくなることを、激しく恐れ、深く憂えているのである。ならば町は、いかなる存在ならば恭助にそぐわしいと考え、それに怯え、悲嘆しているのか。

ここでひとつの示唆を与えてくれるテキストが、一章で取り上げた『うもれ木』である。かつて中村光夫氏は、樋口一葉の文学について「ひとつの有機物のような統一性を持っている³。」³るとの慧眼を示したが、一流文芸誌『都の花』に掲載され作家一葉の実質的な誕生日となった『うもれ木』と最晩年作『われから』も、意外なことに検討されるべき多くの共通項を持っているのである。

金村恭助と同様に「金満家」の「一人娘」の「習養子」となった『うもれ木』篠原辰雄は、「二年とたたぬ間に親女房とも引き続いて病死」したため、金村与四郎の遺産総額と同額の「幾万の財産」を相続する。そののち辰雄は種々の社会事業に尽瘁し、恭助とおなじように「名をも知らるる境界」の「立派の紳士」となる。その辰雄と縁あつて親しむようになった「世間見ず」の入江蝶は、恭助との縁を「勿体ないほどの有難さ」とよろこぶ「世間見ず」の町とおなじように、辰雄に「睦みられるゝ事もつたいなく嬉しく」思う。しだいに入江蝶は、恭助に「捨てられ」「厭は」れ「倦かれ」ることを危惧する町とおなじように、辰雄に「飽かれまじ厭われまじ喜こばれたし愛されたし」と願うようになる。その蝶が動揺する事柄こそが、「何某子爵最愛の娘、是非かの人〔篠原辰雄〕にとの申込みの噂」なのだ。

物語結末において、町に背信する恭助とおなじように蝶を欺く辰雄が、じじつ「旧大名の幾万石」の「華族の躰になる」誘いを再三にわたつて受けていたかは不明ではある。だが、恭助とまったく同様に、「誕生日の祝ひ」に貴顕紳士が蝟集する「立派の紳士」である辰雄に相応する姻戚のかたちが、ここに明示されているといえよう。

同時代において、「紅葉館」に集う数寄者富豪たちのあいだに華族との「姻戚文化⁴」⁴が浸透していたことは、すでに確認した通りである。その具体的人物像を確定できない「倶楽部のお仲間」や「水曜会のお人達」は措くとしても、当夜、金村邸に乗りつけた絢爛豪華な車が示すその権勢ぶりに、語り手もおもわず感嘆したような「誰れとて世間に名の聞えぬも無」い恭助の「御友達」であれば、他聞にもれず、華族との縁組を欲望していたはずであろう。なかにはすでにそれを成就させた者もいたにちがいない。もしくはその「お友達」自体が、議会を通じて恭助と知己を得た貴族院議員の華族——たとえば一葉と同門の鳥尾広子の父小弥太は貴族院議員をつとめる勲功華族である。⁵——である可能性もあり、『うもれ木』の場合のように、逆にかから華族が富豪紳士との縁を欲望するケースも

あるだろう。

ちなみに恭助のモデル島田三郎が昵懇だった澁澤栄一は、嫡男篤二を橋本実梁伯爵の令嬢敦子と婚姻させており、物語内時間にはその長男が誕生していた⁹⁹。一葉周辺でいえば、萩の舎と関係の深かった前田家で、前田利同伯爵の妹苞子が一八九二(明治二五)年に三井高棟と婚姻(高棟は再婚)している⁹⁷。

町はしばしば眼を通していろいろらしい「新聞」紙面を通して、またはその記事をめぐって交わされる恭助との語らいを通して(「旦那さま奥さま差向ひ、今朝の新聞おし開きつゝ、政界の事、文界の事、語るに答へもつきなからず、他処目うら山しう見えて、面白げ成し」)、あるいは人名録の変種『華族名鑑』や⁹⁸、華族制度について盛んに論じていた『国民之友』などの総合雑誌⁹⁹を通して、この紳士たちの動向とその欲望をどうぜん認識していたとおもわれる。新聞社主と政治家を兼任する夫をもつ町は、同時代女性のなかでは、それら活字メディアないし世事情報にアクセスする機会が比較的多かったと推測されるからだ。

そのような町は、誕生祝宴の晩、一流藝妓の冴えた三味にあわせて「勸進帳のくさり」をさらりとうたいこなすその「意気」な声音を耳にした時から、さらに宴の退け時には「人々が迎ひの車門前に綺羅星とならびて、何某様お立ちの声にぎはしく」といった壮麗な光景¹⁰⁰を現前させることのできるその「器量」の大きさを思い知った時から、あるいは恭助の内奥にはいつか、宴に臨席してくれた著名な「御友達」と同じ欲望の火が灯るのではないかと案じ始めたのではあるまいか。

ここで参照されなければならないのは、町の母・美尾の物語である。維新を少し過ぎた年の四月、上野の桜の物見遊山に夫の与四郎と出掛けた美尾が「何処の華族様」の一行に遭遇する場面の語りは、美尾のパートの中でもきわめて印象的な部分であろう。

「木の間の花に衣服の綺羅をきそ」う晴れやかな人々のなかでも、ひときわ豪華な装いでもって他を圧倒するその華族一行が、車から降りて近世から名高い高級料亭「八百膳」に入ってゆく。その刹那の彼らの様子を微細に語ることをつうじて、語り手は「華族様」の放つ威光を効果的に表現したうえで——「派手なるは曙の振袖緋無垢を重ねて、老け形なるは花の木の間の松の色、いつ見ても飽かぬは黒出たちに鼈甲のさし物、今様ならば襟の間に金ぐさりのちらつくべきなりし(…)」大方にお立派なといひて行過ぐるも有り¹⁰¹——、その威光の美しさにすっかり魅せられてしまった美尾を物語るのである。「美尾はいかに感じてか、茫然と立ちて眺め入りし風情、うすら淋しき様に物おもはしげにて」「我れと我が身を打ながめ唯悄然としてあるに」「逃げ出すやうにして一散に家路を急げば」。

この日から美尾は「はかなき夢に心の狂ひて」「有し我れにあらず、人目無ければ涙に袖をおし浸し、誰れを恋ふると無けれど大空に物の思はれて」、その挙句、夫と子を捨てて「従三位の軍人様」の元へと赴いてしまうのである(「金紋の車」を美尾の元へ寄こしたその「軍人」の爵位を推定すれば、たとえば一葉と同門だった中牟田恒子の父倉之助が「従三位」海軍中将の「子爵」であった¹⁰²)。

この美尾の物思いは、皇室の藩屏あるいは国民の儀表としての華族が所持する威信力¹⁰³に惹かれ、富豪紳士たちが華族との縁組をつよく欲望するようになった一八九六(明治二九)年における町の物思いと、きわめて皮肉なかたちで接続していると思われるのである。華族の豪華な威光にあこがれて父と自分を捨てて出奔した母の物語があればこそ、町の危惧はつぎのように確信へと変容せざるを得なかったのではないか——「孰れも取止め無き取こし苦勞で御座りませうけれど、何うでも此様

な気のするを何としたら宜う御座りまするか、唯々心ぼそう御座ります」。

ここで「打なく」町に対して、一方の恭助は「愚痴の僻見の跡先なる事を思召、悵気よりぞと可笑しくも有りける」と語られているかぎりにおいて、町の危惧は単なる杞憂ということになる。そもそもテクストには、同時代の富豪紳士にならって恭助が華族との「姻戚文化」を受容していたことを示唆するいかなる表現も存在せず、本節の読解は牽強附会に過ぎるかもしれない。町の物思いをめぐって縷々述べてきた本論は、あくまで試論ではある。

ただ、テクスト各所にちりばめられた叙述は、恭助がまぎれもなく、金力と権力とによって明治日本を席捲していた貴顕紳士階級に属していることを指し示している。その人物像には、むしろ実際の島田三郎以上の紳士性、特権性が刻印されているかもしれない。たとえば、祝賀の宴を自邸で開催し賓客をもてなすという所為も、彼が当代一流の貴顕であることを証している。前掲『富豪の時代』によれば、紳士たちのあいだでは、私邸での賓客接待が、社会的威信をしめす、きわめて有効な「形式¹⁰⁴」として流行していたからであり、恭助が自邸で催した祝宴は、その細部の様子においても、三井を総帥する益田孝のそれと近似しているのである。「○三井物産會社の益田孝氏ハ昨日品川舊御殿山の新居へ朝野の紳士を招きて移徒の宴を開かれ芳町の美人ハ云ふに及はず柳橋の藝妓も數名席上に陪し猷酬半バ頃に例の清元お葉の妙音で數曲を奏で又今日ハ同社員の者を招かるゝとか¹⁰⁵」(『郵便報知新聞』一八七九〔明治一二〕年四月二八日)。

だが前述したように、恭助が貴顕であることを端的に明示している記号こそは、やはり「紅葉館」であるにちがいない。安田善次郎や三野村利助たちの名声に象徴されるその紅葉館文化のなかに身を置く恭助の周辺には、財と威信への渴望、階層上昇への欲望、政治的野心、権勢支配欲などがつねに激しく渦巻いていたことは間違いないであろう。紳士たちは「和敬静寂¹⁰⁶」「質朴静閑¹⁰⁷」な数寄の身振りを装いつつも、それら功利的欲望をたえず駆動させ、利と名を貪欲に求めて互いにしのぎを削り合い、あるいは密かに手を結び合うといった具合に、権謀策略をめぐらせ、競合と背信を飽くことなく繰り返していた¹⁰⁸。紅葉館に蝟集するそれら紳士と深く関わり、近代日本の権力の中樞を知らぬ恭助が、町の知る「昔しの貴郎」から変貌を遂げていくのは、当然のなりゆきであろう。

物語冒頭における、帰宅のおそい恭助を恨む町の心中思惟は、連日の遊興にたいする繰言にちがいないが、じつは恭助の人物像の変貌を物語った箇所として読むべきなのかもしれない。「昔しは彼のやうに口先の方ならで〔…〕今日此頃のお人の悪るさ、憎くいほどお利口な事ばかりお言ひ遊して、私のやうな世間見ずをば手の平で揉んで丸めて、夫れは夫れは押へ処の無いお方」。結局のところ町の物思いは、「不正直」「不義理」「不人情」とも噂される「人の悪るさ」、「お利口」さ、「押え処の無」さをそなえて、名実共に「彼ら」の世界の人間となった恭助にたいする漠然とした、だが強い不信にほかならなかつたのである。

その不信は、物語結末で、町の鋭敏な予感どおり現実となる¹⁰⁹。それまでは町の処遇をめぐって逡巡しつつも、最終的には彼女の行く末より公的領域内での自身の将来を、あるいは紳士社会内部における自身の外間を優先させ(「内政のみだれ世の攻撃の種に成りて、浅からぬ難儀現在の身の上にかゝれば」「さし置がたき沙汰とかくに喧しく、親しき友など打つての勸告に」、冷淡に町を「突のけてあとをも見ず」、さらにはその機に乗じて金村家資産も掌中に収めるといふその政治的振る舞い)こそは、「紅葉館」紳士文化の賜物であつたのかもしれない。

五・紳士たちと一葉

語り手は、かかる結末場面、町に完全に寄り添った語りを通して、彼女の悲劇を語ると同時に貴顕紳士恭助の実相を暴露しているわけだが、同テキストが実話にもとづくモデル小説であることを考えると、その語りの構造はセンセーショナルな気配を孕んでいたともいえる。というのも、掲載誌『文藝倶楽部』の一般読者（後述）は別として、「紅葉館」とつながりの深かった『読売新聞』とその周辺のメディア関係者たちの間では、同テキストが『毎日新聞』社主・政治家島田三郎の私生活に材を取ったものであることが知られていたはずだからだ¹¹⁰。

『不如帰』（初出『国民新聞』一八九八〔明治三二〕—一八九九〔明治三三〕年）とならんで近代最大の読者を獲得した新聞小説『金色夜叉』（初出『読売新聞』一八九七〔明治三〇〕年）は、巖谷小波との契りを破った「紅葉館」の美人女中を尾崎紅葉があしざまに罵倒した体験をもとに創作されたともいわれるが¹¹¹、この流説からも伺えるように、同館には紅葉や小波ら硯友社系作家をはじめ、同館設立発起人である『読売新聞』社主・子安峻にかかわりをもつメディア関係者たちも少なからず出入りしていた。硯友社同人であった義弟・乙羽の力を得てメディア王国を築いた博文館社主・大橋新太郎もその一人だったのであり、彼こそは同館美人女中のお須磨が巖谷小波から心を移した相手であったといわれる（須磨はのちに大橋新太郎夫人となる）。そして彼らのすぐ傍らには、『読売新聞』主筆となっていた高田早苗——改進黨系衆議院議員として島田三郎と旧知の政友関係にあった——が存在していたのである。

一葉は、自分の才能を高く評価し、博文館の看板誌『太陽』『文藝倶楽部』に当該テキスト『われから』をはじめとした自作を次々と掲載してくれた大橋乙羽に向けて¹¹²、あるいは『われから』初出翌月には『読売』入社を勧めてくれた高田早苗に向けて、あるいは『小説八宗』（一八七九〔明治三二年〕）などの批評文掲載によって『読売』と関係の深かった斎藤緑雨に向けて、あるいは一葉に寄稿を依頼していた『読売』記者の関如来に向けて、または一葉宅を訪れ貧困問題などについて熱く語り合った『毎日新聞』記者の横山源之助や、同じく『毎日』の岡野正味に向けて——つまり文名が顕らかになるにつれて競うように自分に接近してきたメディア関係者たちに向けて、彼らのよく知る著名な言論人島田三郎のプライベートな別貌を、いわば「被害者」町の側から語っていたことになるのである。つまり一葉は、町と恭助の会話にも登場する「文界」の人々に宛てて、「文界の事」それも「文界」を代表する、いわばもつとも良心的な言論人の裏面を綴っていたわけである。

テキストは恭助に対して、下働きたちの噂話に仮借しながら次の否定的形容——「不正直」「不義理」「不人情」「鬼の性」「二代つゞきて弥々根が張らう」——を浴びせる一方で、町にはそれら言辭と鋭く対置される形容を与えている。

あらためて、町の人物特徴をめぐる語りを列挙してみたい。「奥様が派手作り」、「夫れ金村の奥様がお目覚だと人わる口の一つに数へれども、習慣の恐ろしきは朝飯前の一風呂（…）人の耳には洒落者の蕩楽と取られぬべき事」、「猶相かはらぬ贅沢」、「いまだに娘の心が失せで」、「一家の妻のやうには無く」、「一人に物を遣り給ふ事は幼少よりの蕩楽」、「一ト口に言はゞ機嫌かひの質なりや、一ト言心に染まる事のあれば跡先も無く其者可愛ゆう、車夫の茂助が一人子の与太郎に、此新年旦那さま召おろしの斜子の羽織を遣はされしも深くの理由は無き事なり、仮初の愚痴に新年着の御座りませぬよし大方に申せしを、頓て憐みでの賜り物」、「我まゝも其のまゝ、氣随も其のまゝ」。

これら表現は、彼女が派手好きで贅沢で気まぐれであることを、あるいは彼女のわがままな側面や稚氣を語ってはいるが、恭助の形容詞「不正直」「不義理」「不人情」「鬼の性」が指示するような、他者にたいする周到な計算性もしくは徹底した無関心性、強欲な功利性をいささかも語ってはいない。示唆すらもしていない。むしろ、ひとたび憐憫の情に駆られるや、惜しげもなく高価な着物を車夫や書生に与えてしまうような、「父親ももなく憂がりし」計算の無さや金銭への恬淡さは、恭助とはきわめて対照的であるにちがいない。

感情だけが先行したその行動によって、着物をひそかに欲望していた下女たちの怨嗟をわれ知らず買ってしまうのも、近隣からの嫉妬と反発を知ってか知らずか朝の入浴を止めないのも、奥様らしからぬ濃厚な装いを好むのも、無聊を慰めるためにわざわざ深夜に書生部屋へと足を向けてしまうのも、よりにもよって癪の介抱を「隠れの方の六畳」で行わせてしまうのも——要するに町が転落してしまうのは、彼女がかかる政治的な打算性を徹頭徹尾欠いているためなのである。

前節では、町の転落の真因を、彼女の「物思い」——名実共に「彼ら」の世界の人間となり、華族との閥閥形成さえ欲望しているかもしれない恭助にたいする不信から生じた「物思い」——であると述べた。だが正確には、その「物思い」が単独で町の転落を準備したわけでは勿論なく、物を思うあまりのその振る舞いがまったく政治的配慮を欠いていた、ただその一点ゆえに、町は追放の憂き目に遭わなければならなかったのである。

簡明に考えれば、貞淑な奥様像にことごとく背馳する町の人物表現は¹¹³、同時代のあまりに抑圧的な女性規範にたいする作者の抵抗のしるしとして解釈できよう。だが同時にそれは、恭助の政治性や功利性と対置されるべき、町の打算性の無さや純粹さ、政治的判断力の薄弱さを物語つてもいる。町の心を占有するのは、恭助にたいする「如何なる故ともしるに難い」余りに恋しう懐かしき折は自ら少しは恥かしき思ひ、すなわち無私なる思慕感情だけにほかならない。

たしかに華美で奢侈ではあるが、きわめて非政治的、非功利的な町は、「豪奢」「おごり」を勤儉の身振りで隠蔽する同時代の富豪紳士たちにくらべれば¹¹⁴、その本質的な意味においてはるかに美的な徳目をそなえている——言外にそう語っているに等しい作者は、このような同時代の性規範をいちじるしく逸脱させた、すなわち愚かしいほど政治的判断力を欠かせたヒロイン像を造形すること、¹¹⁵「彼ら」と「彼ら」の世界の欺瞞性をも示したのではなかったか。

同時に作者は、政治性や功利性とはいっさい無縁の町の至純性、非合理性を、愛しみ庇うことなく断罪追放した恭助像を造形することによって、彼に仮象された沼南島田三郎の政治性と功利性をも、周囲のメディア関係者たちに開示してみせたに等しいのである。沼南の没後、内田魯庵が前掲『思ひ出す人々』において、偉大な言論人かつ政治家として葬られた沼南の、じっさいとはおよそ懸け離れた「清節¹¹⁵」「清貧¹¹⁶」ポーズに隠された欺瞞性を綴る¹¹⁷より約二〇年も前に、である。

それは、かつて自由民権運動の熱い息吹を感じながらも、運動が退潮するや早々に「壮士」を脱ぎ捨て、政界や文界の「紳士」へと功利的に変貌していった、島田三郎や渋谷三郎をはじめとする「彼ら」の変節を、やはり同じような流れで「彼ら」の世界の一部を構成するに至ったメディア関係者たちの眼前に示してみせることでもあったわけである。

それがたんなる一葉のルサンチマンの発露ではなく、政官業メディアが癒着した近代日本の実態を見通す炯眼にほかならなかったことは、たとえば、この『われから』物語内時間から七年後の一八〇三〔明治三六〕年一月に出来した、つぎの事実が証しているだろう。

それは、当初は輸出貿易の好調を妨げるとして対露強硬論を激しく批判していたにもかかわらず、対露関係の緊張が長引き、株式市場が暴落しはじめるといふやいなや、開戦による景気回復を期待して主戦論に急転換した実業界紳士たちの意を汲んで、それまでの対戦慎重論から一転して主戦論を展開¹¹⁸、彼らが集結した開戦決起集会の開会式において、「近く九年前に實なきの平和を假装したる結果は、終に今日の時局問題を惹起せしにあらざるや、吾人は平和の喝（ママ 實際文字判読困難）仰者なり、然りと雖も實なきの平和は、永遠に百害ありて一利なし（…） 實業家方面其他各方面より、斯く多数の來會者を得たるは、是れ挙國一致民意ある處¹¹⁹。」（『毎日新聞』一九〇三（明治三六）年一月一日）と演説し、居ならぶ澁澤榮一や益田孝らに満腔の拍手をもって讃えられた人物こそが島田三郎であった、という事実である。

*

ところで、現存するおびただしい『われから』未定稿を確認すると、金村恭助のステイタスは次のように変遷していたことが判明する。

「才（裁）判処にしる人ぞしる」（未定稿 A 18）↓「十年の前までは何がしの省に高等官などいはれつる物（…） 肩書は文学士なれども、雄々しい事をお好きなされて、御友達のいづれも、朝野に名高き骨のかたき方」（同 9）↓「当代の名士」（同 14）↓「在野の政事家」（同 13）↓「紳商」（F 1）↓「官員様（…） 今には国会の議員さま」（同 11）↓「外務省」（同 14）↓「かたい派のかた」（G 11）↓「今有力の紳士」（H 16）↓「弁護士」（L 11）（U 16）↓「法学士」（X 13）
こうして恭助のステイタスをどう語るかの試作が幾度もくりかえされたのち、定稿ではそれら具体的叙述はすべて削除され、政治家を暗喩する「地方遊説」という表現だけが控えめに置かれるに留められている。未定稿において試みられていた、彼の貴顕性をものがる具体的な表現は削ぎ落とされた代わりに、テキスト、それもその導入部に挿入された一語が、「紅葉館」であった。この一語の挿入によって、恭助は、「裁判」官でも、まして一介の「弁護士」や徳富蘇峰の言う「田舎紳士¹²⁰」でもない、抽象的であるがゆえにいつそう特権性を帯びた、はるか雲上の貴顕紳士として、明治近代の一般読者の眼前に立ち現われたはずだ。

ちなみにテキスト初出誌『文藝倶楽部』は、知識層とその家族に愛読された総合誌『国民之友』（や『太陽』とはやや異なる読者層を得ていたらしく、宮武外骨主宰の『滑稽新聞』（一九〇七（明治四〇）年七月）などは揶揄的にその読者を「藝妓¹²¹」と規定しているほどだが、同誌の図書館貸出件数が『太陽』に次いで二位（大橋図書館における雑誌閲覧調査一九〇三（明治三六）年）¹²²でもあったことを考え合わせると、同誌の人気を支えていた読者層のじつさいは、いわゆる一般庶民層であったと推測される。

一時の気散じを求めてか、あるいは日常とは異なる別世界への好奇心に駆られてか、立身出世や成功致富とは縁のない毎日を送るなかで雑誌を手にとった庶民たちが、文名いちじるしい閨秀作家、樋口一葉女史の『われから』を読む。彼や彼女らは、語り手が抛って立つ「われわれ」の視点にみずからそれを自然と重ね合わせながら、『太陽』小説欄ではけっして読むことの出来ないような「高等婦人」町の奥様らしからぬ振る舞い——同時代からすれば、「頑固」がのべたように「不義もの」と一喝して責むべき「法外千萬」な「淫婦の所行」や驕慢な暮らしぶりを、いわば窃視するように興味深く読みすすめるうちに、町の「不義」をはるかに上回る、雲上の貴顕紳士の「不義理」「不正直」「不人情」を目の当たりにする。そのとき彼や彼女らがどのような感想を得たかを知る術は、もちろ

んない。『めさまし草』以外の評論文から、わずかに同時代の受容状況の一端を垣間見られるだけである。

われ等は此の篇及び前のたけくらへに於て、彼の十三夜にこり江、等に見し程の涙の跡なき事を見たり〔…〕蓋し大なる同情はやがて冷かなるが如くなるものなり、涙を流し盡したるもの涙なきが如きなり¹²³

（傍点原文、「われから」『文學界』一八九六〔明治二九〕年五月）

且、那様の身持ちは、那程までに吾を袖にし給へども、女の身の悲しさは、あけて夫ども怨じ難ね、思ひくつてつらくく、の果は、心にも無きあさましの舉動ひ、家つきとて許されず、浮世の外にわれから身を捨つるお町の末路。吾等は讀み終りて女子の身を憐れに悲しう涙こぼれぬ。吾等は一葉女史が筆の痕に、お町の身の上に充分の同情を認め得たるを多とす〔…〕殊に女性の談話には一種云ふべからざる同情を湛ゆるあたり、殆ど天品の筆とも謂ひつべくや。¹²⁴

（傍点原文、「〇一葉女史の『われから』『太陽』一八九六〔明治二九〕年六月）

文章は益々圓熟して巧に書き綴られ、寫し出されたる人物も皆生きたり。蓋し作者の意を推量するに、こは男子自ら貞操ならずして、而も女子に嚴重なる貞操を求むるの酷なるを責め、女子の境遇の憐れむべきを示せしものならぬ。こは甚だ好き趣意なり。¹²⁵

（『われから』『青年文』一八九六〔明治二九〕年六月）

だが今日、現前するテキストを通して、作者の表現をめぐる意志がどこに向かっていたのかを付度することは出来る。「私を浮世の捨て物になさりますお気か、私は一人もの、世には助くる人も無し、此小さき身すて給ふに仔細はあるまじ、美事すて、此家を君の物にし給ふお気か、取りて見給へ、我れをば捨て、御覽ぜよ、一念が御座りまするとて、はたと白睨むを、突きのけてあとをも見ず、町、もう逢はぬぞ」。

この終端は、テキストを同時代の文壇大家が要求したような因果物語に回収させることなく、「小さき身すて」家を合法的に収奪する近代日本の強者にたいする憤りと怨嗟を、次なる文学表現へと接続させてゆこうとする作者の情念の奔出として読むべきであろう。ここでも試みられたように、稗史のなかでもっとも私的なレベルから、近代を語りおこすための、文学表現である。それは、町が気付くよりずっと以前から、明治近代の小さな「捨て物」であることを強く自覚してきた樋口一葉にか可能でなかった、特異な文学表現となるはずだった。だが、文学史上きわめて不幸なことにそれは永遠に実現しえぬまま、近代日本の歴史は重ねられていったのである。

¹ 藪禎子「第一部 作品篇 われから」、前掲『樋口一葉事典』、七九頁。

² 同右。

³ 『われから』テキスト引用（未定稿をふくむ）は、『樋口一葉全集 第二卷』（筑摩書房、一九七四年）による。

⁴ 関、菅、校注、前掲書は、「赤鬼」を「高利貸となつてからの」あだ名（三四六頁、注一五）
でとし、与四郎のなりわいを高利貸と規定している。

⁵ 未定稿H2「人には鬼ちくの生れがはりとそしられもせよ、身後に財を残すわからずと笑はるゝ
ともよし、一代、二代、三代とつんでうむ事なければ、東京に屈指の金満家と呼ばれて」。

⁶ 脱天子・登仙坊・鐘礼舎「三人冗語 われから」『めざまし草 巻の五』一八九六（明治二九）
年五月二四日においても、「小説通」の言として「察するに資産横領という一物の胸に蟠まれる恭助
に、お町の氣質がよき機会を与へて、われから悲境に落ちぬとの事なるべけれ」（一二二頁）と概括さ
れている。

⁷ 藪、前掲「第一部 作品篇 われから」『樋口一葉事典』七九頁。

⁸ 無署名「時文 ◎われから」『明治評論』第五卷第七号、一八九六（明治二九）年六月一日、「お
町は果して罪ありしか、然りと答ふる者は柳村なり、否と答ふる者は乙羽なり、正太夫は否と答へ
つゝ、今三ヶ月をそが儘に経過せしめばそれ或は有罪者と也しならんと云ひぬ（…）而して予は柳
村に左袒する者なり」（四十頁）

⁹ むろん、お峯と石之助の「後の事」をめぐる高田知波氏の卓見を参照すれば、「莫大な不労収入
を持つ山村家の「総領」という特権的地位」（高田、前掲書「距離の物語——『大つごもり』への一
視点」、一二二頁）を石之助が簡単に捨て去る意志、すなわち「お峯の世界への移住を彼が覚悟する可
能性は皆無に近い」（同書、一二三頁）のだから、いくら「有金の何ほどを分けて、若隠居の別戸籍に
と内々の相談は極まりたれど」、「本人うわの空に聞流して手に乗ら」（同）ないまま、長い時がすぎ
てしまう可能性もあるかもしれない。

¹⁰ 同書、一二三頁。

¹¹ 述べるまでもないが、（三）「朝湯の帰りに首筋白々と手拭さげたる立姿を今三年の後に見たし
と廓かえりの若者は申しき」、（六）「お前こそ美しくいや、廓内の大巻さんよりも奇麗だと皆がいう
よ」「池の橋が直つたれば怖いことはないと言ひ捨てに立出る美登利の姿、正太うれしげに見送つて
美しくと思ひぬ」、（十一）「町内で顔の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、それより
も、それよりもずんと好いはお前さんの隣に据つてお出なさるのなれど」、（十四）「奇麗だねあの娘
はと鼻を拭つと言へば、大巻さんよりなお美いや」など、美登利の美貌はいずれ「大巻」を凌ぐで
あるうと吉原界限で噂されている。（三）高等小学校に通わせてもらうなど美登利が破格の待遇を受
けていることをめぐって「楼の主が大切がる様子も怪しき」と語られるのも「姉の全盛の余波」だ
けではなく、いづれ美登利がその美貌によつて「大黒屋」随一の「お職」として楼主に大きな富を
もたらすと目されているからであろう。

¹² 安丸、前掲書『近代天皇像の形成』、二八〇頁。

¹³ 西周、萱生奉三編次、土居光華批評「偶評 西先生論集卷三」、土居光華、出版人『偶評 西先
生論集』（出版社無記名、一八八〇（明治二三）年、一八八二（明治一五）年再版）四一五頁。「第
一二健康第二ニ知識第三ニ富有ノ三ツノ者ナリ 此富有ト云フ字俗ノ通用ニ姑ラク金ト心得ルモ可
ナリ（…）金ヲ欲スル「モ道徳ノ分タリト考フルナリ（…）人ノ世ニ処ル此三ツノ眼目ヲ達スル
ハ即チ天ノ斯人ニ賦与スル所ニシテ、吾人天ヨリ享ル所ノ最大康福ノ基本タルハ、之ヲ求メ、之ヲ
全ウスル理ノ自然」（四一六頁）。なお、前田愛「正統と伝統——近代日本文学形成の条件——」『前田愛著
作集第四卷 幻景の明治』（筑摩書房、一九八九年）所収は、同説を「立身出世という個人的欲望を
負の価値から正のそれへと切り換えてみせた」ものであると指摘している（四三三頁）。

¹⁴ 前田愛「露伴における立身出世主義」、前掲『近代日本の文学空間——歴史・ことば・状況』所
収、一四一—一四二頁。

¹⁵ 「みづの上日記」一八九六（明治二九）年五月二九日に記述されている内容。前掲『樋口一葉
全集（上）』所収。

¹⁶ 一葉は草稿段階からヒロインを世にも稀な幸福者として構想している。「女の身の幸福この上に
あるべしや、家には十千萬の財産を伝へて、身は生へぬきの一粒もの、世にほめられの良人を持ち
て、榮よう此上もなき、芝居の替り目、寄席の出ものもよしと聞く夜は車を飛ばせて何処までも遊
ばるゝ気楽さ、し（か）も容色一てんの打どなく生まれつきたるなれば大底のきる物何とて似合ぬ
物なしに、物見遊山の道すがらあまたの人に羨ま（は）れ指さゝれて」（未定稿R1）、「家は十千方

の財産をひかえて、身は生えぬきの一粒物、金村のお千賀さまといへば世にお目出度ためしに引かれて、貴嬢のお幸福にあやかりまするやうと物領の娘の子に頭字一字もらふて名つくる地かりもあり」(同三)

¹⁷ 前掲「三人冗語 われから」について、前田愛編『全集樋口一葉 第三卷 日記編』(小学館、一九七七年)には、「ひびき」も緑雨(三〇九頁)とのみ述べられている。

¹⁸ 同座談会(「三人冗語 われから」)における「老人」の発言(一五頁)。

¹⁹ 同座談会における「猪尾」の発言(同頁)。

²⁰ 草双紙の果たした婦徳教化役割について、水野稔「後期草双紙の庶民教化」『江戸小説論叢』(中央公論社、一九七六年)、三八七—三三八、三九二—三九三頁、参照。

²¹ なお前掲「三人冗語 われから」は、美尾と町の叙述部分が「殆んど等分にかゝれ」ているために「何を主とも定かならぬやうに」(一二頁)なってしまうた点をも批判しているが、花下眠叟「われからの評を讀みて」も、美尾の花見後の「厭氣」を「面白き節」であるしながらも、登場人物達の描写の「釣り合ひ」などを難じ「濁り江」など、等しなみに置くべきものにあらず(『太陽』第貳卷第拾六號(九八)、一八九六〔明治二九〕年八月、三九〇六頁)と結論し、『青年文』評も「関係甚だ薄き談を一に結び付けたるが故に、讀者の趣味は自ら二に分れ、従て薄らぐの憾あり。何が故に作者が斯の如き誤を犯せしや甚だいぶかし。吾人は与四郎夫婦に関する五回餘を冗筆なりとし、寧ろこれを割愛せし方が宜かりしなるべし」(「無署名、『樋口一葉事典』によると田岡嶺雲『われから』、『青年文』第參卷第五號、一八九六〔明治二九〕年六月一〇日、一八頁)と述べている。

²² 藪楨子『われから』論、前掲書(透谷・藤村・一葉)所収も、「三人冗語」同部分をめぐって「逆に言う『われから』がそれから遠いところにある、その点でユニークであり、新しくもあつた」(三一頁)と指摘している。

²³ 以上、「頑固」の発言は、前掲「三人冗語 われから」一五—一六頁。

²⁴ 同座談会における「訳知り」の発言(一七頁)。

²⁵ 「みづの上日記」一八九六〔明治二九〕年五月二九日、前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収。同右。

²⁷ 永谷健『富豪の時代 実業エリートと近代日本』(新曜社、二〇〇七年)のタイトルによる。

²⁸ 「紅葉館創立緒言並館則」、東京市役所編『東京市史稿 遊園篇第五』復刻版(臨川書店、一九七四年)、四四九頁。

²⁹ 同書、四五〇頁。

³⁰ 池野藤兵衛『料亭 東京芝・紅葉館——紅葉館を巡る人々——』(砂書房、一九九四年)一八頁。

³¹ 『臨時増刊 風俗画報 第一四五號 芝公園之部 新撰東京名所図會 第七編』(東陽堂、一九七〔明治三〇〕年)、一七頁。

³² 同右。

³³ 同誌、一八頁。

³⁴ 同誌、一七頁。

³⁵ 同誌、一八頁。

³⁶ 同右。

³⁷ 同誌、一七—一八頁。

³⁸ 永谷、前掲書、一四一頁。

³⁹ 以下、近代実業エリートたちと数寄芸能との関係について、同書「第二部 第五章 実業家文化の戦略と形式」全体を参照。

⁴⁰ 桐浴邦夫「東京芝公園の紅葉館について 明治期の和風社交施設の研究」『日本建築学計画系論文集』第五〇七号、一九九八年五月、一九九頁(インターネット公開資料)

http://ci.nii.ac.jp/els/110004655083.pdf?id=ART0007379888&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1361025141&cp= 11011211月 閲覧。

- 41 永谷、前掲書、「第Ⅱ部 第五章 実業家文化の戦略と形式」、参照。
- 42 中野了随『東京名所図會』（小川尚栄堂、一八九〇〔明治二三〕年二月）、六六頁。
- 43 永谷、前掲書、三七頁。以下、明治近代における「紳士」がいかなる経緯で誕生したかをめぐって、同書「第一部 富裕層への視線 第一章 人名録の思想―「紳士」発見の試み」、参照。
- 44 同書、四三頁。
- 45 同書、四一頁を中心に「第一章 人名録の思想 「紳士」の定義」全体、参照。
- 46 同書、五六頁。
- 47 同書、四七頁に掲げられている『日本紳士録』（第三版、明治二九年）記載の所得税納税額トップ三〇」から転載。
- 48 同書、一八一頁を中心に「第Ⅱ部 第六章 安田善次郎の文化戦略」全体、参照。
- 49 同書、二四頁。
- 50 同書、二四頁。
- 51 同書、五六頁。
- 52 物語内時間にもっとも近い沼南は、一八九四〔明治二七〕年、広島第七議会において衆議院副議長に選出され、第一〇回議会まで務めている。『明治文学全集 91 明治新聞人文学集』（筑摩書房、一九七九年）巻末所収、高橋昌郎編「年譜」、四五―五頁。
- 53 西川祐子「第二部 項目編 島田政子」、前掲『樋口一葉事典』二〇九頁。
- 54 小野田翠雨「現代名士の演説振（抄）——速記者の見たる」（底本『現代名士の演説振』博文館、一九〇八〔明治四一〕年）、『明治文学全集 96 明治記録文学集』（筑摩書房、一九六七年）所収、三四八頁。
- 55 前掲『明治文学全集 91 明治新聞人文学集』に所収された島田三郎の論説文「足尾銅山鉱毒事件」「慈善事業の方針と国民の思想」「公娼の非義を論ず」などからも、社会事業に対する島田の関心の高さが伺える。ちなみに「公娼の非義を論ず」で展開されている廢娼論拠は以下のような「此墮落せる種類の人を保護せんと欲し、此奴隸的醜業を公認し、其結果却つて中人をして差悪の念を消滅せしめ、相率ひて過行を為さしむるに至る、之を倒行の施設と評せざる可らず」（一〇八頁）、婦人矯風会の言説に典型な「醜業」婦観である。ここに島田三郎の政治思想の一端が垣間見られよう。
- 56 島田三郎『幕末維新史料叢書 一 開国始末』（人物往来社、一九六八年）（底本『開国始末』一八八八〔明治二一〕年、輿論社刊）、朝倉治彦による巻末解説、三二―五頁。
- 57 安藤、前掲書、三六頁。
- 58 同右。
- 59 島田三郎「横浜市民諸君に告ぐ」（一九〇三〔明治三六〕年）、「愛読者諸君に告ぐ」（一九〇八〔明治四一〕年）両論説文において、大隈、渋沢の厚情に対する謝辞が述べられている。前掲『明治文学全集 91 明治新聞人文学集』、所収。
- 60 島田、前掲書、朝倉治彦氏の解説によれば「陸奥宗光の推挙によつて官界に入り、元老院権少書記官から文部大臣書記官に進んだ」（三五―一頁）とあり、前掲『明治文学全集 91 明治新聞人文学集』高橋昌郎編年譜によれば「明治十三年（一八八〇）二十九歳 文部卿河野敏謙により文部権大書記に抜擢された」（四五―一頁）とある。
- 61 永谷、前掲書、八〇頁。
- 62 永井、前掲書、三三八頁。
- 63 『日本紳士録 第一版』（交詢社、一八八九〔明治二二〕年）見開き頁。
- 64 同書、「しの部」頁。ちなみに、同書では島田政子の父「島田豊寛」は「雑業 横浜区住吉町」と記載されている。
- 65 『日本紳士録 第三版』（交詢社、一八九六〔明治二九〕年）「しの部」頁。「島田豊寛」は「貸地貸家業 四四二〇 地租五九〇三 横山市野毛三丁目一〇五」とある。
- 66 小森陽一「囚われた言葉／さまよい出す言葉」（初出『文学』一九八六年八月）、『文体としての物語』（筑摩書房、一九八八年）所収、二八―四頁。
- 67 同右。

⁶ 関礼子「物語としての『われから』——『われから』(初出『立教大学日本文学』一九八六年
一二月)、関、前掲書(『語る女たちの時代』所収、三四二頁。
⁶ 同書、三四六頁。

⁷ 藪、前掲論文(『われから』論)、前掲書(『透谷・藤村・一葉』)所収、二九〇頁。

⁷ 戸松泉『われから』試論——小説「世界的世界の顕現」『国文学解釈と鑑賞』一九九五年六月号、一
四頁。

⁷ 関、前掲書(「物語としての『われから』——『われから』)も、「町子を「奥方」あるいは「奥
様」と呼び、その動作挙動にたいして「玉へり」「おはしぬ」「かゝられぬ」などの敬語表現」(三四
二頁)が使われていることが指摘されている。

⁷ 平田、前掲書、一七六頁を中心に「第四節 女の文体を図る」全体、参照。

⁷ 同右。

⁷ 内田魯庵『思ひ出す人々』(三十年前の島田沼南(底本、春秋社、一九二五(大正一四)年、
本文中は『おもひ出す人々』と記されている)、平岡敏夫、監修、解説『明治大正文学回想集成4
思ひ出す人々』日本図書センター、一九八三年、二五九—二六〇頁。

⁷ 関礼子「女相撲・心中・狂気への想像力——菓のエクリチュール場を求めて」『国文学解釈と教材
の研究』³⁹(III)、一九九四年一〇月では、稲荷社という「利殖による父の富の象徴の場所に彼女の
身体が一瞬重ね合わされることで、憑依現象が起き、以降の変調を方向づけてゆく」と述べられた
上で、「その理由が判然としなかった町の祠前の物思いには、伝承世界と近代のちようと狭間の想像
力が揺曳している」(以上、六四頁)という、示唆に富んだ卓見が提示されている。

⁷ 『蓬生日記』一八九三(明治二六)年五月三日、前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収。
⁷ 「此家は町子が十二の歳、父の与四郎抵当ながれに取りて、夫れより修繕は加へたれども、水
の流れ、山のたゞずまい、松の木がらし小高き声も唯その昔のまゝ成けり」つまり「家」の修繕は
行ったものの、その庭園は「その昔のまゝ」と語られるうちに「町子は酔ごち夢のごとく頭をか
へして背後を見るに、雲間の月のほの明るく、社前の鈴のふりたるさま」の描写が始まることか
ら、拙稿では稲荷社を「与四郎抵当ながれに取る以前に勧請されたものと措定した。

⁷ 関、前掲書(「物語としての『われから』——『われから』)においては、拙稿とは異なり、
「町子の視線は当初は稲荷の社前から金村家の建物の方角へ向いていたことになる」が「ふと「頭
をかへして背後を見る」。つまり町子の視線は「此家」から「稲荷の社」そのものに向ったことにな
る。そこに見出されたものは月光にほのかに映し出された「紅白の綱」「古鏡」や「喜連格子」やら
であり、夜あらしにゆれて急に音をたてる「鈴」や「幣束の紙」のたたずまいであった。「.:」背
後を見る」というような行為は町子という主人公にふさわしくない(三五七—三五八頁)と述べら
れている。つまり同書(関)は拙稿とは逆に、町の背後を見る視線に注目して議論が展開されてい
る。

⁸ 『塵之中』一八九三(明治二六)年七月一五日、前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収。

⁸ 『塵之中』一八九三(明治二六)年七月二〇日、同書、所収。

⁸ 前掲、西川「項目編 島田政子」『樋口一葉事典』、二〇九頁。

⁸ 永谷、前掲書、七九頁。ここで同書はこの「流説風の語り」を「大衆の関心を引きつける」手
法と述べている。

⁸ 同書、八〇頁。

⁸ 同右。

⁸ 同書「第四章 財界人の叙爵と姻戚戦略」とりわけ「姻戚関係のパターン」の節全体、参照。

⁸ 同書は「華族という社会的身分がもつ「ブランド力」によって、威信のヒエラルキーを一足跳
びに駆け上がったことになる」として、それを「途方もない威信の上昇」(一一三頁)と表現してい
る。

⁸ 同書、一三八頁。

⁸ 青木一男『われから』——人妻物語への試み』『国文学解釈と鑑賞』二〇〇三年五月号、一五一
頁。

⁹ 渡辺澄子「一葉文学における新たな飛躍——『われから』論」、新・フェミニズム批評の会編、前

掲書、所収、二八〇頁。

⁹¹ 「平生能く夫の意を察し始終其の意に適ふやうに心を用ひ朝夕其の顔色をやはらかにし仮そめにも腹立ちたるふり又は心配らしき色を示さず其起居もしとやかにし夫を見ること大切なる客に對するが如く心すべきなり〔…〕夫の家に居ることを嫌ひ外に出で、遊び狂ふは多くは其の妻の氣に入らぬか又は外に迷ふ所あればなり此時に妻たる者みだりにりんきの色を顯はし又は腹立ち妬みて夫に悖ふときは油を薪に注ぐが如く夫はますく其妻を嫌ふて家に留まることを厭ひ夫は夫の欲するまゝなることを為せば〔…〕妻たるもの仮令夫に不行跡の行ひありとも腹立ち妬むが如き色を顯はさず」(国分操子『日用宝鑑 貴女の栞 上』大倉書店、一八九五〔明治二八〕年、「家庭訓 奉仕の部」百六―七頁)

⁹² 渡辺澄子氏は前掲書において、新聞を読む町を「考える女としての新しさを備え」(二六八頁)ているとの卓見を提示している。

⁹³ 中村光夫『明治文学史』(筑摩書房、一九六三年)一四六―一四七頁。

⁹⁴ 永谷、前掲書、一三七頁。

⁹⁵ 大橋新太郎編輯『訂正増補 華族名鑑 全』(博文館、一八九四〔明治二七〕年)、「登の部」頁(「貴族院議 正三位勲一等子爵 鳥尾小弥太」)。

⁹⁶ 永谷、前掲書、一三二頁。

⁹⁷ 同右。

⁹⁸ 樋口家では「叙勲一件帳」なる冊子を所有している。中丸宣明「第三部 資料篇 樋口則義旧蔵図書」前掲『樋口一葉事典』四八九頁。

⁹⁹ 永谷、前掲書、「第一部 第三章 上流階級イメージの変容 富豪イメージの生成―明治二〇年代半ばから明治三〇年代」全体、とりわけ一〇六―一〇八頁、参照。

¹⁰⁰ この描写には、萩の舎の稽古日に、塾の門前に、中牟田子爵令嬢・恒子、小笠原子爵妹・艶子、鳥尾子爵妹・広子、水野子爵妹・詮子たち大勢の貴婦人たちの「磨き上げられた黒塗りに金の御定紋入りの人力車がずらりと並ぶ」(疋田達子「樋口一葉 生活苦を越えて一筋の道に生きたお夏さん」、山根、前掲「第二部 項目篇 萩の舎」『樋口一葉事典』二八四頁)という、一葉が実見した壮麗な光景が投射されていると思われる。

¹⁰¹ この華族一行の装いは、萩の舎ゆかりの高等婦人たちのそれが念頭に置かれているのかもしれない。「日ごと訪ふ人は花の如く、蝶の如くうつくしの人々也。大島文学士の奥がたのやさがたなる、大はしとき子の被布すがたわかへしき、今は江木が写真師の妻なれど、閑えつ子の裾もやうでたち、同じく藤子が薄色りんずの中振袖、それよりは花やかなる江間のよし子が秋の七草そめ出したる振袖に、緋むくを重ねしかわいのさまもよく」『水のうへ』一八九五〔明治二八〕年一月七日、前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収)

¹⁰² 大橋、前掲書(『訂正増補 華族名鑑 全』)、「奈の部」頁(「海軍中将 従三位勲一等子爵 中牟田倉之助」)。

¹⁰³ 永谷、前掲書、「第二部 第四章 財界人の叙爵と婚姻戦略 実業関係者への授爵」では、「華族の拡散したあり方とそれにもとづく階層としての実体性のなさは、逆に、新しい階層秩序のなかでの華族の「ブランド」としての意味を強めたのではないか」「爵位という「ブランド」を獲得することは非常に魅力的だったはずである。爵位は、上昇移動の事実やそこで用いた手段を正当化する究極の制度的証明であった。」(二二六頁)と指摘されている。

¹⁰⁴ 同書、一四五頁。

¹⁰⁵ 『郵便報知新聞』一八七九(明治一二)年四月二八日、二面、郵便報知新聞刊行会編、復刻版、三九二頁。なお同記事は、同書、一四五頁に引用されている。

¹⁰⁶ 和敬会規約(同書、一八一頁)。

¹⁰⁷ 同右。

¹⁰⁸ 同書は、実業家たちの茶会は「超俗的なサロンの道を歩まず、しばしば世俗的な事柄に関わる密談や金力誇示の場となったようである」(二五二頁)と指摘する。

¹⁰⁹ 山田有策『われから』―与四郎の復讐―『国文学解釈と鑑賞』一九九五年六月号は、この町追放をめぐって、彼女を「倫理」なく「ただ好悪の感情によつてのみ動く」「われから」的女性へと

成長させ、その婿として「野望を抱きいかにも出世しそうな恭助を選んだ時」、与四郎の「眼はやがて出世した恭助によって町が捨てられる映像を望遠していた」（二一一―二二頁）、つまり与四郎の企てた「復讐」と解釈している。

¹¹⁰ 内田魯庵、前掲『思ひ出す人々』三十年前の島田沼南」には、「其頃のキリスト教夫人

「……」其中で沼南婦人は百舌や鴉の中のインコのやうに美しく飾り立て、脂粉と色彩の空気を漂はしてゐた。此の五色で満身を飾り立つたインコ夫人が後に沼南の外遊不在中、沼南の名誉に泥を塗つたのは当時の新聞の三面種ともなつたので誰も知つてゐる。」（二六二頁）、沼南の夫人の不しだらは当時二三の新聞の三面を賑はしたから誰も知つてゐる。」（二七三頁）とある。

¹¹¹ 池野、前掲書、二九一―二九五頁。

¹¹² 一葉を文壇の寵児に押し上げた編集者大橋乙羽の業績、および、博文館ジャーナリズムと一葉テクストの相関関係とについては、坪内、前掲論文（「編集者大橋乙羽」、参照）。

¹¹³ 町の振舞いが同時代女訓書が示す悪例と見事に合致している点について、小森、前掲書（二四
¹¹⁴ われた言葉／さまよい出す言葉」、二八二―二八三頁、参照）。

¹¹⁴ 富豪たちの勤儉的ふるまいについて、永谷、前掲書、一五七頁、および「第二部 第六章 安
¹¹⁵ 田善次郎の文化戦略 「勤儉」のアピール」全体、参照）。

¹¹⁵ 同書、二七四頁。

¹¹⁶ 同右。

¹¹⁷ 内田魯庵、前掲『思ひ出す人々』三十年前の島田沼南」は、全編を通して「大政治家として
葬られた」（二四九頁）島田三郎の、「清節」（二七四頁）を標榜しながらも「縲袍弊袴で怒号した田
中正造の操守と違つて可成有福な清貧」（同頁）ポーズが語られている。たとえば「沼南社長時代の
毎日新聞社員は貧乏が通り相場である新聞記者中でも殊に抽んで、貧乏であつた。（……）社員は月
末の米屋酒屋の勘定どころか煙草錢にも屢々差支へた。が、社長沼南は位置相応の門戸を構へる必
要があつたとは云へ、堂々たる生活をしながら社員が急を訴へても空々しい貧乏咄をしてテンから
相談相手にならなかつた。」（二七四―二七五頁）、また、「晩年を風紀の廓清に捧げて東奔西走廢娼
禁酒を侃々する」沼南が、壮年時代は「廢娼よりは寧ろ拜娼で艶名隠れも無かつた」（二七五頁）こ
とも明かしている。さらに興味深いのは、「度量海の如き大人格でも、清濁併せ呑む大腹中も無か
つた」（二七四頁）沼南が、夫人の醜聞後、解雇した書生Yの物質的支援をつづけたことを、魯庵が
「謎」（同頁）と綴っている点である。

¹¹⁸ 宇野、前掲書、一三九頁。

¹¹⁹ 「ホテルの懇親會」『毎日新聞』第一萬八十三號、一九〇三（明治三六）年一月一日、

二面。同記事は島田三郎の演説内容に続けて当日の出席者を紹介する。「前島密、矢野二郎、濫澤榮
一、木内重四郎、根本通明、益田孝（……）近來絶へてなき盛會なりしが、會するもの悉く意氣軒昂
として、戦は避くべからずと論じ、中にも實業家連の鼻息荒き處」（同二面）

¹²⁰ 前田、前掲「露伴における立身出世主義」『近代日本の文学空間』所収、一四〇頁。

¹²¹ 『滑稽新聞』第一四三号、一九〇七（明治四〇）年七月廿日、吉野孝雄監修『宮武外骨此中に
あり 一一 滑稽新聞』（ゆまに書房、一九九四年）所収に掲載された「新聞雑誌の愛読者」によ
れば、『文藝俱樂部』の読者層は「文藝俱樂部……藝妓」（四一八頁）

¹²² 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版、一九九七年）一一三頁、表3・
7。

¹²³ 無署名「われから」『文學界』四十一號、一八九六（明治二九）年五月三〇日、四頁。

¹²⁴ 無署名（樋口一葉事典）八一頁によると高山樗牛「一葉女史の『われから』『太陽』第貳

卷第拾貳號（二〇二）、一八九六（明治二九）年六月五日、二八二―二三頁。

¹²⁵ 無署名（樋口一葉事典）八二頁によると田岡嶺雲、前掲『われから』『青年文』一八頁。

第六章 樋口一葉文学における〈狂愚〉

——その表現史および同時代言説との通脈と断絶

一 明治近代の陰画

前章（第五章）では、『われから』に看取される、政治的人間と非政治的人間を対置させる構造について指摘した。同章第一節で述べた言葉でいいなおせば、逸脱し転落してゆく主人公たちの前景に、着々と富を蓄積し、社会上層部にゆるぎない定位置を確保することに成功した者たちを布置する構造である。だがそれは『われから』に限らず、一葉のテキストの多くに認められる基本構造にほかならない。

じつはこの基本構造には、或る隠微な仕掛けが施されているように見受けられてならない。零落する者、成功をとげる者、そのどちらにせよ登場人物たちには、島田三郎をはじめとする明治近代を代表する実在紳士たちの肖像が投影されているという仕掛けである。仕掛けといつて言葉が過ぎるならば、同時代の著名な富豪紳士たちの姿、ふるまいを期せずして反映させている、と言い直すべきかもしれない。肖像とは、だがあくまでも陰画としてのそれである。

本論文第一章で述べたように、『うもれ木』では「愛世経民」「富国利民」を金科玉条に掲げる社会事業家・篠原辰雄が登場する。「徳義の頹靡人情の腐敗」を憂い「今日細民困窮のあり様」に慷慨する彼は、「貴顕紳商の門に、協力賛助を求」めて「博愛医院」を建設するほか、種々の起業に関与することで「仁者」と讃えられているわけだが、おそらく同時代の『都の花』読者は、この人物像に澁澤栄一を重ね合わさずにはいなかったはずだ。周知のように、「論語と算盤」を標榜し、「富貴」と「貨殖」こそが「致富経国の大本」²であるとして五百以上の起業を成就させ、養育院設立をはじめとした社会事業にも携わった澁澤の名は、実業界の巨頭としてだけでなく各種人名録の常連としても、人々の眼にしばしば映じていたはずだからである。

だが作者は、「軽薄浮佻を才子と呼ぶ明治の代に」「忠」「義」をつらぬく「愚直」で「やさしき」入江兄妹をあざむき嘲笑する、稀代の「山師」「詐欺」として辰雄の実像を造形している。いうなればテキストにおいて、澁澤栄一の反転像を掲げてみせたのである。

世にすくなからず跋扈する「徳義を一の名誉と心得る輩」³『うもれ木』にたいする批判のあらわれなのか、あるいは青淵澁澤を「奸商」⁴（同）の一人と眼差していたからなのか（澁澤が一時期「積極的な株式操作」⁵を行っていたことは今日の経済史研究において指摘されるところである）。いずれにせよ、非政治的であるがゆえに経済的敗者となった主人公と、勝者たる悪役を対照的に描き分け、且つ鋭く対置させる構造は、一葉の初期作から試みられていたといえる。

ちなみに「奸商」とは、明治二〇年代前半、『国民之友』や『日本人』など一葉にとつても馴染みぶかい雑誌メディアにくりかえし登場する、新興商人たちにたいする蔑称である。前掲『富豪の時代』によれば、この蔑称には、幕末維新の混乱に乗じて不当な手段で利権を得、それを元手に興した事業を政府の保護によって拡大させて致富した、「不徳義」⁶な「詐欺師」⁷なる意味がこめられていたという。⁸「非成功者によるルサンチマンの表現」⁹とも言えようが、一葉はかかるメディア文脈を受容

しながら創作をおこなった、とひとまずは考えることができる。

他方で、メディアが彼らを「奸商」と連呼したのは、殖産興業・富国強兵政策を財政面から支えるための貯蓄銀行条例の公布（一八九〇〔明治三三年〕）を機に、それまで蓄財を蔑視していた庶民通念を変革させるためでもあったという。新興商人に私財を略取されなかったための防衛策として貯蓄が喧伝されてゆく過程で、新興商人Ⅱ「奸商」という等式が反復され、「奸商」なる蔑称が連呼されたというのである⁹。しかし、しだいに彼ら「奸商」は、その富裕性ゆえに、明治二〇年代後半から社会の「稀少な模範者¹⁰」とも認知されるようになり、その倫理性を懐疑されながらも、漸次「紳士」へとその称を変化させていったというのだ¹¹。

つまり一葉の創作期は、国家を挙げて大々的に蓄財が奨励されてゆくなかで、金銭それ自体に対する肯定意識、より踏み込んでいえば執着や畏敬の意識が、人々のあいだに内面化されていく時期にほかならなかった。拝金主義の瀰漫時代の到来である。だとすれば、初期作から晩年作にいたるまで金銭的成功者を陰画的、あるいは諷刺的にしか描くことのなかった一葉は、かかる時代の圧倒的な趨勢に抗いつづけていたことになるわけである。

たとえば第二章で論じたように、『暗夜』の松川蘭の父は、明らかに明治初年から一〇年代にかけて出現した御用商人ないし政商の一人であったはずだが、おそらく殖産興業政策を主導していた有力政治家の甘言に乗せられて、利権がらみの何らかの「投機¹²」的事業に関与したことで、「山師のそしりを残して」一八八七〔明治一九〕年に自裁を遂げた人物である。同時代において「山師」なる言葉は、鉱山経営者の意のほか、前述したように詐欺同然の手段によって財を成した奸商を指すなど、その意味内容に幅のあった語ではあるが、「目当ナキ事危ナキ事ナドヲ犯シテ、万一ノ大利ヲ得ムト計ル者¹³」（前掲『言海』一八九七〔明治三〇〕年）というもともと本来的な辞義から、第二章・二節では、こころみに彼を古河財閥創始者である古河市兵衛と対比させ、古河の陰画として捉えてみたのだ¹⁴。

古河こそ、澁澤栄一をして「氏は総て斯様に見込をつければ一攫萬金を期して飛び放れたことをやり〔…〕何人が如何様なことを云つても耳にも留めず〔…〕無闇と山を買込む。その買込方も頗る大雑把のやり方で、大概は一目見て好い加減に鑑定を下し、どしどし買取うて仕舞ふ〔…〕鉱山にかけては殆ど猪突的¹⁵。」といわしめた、まさに辞義どおりの「目当ナキ」「危ナキ」投機を行なうなかで、「残区廢鉱¹⁶」にすぎなかった足尾銅山から日本一の富脈を掘り当て、鉱山王に成り上がった立志伝中の人物だったからである。むろん人名録の常連でもあった。そして一葉じしんも、この足尾銅山がもたらす莫大な不労所得の分配をめぐる、出資者・相馬子爵家で勃発した明治期屈指の醜聞騒動、相馬事件に大きな関心を寄せていたのである。

いわば松川蘭の父は、前掲『明治富豪史』で語られているような——「明治五六年の頃は、足尾は八百円で借受けられた時代ぢやつたが、古河のやうに当つたのは稀有で、一人の古河ができた傍らには、鈍根が続かなかつた為に、運に会しなかつた小古河は、幾人あつたか知れない¹⁷。」——、象徴的な意味における「古河」になろうとして叶わなかつた「小古河」の一人にほかならない。すなわち古河の陰画にほかならないわけだが、テキストはその「小古河」像にさらに暗い陰影を与えている。というのは、民部省租税正だった澁澤栄一や大蔵省租税頭だった陸奥宗光の「庇護¹⁸」をえて、成功を遂げることできた古河とはまったく反対に、彼らのような高位高官に謀られた者として、すなわち「正義の髭つき立派なる方様」や「衆議院」議員・波崎漂らの狡猾な奸計や身勝手な忘恩の「犠牲」

『暗夜』者として、松川父娘を造形しているからである。

『うもれ木』や『われから』と同様、私欲をむさぼらず陰徳を積んでいた者が（私欲ならざりける証拠は、家に余財のつめる物少なく、残す誹りの夫れだけは施しける徳も、陰なりけるが多かりしかば）『暗夜』、「正義」と「徳義」をふりかざす「憎くいほどお利口」な「才子の君」「利口の君」に財を奪取され、人々からも讒訴されるという構図が、ここにも認められるだろう。より貪欲な者がそうでない者を蹂躪し、成功をさらに確かなものにしてゆくという図式である。そしてその図式は、愚直に天道に従うことを意味する「運鈍根¹⁷」なる処世訓を座右の銘に掲げながらも、すでに批判が集中していた鉅毒問題を黙止したまま足尾を掘削し続け、近代有数の富豪としての基盤をさらに磐石にしていた古河市兵衛その人の振る舞いにもあてはまるのである。

非功利性は功利性に、非政治性は政治性に、徳義は不徳義に、弱者は強者に、かならず敗北する。『暗夜』の高木直次郎に「天道はどうでも善人に与したまはぬか」と悲憤させた樋口一葉は、明治近代をそのような世として、救済のない「暗夜」としてしか、描くことをしなかったのである。樋口一葉の文学世界の核をなすのは、この暗い近代史観にほかならない。

*

したがって一葉の文学世界では一貫して、明治近代の致富譚にたいする反¹⁸物語が綴られなければならなかった。

たとえば『われから』では、美尾を失い貨殖の亡者となった与四郎が、蓄財への第一歩として、明治一八七一、二（明治四、五）年ごろから一九七七（明治一〇）年のあいだに¹⁹、無謀にも神田「今川橋の際に夜明しの蕎麦掻き」売りを始めるが、奇しくも一八七一（明治四）年、事業の失敗と養家からの追放によって失意の底にあった浅野総一郎が再起をはかるべく始めたのも、「御茶ノ水橋のたもとで、御茶ノ水の清水をくんで砂糖を入れ、その水を売る²⁰」商いであった。

与四郎の考証上のモデルをめぐる問題は後述することとして、ここで本節が注目したいのは、与四郎と浅野財閥を一代で築き上げた浅野総一郎とが、時おなじくして似たような境遇と営為から富豪へと転身していったという符合性である。

明治初年期の東京では、志はあつても元手がない者にとって、川端で廉価な飲食品を商うことが身を起こすにあつたの典型的な初動手段であつたのだろうが、おそらくそのなかで立身出世、それも破格の成功を叶えた人物は浅野一人だったのであるまいか。近代日本のブルジョワジー研究をひもといても、かかる「一杯一錢屋²¹」から出世を成就させた者は、他に見当たらない²²。つまり浅野総一郎と「幾万円」の富を築いた金村与四郎は、ともに明治近代におけるきわめて稀少な成功者だったわけだが、一方の浅野が濫澤栄一と安田善次郎の資金援助をえて、セメント・製鉄・造船・東京湾築港など、今日にも存続する基幹企業を擁する財閥を形成していったのに対し、前述したように、与四郎は貨殖だけに血道を上げた末に、「五十にも足らずで急病の脳充血、一朝にこの世の税をおさめ」、町に継承されたその幾万の財産も恭助に奪取されてしまう。

樋口一葉は、致富に賭けた力行に対して、そのようなかたちでしか、報おうとしなかったのである。

じつは一葉が、大阪事件の直前に自由党系融貫社を脱退して東京専門学校にまなんでいた渋谷三郎と出会つたり（一八八五（明治一八）年）、萩の舎に通い始めたりと（一八八六（明治一九）年）、のちの創作活動のいわば原点をかたちづくつた出来事に遭遇した時期から最晩年までのおよそ一〇年間は、一八八四（明治一七）年末の秩父国民党の悲劇的な壊滅にもつとも象徴的な自由民権運動の解体期か

ら、実業社会の興隆期に、ちようど該当している。メディア史における事項に沿って言えば、民権運動の急速な退潮によって進むべき方向性を見失った青年たちに「政治の世界にかわる実業の世界の可能性を啓示した²²」徳富蘇峰主宰の二誌『将来之日本』（一八八六〔明治一九〕年刊）、『新日本之青年』（一八八七〔明治二〇〕年刊）が登場した時期と、明治近代における「代表的な成功の「教唆雑誌」²³」としての『実業之日本』（一八九七〔明治三〇〕年）が発刊されるまでの時期に、それは相当しているのである。

蘇峰が開扉した実業の世界は、『実業之日本』刊行に至ってきわめて明確に、近代日本における最も有力な成功の場として位置付けられたのだった。同誌は、著名な実業家たちの成功までのエピソードを、あたかも「映画スター²⁴」のそのように華々しく紹介することによって青年たちの憧憬をかきたて、発行部数を飛躍的に伸長させたことで知られている²⁵。一葉は、そうした実業雑誌の勃興から興隆期にあつて、それらメディア言説が唱和する晴れがましい致富譚にたいする反〓物語を書き付けていたことになるわけである。

のみならず、以下の事柄をかんがみれば、その反〓物語には、実在する著名な実業家たちのふるまいに対する批判的視点さえ含まれていたふしもあるのだ。

『われから』研究史においては、与四郎のモデルは貸家業をいとなんでいた大崎辰五郎であると考証されている²⁶。たしかに鈴木博之『日本の近代 都市へ』によれば、彼は本郷菊坂から巢鴨にかけての地域一帯における貸家建設・経営によって相当な富を蓄積した人物であつたらしく²⁷、腰弁から富豪に成り上がる与四郎を造形するにあつて、一葉が身近で見聞きしていた「貸家の世界では巨人²⁸」であつた大崎辰五郎の蓄財プロセスを参照した可能性は大いにあり得るだろう²⁹。

だが、『われから』定稿にいたるまでの草稿過程をたどって行くと、与四郎をめぐる記述は、大崎辰五郎のたんなる模写から、しだいに別の要素が加えられていったことが判明する。与四郎にかんする草稿は、「質や」（F11）を手始めに、十数回にわたつて書き換えが試みられているのだが、その大まかな推移は次のとおりである。「手薄な商ひばかり遣りくつてあつた身が、ずんくと思ふ事凶に当りて、またく間に蔵のたてまし地面のかひいれ」（F15）↓「公債幾千円、鉄道株いく株、それにもまして区内に持地の広きこといろは分けにして」（K1）↓「蠣がら町へそもや飛こみの最初から二百丁幅の大づかみ、何処の地面では三千円も儲けて、〔…〕何うでも遣口が尋常で無い、思ひ切りが宜くて目先が早くて、危ない橋をどんく渡るにいさくも後を見ず」（U11）↓「与四郎とて姓は金村、地面師よりあがりて、今は高利の金をしぼる外に、地面地やしき段々と広げて、うしろに唾を吹かける人も面と向いては頭のがらぬ金満家あり、流水のながれて知れぬは人の世なれば此人二十年の以前までは大蔵省に月給七円」（V1）。

つまり、当初は、与四郎の所有資産の規模のみが強調され、その集積までのプロセスや手段についてはほとんど言及されていないが、しだいに草稿は、与四郎がどのように資産を集積したかに重点をおいた叙述へと変化しているのである。しかもその資産形成は、「尋常で無い」豪胆な手段から、「うしろに唾を吹かける人」もいるほどの「高利の金をしぼる」阿漕な手段へと変容している。そして定稿になると、与四郎の致富にいたるまでの営為はさらに悪辣な肉付けがなされて、「物すごい目を光らせて在したる」「人の生き血をしぼる」「赤鬼」のそれとして、叙述される。語り手の立場や視点が生のまま介在する説話風の語りの効果によって、与四郎は「後生いかがと思わるやうな」不当な手段で、つまり法外な高利と容赦のない取立とによって致富した人物として造形されるに至るわけであ

る。与四郎にかんする草稿過程は、彼の蓄財に不徳性、不当性を与えてゆく過程にほかならなかったと言えるだろう。

富裕者を、選ばれた成功者としてではなく、人倫に悖る不徳者として表象してゆくこの一葉の叙述は、『われから』のみならず『うもれ木』『たけくらべ』『大つごもり』にも看取されるが、むろんそれは、後半生を高利に苛まれつづけた一葉じしんの呻吟のなから洩れ出た慨嘆であったのだろう。致富とは金銭的不遇者からむさぼる行為にほかならないという、この一葉の認識も、借財をめぐる具体的辛苦を生きるなから得られた洞察にちがいはなかった。

したがって、こうした致富というものに対する強い懷疑をあらわした叙述は、「値打のある金を安く踏んで濡れ手で粟の、こりや旨いともなんともいはずに大儲けを仕た。」³⁰ ことで知られていた安田金融財閥の総帥・安田善次郎や、株価操作を行なっていたこともある青淵澁澤栄一ら当代一流の実業紳士たちの、決して清廉とはいえない蓄財のあり方にたいする批判性を發揮していると深読みできるかもしれないわけである。

なお、澁澤栄一と安田善次郎の資金的後援をえて浅野総一郎が設立（一九二二〔明治四五〕年）した日本鋼管株式会社には、作家一葉をそだてた博文館オーナーの大橋新太郎が役員として参画するなどし³¹——前章で述べたように彼らは全員「紅葉館」人脈で結ばれていた——、よく知られているように馬場胡蝶も岩崎弥太郎と縁戚にあたるなど、文壇に参入したのちの一葉の遠景には、実業世界が広がっていたことを付言しておきたい。

『たけくらべ』の美登利は、全盛をきわめる姉・大巻に撒財する鼻窟客に「銀行の川様、兜町の米様」がいることを誇らしげに吹聴するが、一葉がこの「銀行の川様」なる名に日清戦争の財政運営全般を指揮した当時の日銀総裁にして三菱重鎮の川田小一郎³²の名を仮托したかどうかは不明にせよ、この発話が金融資本主義時代の到来を物語っていることは間違いないだろう。そうした「泡沫金³³」『明治富豪史』における「兜町」をめぐる記述）時代の幕開けもふくめて、一葉の創作期は、確認してきたように、金銭的な成功がものをいう金力万能時代への歴史的転換期に当たっていた。そうした「とかくは金の世の中」「いずれ金が敵の世の中」(『うもれ木』)の時代、一葉はテキストにひそかに、あるいは期せずして、同時代の実在する著名富豪たちの輝かしい肖像を反転させた陰画を掲げることによって、不徳性、不当性、或いは僥倖性と限りなく近接した明治近代の成功致富、立身出世のありようを、ひいては明治近代そのもののありようを、指し示したのである。

二二 〈狂愚〉と転落

前掲した『将来之日本』『新日本之青年』『日本紳士録』『実業之日本』……。『日本』と『実業』が不可分に結びあった雑誌タイトルが端的に語るように、そして順次発刊されたそれら雑誌メディアの圧倒的な普及が示しているように、政治よりも経済の優先へと近代日本が大きく舵を切っていた時代、みてきたように樋口一葉は、実在する富豪紳士たちの陰画のごとき脇役たちをテキストに配置したわけだが、それは、主人公たちの彼らとの対照性を鮮明にきわだたせるために試みられた、一葉独自の物語装置であったようにおもわれる。「才子の君、利口の君」『暗夜』である彼らが占有する明治社会の陽の当たる中心から、暗い周縁に落ち込んだ「愚人」(同)、あるいは「狂」「愚」(「よし狂といわば言へ愚と笑わば笑へ、千万の黄金つんで来るとも換えぬ心を腕にみがきて、軽薄浮佻を才子と呼ぶ明治

の代に、愚直の値どれほどのもの『うもれ木』としての主人公たちの位相を、まざまざと照らし出すための小説結構である。

その結構のなから同時代の文学空間に鮮烈に登場してきたのが、前章・一節で列挙した、転落し零落してゆく数多の主人公たちであった。自由民権運動の壊滅によって、短かった政治の季節もたちまち過ぎ去り、代わって出現した資本制と天皇制を両輪とする国家体制のもと、端的にいえば財と家族という二つの可視的価値が広く承認されるようになった明治二〇年代の日本において、それら価値の獲得をめざす国民の欲望が国家を挙げて肯定され、「天皇の権威を介して」「普遍的意味」^{3,4}すら付与されるに至ったことは、本論文の随所で確認したとおりである。だが、人々が陽光かがやく「坂の上」に待つはずのその普遍的価値を求めて上昇志向を募らせてゆく一方で、彼・彼女らはそれら価値を獲得するためのふるまいを放擲して下降の道をたどってしまう。前章で述べたとおり、非理性的で非功利的な〈狂愚〉としての主人公たちである。

なかでも、もつとも自覚的に、もつとも痛切な覚悟をもって、〈狂愚〉を生きた主人公こそ、『にごりえ』のお力であるにちがいない。たとえば彼女が、訪れては去ってゆく嫖客たちのなかで「別物」と見込んだ——だがその一縷の期待は直ぐに絶望へと変わるのだが——結城朝之助に向かって、初めてみずからについて真摯に語ってみせる告白場面。その印象深い語りには「氣違ひ」「狂」なる言葉が伴われずにはいない。

親父は職人、祖父は四角な字を読んだ人で御座んす、つまりは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて断食して死んださうに御座んす、十六の歳から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出来したる事なく、終は人の物笑ひに今では名を知る人もなし「…」私の父といふは「…」居職に飾の金物をこしらへましたれど、氣位たかくて人愛のなければ鬮員にしてくれる人もなく「…」私は其様な貧乏人の娘、氣違ひ「未定稿では「ものぐるひ」は親ゆづりて折ふし起るのでござります

愚直に斯道に修業するが世に容れられず、それどころか叛徒の烙印を押され、生涯を貧に苛まれ人々からは嘲笑され、それでも功利的に立ち回ることが出来ずに、憤死ないしはそれに近いかたちで生を閉じる。そのような奇矯で矯激な偏狂者、まさしく狂愚者としての祖父と父にみずからを重ね合わせて、お力は自身を「氣違ひ」「ものぐるひ」と語っているのである。

このとき、お力は、自分自身の「氣が狂つた」決定的な出来事として、つまり自らの内に流れる一族の暗い血脈を自覚した象徴的な出来事として、幼少期のひとこまを語るわけだが、それは次のような表現をもちいて述べられている。

母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私に去る物を買ひに行けといふ、味噌こし下げて端たのお金を手に握つて米屋の門までは嬉しく駆けつけたれど、帰りには寒さの身にしてみても足も龜かみたれば五六軒隔てし溝板の上の水にすべり、足溜りなく転ける機会に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりざらぐと翻こぼれ入れば、下は行水きたなき溝泥なり、幾度も覗いて見たれど是れをば何として拾はれませう「…」私は其頃から氣が狂つたのでござんす

「溝板の上の水にすべり」「足溜りなく転ける」「取落として」「溝板のひまよりざらぐと翻れ」といった表現の流れは、抛って立つ足場の危うさと、それによる転倒、転落、落下、下降のイメージを喚起してゆく。「欠けた二つ竈」「破れ鍋」「味噌こし」「一枚はづれし溝板」「溝板のひま」などの、欠損や隙間のあるみすばらしく怪しいモノのありさまが、「翻れ」る、落ちるイメージを、いっそう強調しているだろう。さらに、この落ちてゆく、下降してゆくイメージは、その下に広がる「行水きたなき溝泥」の暗黒のイメージが組み合わされることによって、その転落と下降の救いのなさや陰惨さが、まざまざと現前される効果を發揮しているのである。

この告白場面に先立って、やはりお力がみずからの出自に思いをめぐらす場面が、有名な次の心中思惟場面であるわけだが——「仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父さんも踏かへして落してお仕舞なされ、祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば為る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう」、ここでも、「丸木橋」を「踏かへして落」という、だれもが忌避しようとする危うさをあえて冒した果ての、転落と下降のイメージが反復されているのである³⁵⁰。

これまで、お力の内面を解く鍵となる、この〈丸木橋を渡る〉の意味については、愛知峰子氏による研究史の概説を参照すれば、「死によって現状から脱出すること³⁶」を意味するとも、「現状から脱出し、大望に向かって積極的に生きようとすること³⁷」具体的には「現状を打破するような社会変革、人間性の解放などの大志に向けて生きようとする」とする、或いは「玉の輿」に乗る³⁸」ことを意味するとも、逆に「下層生活の苦悩にあえぎながらも、それと正面から向かい合おうとする人生選択³⁹」を意味するとも、さらには「源七を捨てて「…」人間感情を捨てて「…」源七の恨みを買う危険を冒して商売に開き直る⁴⁰」ことを意味するとも、まざままに解釈されてきた⁴¹。

しかしながら、この「丸木橋」の前後の長い心内語は、「離人症⁴²」様の異常な精神状態のなかで奔出してくる脈略を欠いた想念が独白されたものであつて、そこに首尾一貫した意味内容、あるいは文章間の緊密な統合関係を見出すのは困難であらう。つまり、〈丸木橋を渡る〉とは、句点に区切られた行文の流れに沿って、合理的にその意味内容を規定すること自体をこぼむ、お力の内面に充溢する混沌とした想念、いかなれば、一族の歴史に寄せる情念や怨念のなかから生まれた、生と死をめぐる〈イメージ〉なのである。

さきに本稿が、祖父と父の生涯に思いを馳せる「丸木橋」と「行水きたなき溝泥」の場面に共通するイメージを掲げておいたのは、この、お力にとつての生と死をめぐるイメージを析出しようとしたからにはかならない。見てきたように、それは、我が身の危険をかえりみず、つまり生命をも賭して節をとす非功利性がおのずと招きよせた、転落下降のイメージだった。「行く水きたなき溝泥」の暗黒の底に、生命の糧としての「米」が「ざらぐと翻れ」落ち、失われてゆく情景は、かかるイメージの象徴であらう。この情景には、功利的な生き方を峻拒して明治近代の、あるいは幕末の「きたなき溝泥」としての陋巷に窮死した、祖父と父の面影が色濃く揺曳しているののである。汚穢の泥底へ「米」が落下し喪失する情景はそのまま、生涯を貧のうちにくぐらした挙句に食を断って自裁した祖父の暗喩であることはいまでもない。むしろその救いのない暗い情景は、お力じしんの未来をも暗示しているわけであるが。

したがって、お力が語る「気違ひ」「ものぐるひ」「気が狂つた」とは、たとえば明治社会の、象徴

的な意味におけるもつとも「きたなき溝泥」である場末の私娼街で陰惨な死を迎えることすら承知の上で、非功利的な生を生きようとする決意の、あるいは非功利的な生を生きざるをえないとする覚悟の謂であろう。たとえば、その非功利的性は、本論文・第三章で論じたように、「我ゆゑ死ぬる人のありともご愁傷さまと脇を向く」「白鬼」「紙幣の亡者」としての身振りを捨てて、源七に「裏町の酒屋の若い者」の轍を踏ませまいとするような行為にあらわれている。そして、源七をあえて「菊の井」から遠ざける、その非功利的な、それどころか源七の執着をおもえば危険でもあるその行為が、案の定、転落下降を、すなわち惨死を招来する。だが、それこそは、非功利的性を貫徹して自死、窮死した祖父と父に殉ずる、「狂愚」としての生き方にほかならないのである。

お力の生と死をめぐるイメージを醸成させ、彼女の生死をも規定した、この狂愚者としての祖父と父であるが、その悲壮な自死が与える衝撃性によって、「底しれずの池」に入水した『暗夜』の蘭の父とならんで読者に強い印象を残すのが、「四角な字を読んだ」という祖父であろう。

この異形の祖父像に代表される、「狂愚」による「身の破滅」『十三夜』という一葉のテキストの多くに通底する主題には、参照された先行例が存在したのであろうか。巨視的に言うとかかる主題を選択する一葉じしんに流れこんでいた思想の水脈があるとすれば、その源は奈辺にあるのか。樋口一葉の文学の、同時代における特異性を構成する最大の要因である、この〈狂愚〉と逸脱、〈狂愚〉と破滅という主題を、表現史のなかに見出すことは可能なのであろうか。

三、「狂愚」の表現史 吉田松陰—李卓吾—樋口一葉

ここで紐解くべきは、古代から戦後にいたるまで「単に過去の個別的な事実の年代的順序に従う叙述ではなく、前の事実を踏まえて後の事実の生じる一すじの流れ、またはその意味での発展を、明らかにしようとする試み⁴³」としての、加藤周一氏の大著『日本文学史序説』であろう。

同書においては、一八六八〔明治元〕年をもって日本近代文学史の幕開けを語り、その栄えある嚆矢として言文一致体小説『浮雲』を掲げてみせる通常の文学史とは一線が画され、「維新において、文学史の「断絶」の面よりも「持続」の面を重んじ⁴⁴」る立場から、吉田松陰から永井荷風までが、転換期文学の括りのなかで連続的に叙述されている。

むろんそのなかに一葉の名もわずかではあれ登場するわけだが、先の問題をめぐって注目せずにはいないのは、いうまでもなく、「狂愚」を熱く礼賛した吉田松陰のくだりである。

加藤氏は、「松陰詩稿」(一八五四〔安政元〕—一八五八〔安政五〕年)におさめられた「狂愚」(一八五七〔安政四〕年)の原文を掲げ、

「狂愚誠可愛 才良誠可虞 狂常鋭進取 愚常疎避趨 才多機變士 良多郷原徒 流俗多顛倒 目人古今殊 才良非才良 狂愚豈狂愚」(二四一頁)⁴⁵

狂愚誠に愛すべし、才良(才知があつて温良なこと)誠に虞るべし。狂は常に進取に鋭く、愚は常に避趨(利害を判断して進退すること)に疎し。才は機變(臨機応変、権謀に長ずること)の士多く、良は郷原の徒(偽善者)多し。流俗《世俗的価値観》顛倒多く、人を目すること古今殊なり。才良も才良に非ず、狂愚豈に狂愚ならんや。⁴⁶

この詩文から、松陰の〈無私〉なる人間像を読みとると同時に、彼が愛着した「狂愚」の意味をつぎのように述べている。「機會主義者(または現実追隨主義者)に対し、また「八方美人」に対して、あくまで前進し、困難を避けない「狂愚」を愛する(…)心情は、力関係の冷静な判断や費用と効果の計算や戦略的な妥協というもの、つまり政治的な思考と、背馳するにちがいない。⁴⁷」

松陰の人物と思想をめぐる同様の評価は、前田愛氏の松陰論『吉田松陰『講孟余話』——無私の文体——』「松陰における「狂愚」下田踏海まで」にもみとめられる。ただ、松陰の文体をめぐることは、「措辞の洗練も、詩的「イメージ」の独創もなくて、彼の詩はほとんど日記のように、機会に応じてその政治的理想を述べる。彼が詩人であったのは、そういう詩を書いたからではなく、その生涯の思想と行動とが一種の詩に他ならなかったからである⁴⁸。」とみる加藤氏とは異なり、前田氏は、その「詩文の如きは興来れば亦作る(…)思慮あれば言語あり、言語あれば詩文あり⁴⁹。」という内発的な創作姿勢に支えられた『講孟余話』(二八五六〔安政三年〕)の文章にこそ、近代的表现の、小さくも貴重な萌芽をみとめるのである。とはいえ、そこから導き出される松陰の人物像および「狂愚」の意は、つぎのように、加藤氏の指摘したそれと一致している。

野山獄につながれ行動を封じられた松陰が、「彼自身の個を文章に托して表現する⁵⁰。」とき、「フオームの完成を至上とする近世的な文章観にかわって、生動する表現としてのスタイルに個を賭ける近代的な文章観の開幕が予告された⁵¹。」と前田氏は述べている。そして、その「パステイックな説得性⁵²」みなぎる「生動する表現」こそが、くだんの「狂愚」⁵³(傍点原文)「狂妄⁵⁴」であり、その狂愚狂妄こそが、「太平の幻想に執着する才良の徒にかわって変革⁵⁵」(傍点原文)を実現するための、松陰にとって最も切実な概念であった、と指摘する。

そのうえで前田氏は、「名利や官職などの現世的利益(功效)から遮断されている⁵⁶。」がゆえに、「政治の体制や機構の問題である以前に、人間的諸価値の転回を意味して⁵⁷」いた「変革」の啓示をもっとも痛覚をこめて受け取ることのできる⁵⁸。」獄囚たちに向かつて、松陰が語りかけた言葉を引用しながら(今の士大夫、学を勉むる者、若其志を論ぜば、名を得んが為と官を得んが為とに過ぎず。然れば巧効を主とする者にして、殆んど義理を主とする者と異なり(…)吾輩逆境の人、乃ら善く逆境を説くことを得るのみ⁵⁹)、「逆境の人」であることを、すなわち順境の人とは正反対に、「義理」のために「巧効」を棄て「狂愚」の人であることを愚直なまでに実践した松陰の純粹「無私」なる人物像を、加藤氏と同様、浮き彫りにしているのである⁶⁰。

加藤、前田、両氏は言及していないが、こうした松陰の思想と行動に影響をあたえた書の一冊に、李卓吾の『焚書』(二五九〇年)がある。野山獄で「李氏焚書抄」⁶¹(一八五九〔安政六〕年)をしたためるほど松陰が心酔したこの書の著者、李卓吾の中心思想のひとつ——それこそがまた、「狂癡」⁶²「愚」⁶³にほかならなかった。

『焚書——明代異端の書』訳者でもある増井経夫氏によれば、李卓吾(李贄・一五二七—一六〇二)は、陽明左派出身、「歴史の要は鑑戒にあつて、その是非の尺度は必ずしも孔子のたてた基準による必要はない⁶²。」という過激な歴史認識、反儒教的、反身分秩序的、脱官僚的主張によって筆禍を招き、政権からの烈しい弾圧を受けた末に、獄中自死。机上の思索ではなく、奸吏の悪政によって二人の娘が飢餓死するという酸鼻きわまる辛苦をつうじて得られた、その思想としての「狂」⁶³について、増井

氏はつぎのように解説している。

彼は全精力を傾注する自分の習性を他人のうちにみることを好み、これを「狂」といった。この「狂」が八ツあたりが発揮されたのではなく、権威に屈せず、同士を支えてこそ道にかなうもののだとして、これを「侠」とよんだ。「……」この「侠」の道は、ついには、いかに死ぬかにつながるものであった。また、彼の平等論は、平等から相和する方向ではなく、ともに不平等への抵抗に「狂」するものであった。「……」陽明学者大塩平八郎は『焚書』を読んだようであるが、これに触発されることはなかった。が、吉田松陰は野山の獄で愛読し、自分の環境と似ていることからこれに心酔し、これを抄録しては感動した手紙を多く残している。幕末に新時代を喚起しようとした若い志士たちが『焚書』に共鳴したことは、不思議な出会いだったというほかはない。李卓吾は早く生まれすぎたともいえるが「……」ただ爛熟と頽廢のなかから新しい生命が生まれるには、平和な妥協ではなく、狂せる「侠」が必要なことは見抜いていた⁶⁴。

李卓吾において「狂」とは、「権威に屈せず、同士を支え」「ともに不平等への抵抗に「狂」すること、すなわち損得勘定をなげうって窮状にある他者を支え、自滅覚悟で「不平等への抵抗」に身を投ずるかぎりにおいて、「侠」と同義だというのである。

万暦帝明代と江戸幕末、いずれも「爛熟と頽廢」のなかで政治的不振をきわめていた時代に、世俗的価値観の根本的な転換を一身に体现することで、つまり、みずからの存亡死生さえ度外視した徹底した利他を実践することで、だれもが己を利することのみに没頭する同時代への抵抗をもっとも過激なかたちで示した李卓吾と吉田松陰の、その思想の精髓が、ともに「狂せる「侠」」「狂愚」であったわけである。

細かく見れば、李卓吾が述べた「童心」や「諫死」、あるいは彼の屈原評価などをめぐって、松陰がみずからの心情に引き寄せてたぶん恣意的な解釈を施している面があることは、溝口雄三氏⁶⁵や劉岸偉氏⁶⁶が指摘する通りであろう。だが、それも充分ふまえた上で、やはり両氏とも異口同音に結論しているように、腐敗のきわみにあった絶対的官僚支配体制のなかで、「非妥協的な自己堅持」によって「身世孤单」たらざるをえない⁶⁷。「自身をこのうえない誇りとした李卓吾の「狂癡（愚）」⁶⁸と、彼に烈しく共鳴し「自己の死を変革の一契機にしよう」とそれを目的に求めたとさえいえる松陰⁶⁹。」の一途な「狂愚」が、一筋に繋がっていたのは確かであろう。

樋口家の蔵書に、松陰にかんする何らかの書も、まして『焚書』も存在せず、一葉がそれらの書を手にとったことをしめす資料もまったく存在しない。吉田松陰の名も、すくなくとも日記には登場しない。だが、中丸宣明氏の作成した一葉の「読書目録」に眼を通したとき、視線を留めずにはいない箇所が、「李卓吾批点、施耐菴作、岡島冠山訳編『通俗忠義水滸伝』⁷⁰。」の一行なのである。前掲、筑摩書房版『樋口一葉全集 第三卷（下）』によれば、同書は、当時、東京図書館に収蔵されていた宝暦版（一七五七〔宝暦七〕年）『通俗忠義水滸伝』（底本、施耐菴作、李卓吾批点、百回本『忠義水滸伝』と同定されている⁷¹。一葉は、一八九二、三〔明治二五、六〕年ごろ、同書をひもとき、第一四一回に記述されている「忠義水滸伝姓氏坐位」、すなわち『水滸伝』に登場する英雄豪傑たち総勢一〇八名の名を、すべて雑記「やたらつけ」に書き写すという作業を行なっているのである⁷²。

小説であれば『小説神髓』（一八八五〔明治一八〕—一八八六〔二九〕年）が推奨する高雅な香りただよう

「進化改良」「ノベル」や西洋翻訳物か、女徳の涵養に役立つ家政実用書や婦人立志伝に、女性の読むべき書がきびしく限定されていた同時代のことである⁷³。法と秩序からの逸脱者たちの義侠と忠勇を謳いあげた、この中国民衆の一大伝奇に一葉が関心を寄せ、その一部を書き写している点に、興味を喚起されずにはいない⁷⁴。同時に関心をそそられずにはいないのが、明治一〇年代後半に到来した『水滸伝』ブームに乗じておびただしく出版され、当時ちまたに大量に流通していたさまざまな『水滸伝』翻案本や絵本などのなかから——高島俊男『水滸伝と日本人』によれば、そのうちもつとも広く普及していたのは、馬琴の『新編水滸画伝』（一八〇五〔文化二〕—一八〇七〔同四〕年初出）であったという——⁷⁵、わざわざ一葉が、李卓吾の批点が付されたこの翻訳本『通俗忠義水滸伝』を手にとった、という事実なのである。同書こそは、体制の学であった朱子学の価値基準を過大視せず、「人間の自由な活動への共鳴を示⁷⁶」すなかで、「知識人が軽蔑する〔…〕通俗文学にも真実があることを認め⁷⁷」るにいたった李卓吾が、その思想表現の一環として評釈を施し、序文を寄せた書⁷⁸なのである。

李卓吾が偏愛したこの遊侠の徒たちの大列伝、この無頼の俠者たちの壮大な白話こそ、幼少期から「英雄豪傑の傳任俠義人の行為などのそゝろ身にしむ様に覚えて〔…〕只利欲にはしれる浮よの人あさましく厭ハしくこれ故にかく狂へるかと思れば金銀ハほとんど塵芥の様にぞ覚え」〔塵之中〕一八九三〔明治二六〕年八月一〇日）たという生来の氣質にくわえて、明治近代における正統的価値観のまつたき枠外に生きざるを得ない境遇から生じた逸脱者としての自己認識——「いたりかたき心のはかなさハなへてのよの中道を経かたくしてやうく大方の人にととなりゆく」〔につ記〕一八九三〔明治二六〕年七月二日）——をあわせもつことになった一葉が、おのずとたぐり寄せた奇縁の書であるにちがいない。

一葉と、明代一の異端の名を誇りとし「狂せる「俠」に喝采を惜しまなかつた李卓吾、そして利ではなく義にこそ超越的価値がある⁷⁹。」と言ひ残して獄中自死を遂げた彼の「狂癡「愚」」に我が意を得、それを純粹に実践することに身命を賭した知行合一⁸⁰の人・吉田松陰との時空をこえた通脈性を、この一葉読書目録の一行は示し見せているといえよう。

ここで改めて、『にこりえ』のお力の祖父をめぐる語りを確認したい。「四角な字を読んだ人で御座んす、つまりは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて断食して死んださうに御座んす、十六の歳から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出来したる事なく、終は人の物笑ひに今では名を知る人もなし」。

ここにある「お上」が、幕府と明治新政府のどちらを指すかは現在のところ解釈が分かれるため、その両方の可能性を視野に入れて、この語りの内容時間を幕末から明治初年までとする⁸¹、卑賤な身だが漢字を読んだという情報に合致する点において、お力の祖父は「古戦物語之本末読候事」や「太平記或者古戦物語之講釈仕候事」を生業とした非人手下の乞胸、講釈師であつたかもしれない⁸²。時代はずつと遡るが、兵藤裕己『（声）の国民国家・日本』に紹介されている、赤穂事件の実録『胆心精義録』（一七二二〔正徳二〕年）を著したかどで幕府「出版条目」に抵触した軍書読み・神田伯龍子⁸³のような人物である。

だが、ここではそうした生業をめぐる議論は措き、彼の精神性に焦点化したばあい、幕末維新期の精神史において、その「一念」な求道性による政權への妥協のない抵抗姿勢は、「氣違ひ」「ものぐる

ひ」なる語に示される非功利性、非合理性において、自詩「狂愚」をそのまま生きた松陰の無私の行動性と、相似形をかたちづくっているのではないか。ともに抵抗に「狂」するための手段として、「断食」というひたすら愚直でストイック、且つ自己犠牲的な抗議方法を選択した点にも——いわゆる伏見要駕策にたいする長州藩側の拒絶に憤激した松陰は、刑死の数ヶ月前に断食を決行している——、両者の精神の類似性が良くあらわれているだろう。

丸山眞男氏が『忠誠と反逆』のなかで、松陰のうちに流れる葉隠的な行動原理について述べた次のくだりも、この両者、李卓吾もふくめれば三者に共通する精神としての〈狂愚〉を指摘したものにほかなるまい。「卑屈な役人根性や〔…〕大勢順応主義に対して、吐き気をもよおすばかりの嫌悪感に裏うちされ、学問と教養のスタティックな享受にたえず抵抗する行動的エネルギーを内包し、中庸でなくて「過度」、謙譲でなくて「大高慢」、——要するに〔…〕非合理的主体性ともいうべきエーロス⁸⁴」

『にぎりえ』は、近代日本史をつうじてただ一度だけ「抵抗権の観念⁸⁵」が広まりをみせた明治一〇年代が、つまり自由自治を訴求する民権運動が燎原の火となって燃え上がった政治の時代が、中央政府による徹底弾圧とその後の周到な措置——大日本帝國憲法および教育勅語の発布——とよってじっさいの時間以上に遠い過去となっていた⁸⁶。一八九五（明治二八）年にあつてなお、「お上」への抵抗に狂した「非合理的主体」たる父祖の記憶を生きる娼婦の、そのアナクロニズムとしか言いようのない〈狂愚〉を主題とした、ロマン的テキストである。しかも、つぎに見るように、その非功利性への志向が、人々からの容赦ない蔑視に囲繞され、孤立を強いられる中でのものである限りにおいて、その〈狂愚〉は、苛烈さと哀切さをいっそう際立たせずにはいない。

フーコーやサイドが明らかにしたように、そもそも近代とは不断に〈他者〉を必要とし、または捏造するシステムにほかならないが、とりわけ自由民権運動を封じ込めるための「もつとも強力な思想的武器⁸⁷」でもあった社会進化論が圧倒的な支配言説となった明治一〇年代以降、あらゆる知と言説の領域において、未開な異質者たる〈他者〉の発見とその馴致というかたちを採った排除に力が注がれていった経緯は、今日の学知がよく示すとおりである。そして、日清戦争という国民戦争を経、統治権を総攬する天皇にたいする人々の忠誠が「官僚化を通じて権限と恭順の倫理と化し、他面で社会化を通じて「世間」への順応と同一化⁸⁸」（前出、傍点原文）するようになった同時期、急速にその存在の重みを増しはじめた「世間」もまた、異質排除という排他的危険性を発現させていたのだった。

お力が自身のうちに流れる狂愚の血を再確認する、くだんの「丸木橋」と「行く水きたなき泥溝」の二場面でも、娼婦や貧者といった他者にたいする「世間」の一元的理解＝無理解や、冷淡な無関心への悲しみが語られ（情けないとても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商売がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞ふ）、立てしばらく泣いて居たれど何うしたと問ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買てやらうと言ふ人は猶更なし）、テキスト終端の噂話の場面でも、娼婦の斬死をたんなる商品的損失としてのみ把握する「世間」の酷薄性が語られているが、そのようにテキストには、新開の酌婦という場末の娼婦に向けられた「世間」の賤視観をつたえて余りある言説や表象記号が横溢していた。そして、その「世間」とは一線を画するはずの知識層においても、「穢い、卑しい、忌むべき、嫌うべき、悪むべき〔…〕獣類⁸⁹」などの形容表現に明らかかなように、却って「世間」以上に容赦のない蔑視観、あるいは憎悪にも等しい侮蔑観が蔓延していたのである。

「世間」外——さらには人間外の存在とすら規定する、それ自体がむしろ狂気じみてさえいる執拗

な悪罵としてのこうした言説群に圍繞されながらも、父祖の非功利的な生涯に殉じようとする悲しみや孤独や不安を、娼婦はつぎのように独白する。「つまりらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だく」。「ほんに因果とでもいうものか私が身くらいかない者はあるまいと思えます」。

近世文学においては色と流行の表象記号として叙述されるにとどめられていた娼婦、しかも彼女たちの中でも「三味線ひけども藝者といふ名もなく、かん札うけねば女郎でもなし、此様な商売するものゝ中でも下の下といふ賤しい稼業」『にこりえ』未定稿C)、「銘酒屋の看板を懸けて麴に淫を鬻げる賤婦。」(小島鳥水)、「巴里の Demi-monde より地位卑しく、伯林の Putzschin より行状あらはなる此一種の墮落女子。」(概論家「森鷗外」)としての娼婦が、狂愚を生きて没した父祖の血脈を受け継ぐ自らの内面、すなわち「胸にたたまって」いる情念や怨念、俠気や悲哀、絶望や逡巡、孤独感や自暴自棄といった複雑な心理を語るといふ、テクストのこの近代性。先に掲げた前田愛氏の論を受けるならば、草莽崛起の志士・松陰の『講孟餘話』においてはじめて緒についた近代的「個」の表現は、その「パセティック」な響きをもつ「狂」という語をそのままに、三六年後の明治日本、樋口一葉が『にこりえ』に登場させた最下層の娼婦の内面表現へと、接続されたのである。

だがしかし、松陰と一葉のあいだには、決定的な切断線が走っていることも忘れてはなるまい。有名な言「天下は天朝の天下にして、乃ち天下の天下なり、幕府の私有に非ず。故に天下の内何れにても外夷の侮りを受けば「…」普天率土の人、如何で力を盡さざるべけんや。尚ほ何ぞ本國他國を擇ぶに暇あらんや。」(「將及私言」一八五三「嘉永六」年)に明白なように、あくまで松陰にあつては「日本固有の究極的な君臣関係が天皇と国民の関係とされ、忠誠の対象が天皇一人へと究極化」⁹³されている。つまり、松陰においては、丸山眞男氏が「没我的」⁹⁴とも形容したように「忠誠」が純粹無条件に絶対化されており、そのうえで「忠誠」を捧げる対象が幕府ではなく「天皇」に規定されているのである。⁹⁵これは、あらかじめ「忠誠心」を一人一人に内在する自発性⁹⁶と前提化したうえで、この誰もにそなわっているはずの自発的忠誠心、すなわち「ナショナルリズム」⁹⁷を「天皇」にたいする「忠誠」へと収斂させてゆこうとする、「理念上の「国体」の発揚」⁹⁸にほかならなかつた。

つまり、松陰のなかでは「忠誠」の主体⁹⁹としての「国民」観念が早くも力強く芽生えていたわけだが、樋口一葉の場合はどうか。まさにそれは、これまで本論文において論じてきた通りである。

出世作『うもれ木』(本論文第一章)は、当初「大日本帝国の名譽」を顕示する傑作美術品の制作に専心していた主人公が、その熱烈な愛国心に付け込んだ似非紳士の奸計に妹ともども陥れられる悲劇をとおして、忠君愛国主義それ自体にたいする懷疑を抱くに至り、みずから万博出品を毀損させて「日本帝国の一臣民」であることから離脱してしまう物語だが、これを皮切りに——とりわけ『暗夜』以降、臣民としての国民からの逸脱の物語が本格的に展開されていったのだった。

『暗夜』(本論文第二章)に描かれる、父と自分を踏み台に衆議院議員におさまりお世話した男に報復を仕掛ける女主人公は、皇后に象徴される日清戦争下の模範的女性国民像と似て全く非なるだけでなく、その暗殺の刃を突きつける真の先が「利口の君、才子の君、万々歳の明治の世」であるかぎりにおいて、天皇制中央集権国家＝明治国家への不逞な叛逆者として造形されているに等しかつた。

『にこりえ』(本論文第三章)では、近代史上初の対外戦争をへて国民観念が人々のうちに根を下ろした日清戦後にあつて、女性国民どころか国家の恥辱とさげすまれる娼婦と、彼女に蕩尽することで致富成功をつうじた国家貢献を放擲したといえる男の不条理な惨死を描き、国民国家の埒外の物語

を紡いでみせた。

『わかれ道』（本論文第四章）においても、日本資本主義の確立のもと、苛酷な賃労働に疲弊したあげく、性規範も、規律／訓練的な労働規範をも逸脱して、「腐れ縮緬着物で世を過ぐ」妾に転身する女と、矮小な身体と孤児という出自ゆえに出世の夢から疎外された少年との、つかのまの交情と別れを描くなかで、立身出世という〈国民の物語〉の虚妄性を炙り出してみせた。

最晩年作の『われから』（本論文第五章）では、少国民を産み育てる勤儉貞淑な良妻賢母像に背反して〈女〉をあるがままに生きるヒロインを待ち受ける破滅を語るが、その語りには断罪的な語調はうかがえず、むしろ同時代の教条的な性規範を逸脱するその非政治性に共感的な言葉遣いさえ、聴き取ることができるのである。

つまり、成田龍一氏がいみじくも述べたように、「一葉が一八九四年から綴っていく小説世界の登場人物はいずれも「国民」としての相貌をそぎおとし¹⁰⁰」ているのだ。重要な点は、その「国民」としての相貌」の喪失が、成田氏がここで含意するところの、国民国家の成員意識の喪失という意だけでなく、安丸良夫氏が『近代天皇像の形成』で述べた「天皇制に直接的にかかわる正統性観念」からの逸脱——信頼関係の破綻や貧困や薄遇な出自といった市井における具体的な負の経験をきっかけに志向される、正統的「国民」像にたいする一種の抵抗——をも、意味しているという点である。安丸氏がC・グラック『近代日本の神話』を要約するなかで「天皇、忠義、村、家族、国家¹⁰¹」と記した「天皇制に直接的にかかわる正統性観念」をここでより具体的に規定するならば、次に掲げる、国民教化のために案出された主要な国家装置によって醸成されたところの観念である。

「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス¹⁰²」と布告された「五箇条の御誓文」（一八六八〔明治元〕年）。「敬神愛国」「天理人道ヲ明ニスヘキ事」「皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事¹⁰³」を謳うとともに、『西国立志編』『学問のすゝめ』を二大教材に文明開化の理を示した¹⁰⁴「三条教憲」（一八七二〔明治五〕年）。「身ヲ立ルノ財本」としての学問を修め、立身出世をとげること、国家の「富強安康」（同年、文部省より太政官あて伺書¹⁰⁵）に寄与すべきことを説いた「学制」（同年）。兵馬の大権を掌握する天皇に、その「股肱」として「忠節」「礼儀」「武勇」「信義」「質素¹⁰⁶」を尽くす旨を、兵士ひとりひとりの胸に刻ませる「軍人勅諭」（一八八二〔明治一五〕年）。限られた有産者のみに地方政治を運営させることで政治への民意反映を遮断し、天皇制中央集権国家の機構を築いた¹⁰⁷「市制町村制」（一八八八〔明治二一〕年）。「万世一系」にして「神聖」不可侵の天皇による「統治権」の「総攬」を条文化した「不磨ノ大典」、「大日本帝國憲法（含憲法発布勅語）」（一八八九〔明治二二〕年）。国民教化の本源を「国体ノ精華」にさだめ、治教の大権を握る天皇への忠誠と父母への忠孝を一本に統合した「教育勅語」¹⁰⁸（一八九〇〔明治二三〕年）。

つまるところ、かかる「正統性観念」とは、前田愛氏が「正統と伝統——近代日本文学形成の条件」で語気荒く、だがこの上なく的確に表現したように、「儒教的な倫理が卑俗化された功利主義と野合を遂げて¹⁰⁹」、「産み落とされた観念にほかならなかった。すなわち、『西国立志編』『学問のすゝめ』が説き、「克己・勤勉を強調する儒教的な禁欲主義ないしは武士的心情¹¹⁰」をいまだ生きる人々に滑らかに、あるいは熱狂的に受容されたところの立身出世主義が、「万世一統ノ皇室」に対する忠誠心¹¹¹」へとまっすぐに接合された結果としての、正統モラルだったのである。

だが、教育勅語のプレテキストとして著名な西村茂樹『日本道徳論』（一八八七〔明治二〇〕年）の提出によって、「維新以来進行していた儒学と功利主義を折衷する作業の総仕上げ¹¹²」が完了し、「天

皇制的な「正統性」が原則的に確立した¹¹³。明治二〇年代、かかる「天皇制に直接的にかかわる正統性観念」が近代日本の津々浦々にまであまねく浸潤してゆくなかで¹¹⁴、吉原遊廓裏の細民町で貧しい子供たちを相手に一毛一厘の商いをしていた樋口一葉は、「虚無のうきよに君もなし 臣もなし 君といふそもく偽也 臣といふも又偽也」(『塵之中日記』一八九四〔明治二七〕年三月とのみ表記)と驚くべき言葉を書きつける。一葉はこのころから、そうした正統モラルが範とする、国家に有用の人であることを放棄し、まつろわぬ無用者となつて社会階層を転落してゆく男女の物語をおもむろに語りはじめるのである。

樋口一葉にとつて、物語行為とは、立身出世主義と忠君愛国精神が堅く結ばれた天皇制中央集権国家、近代日本にたいする、いわばひとつの叛意行為としての軌跡だったのであり、尊王をとなえた松陰が非命に斃れなければならなかった幕末とはうらはらに、近代日本においては、それこそが「狂」にほかならなかつたのである。

四・同時代言説における「狂」と「侠」

田岡嶺雲―星野天知―北村透谷―戸川秋骨

これまで眺めてきたように、樋口一葉の物語行為における中心的主題――(狂愚)と転落、破滅は、表現史においては、吉田松陰や李卓吾の「狂愚」と脈略しつつも決定的な断絶面をみせていたわけだが、ひるがえつて同時代言説群の上に眼を移すと、かかる主題はそれらとも、通脈と断絶の関係を切り結んでいたことがわかる。じつは当時、『青年文』や『文學界』の論者たち――田岡嶺雲、星野天知、北村透谷、戸川秋骨らもまた、「狂」と「侠」という言葉を手がかりに議論を熱く交わしていたのである。だが、一葉の主題としての「狂」は、彼らの言説内容と同時代的な類似性を示しつつも、やはり明白な差異を際立たせずにはいない。樋口一葉の主題の独自性を分析することによって、本論文の各章でそれぞれ浮き彫りにしてきた樋口一葉の文学の特異性をここで総括的に提示したい。

まずは、前節でも取り上げた『にぎりえ』を、「狂」と「侠」をキーワードに論じた『青年文』から見てみたい。同言説は、いわゆる没理想論争とも踵を接する興味深い内容を備えている。

『にぎりえ』の文章は明かに「山田」美妙の円熟に達せず、然れども其人物に於いては、吾人は終に一葉女史を推さざるを得ざる也。其主人公たるお力は阿八重〔美妙『鰻旦那』の主人公名〕に比べてお力は百千倍激烈なる俠氣を有し、其源七に対する恋愛は若し然く云ふことを得ば全然俠氣即ち意気地なり。「…」お力は富みたりし源七を愛して、貧しき彼を棄てんとせり。此実に濁江社会普通の常態なり。然れども『にぎり江』のお力は決して是に尽きたるに非ず。「…」彼は酌女なると同時に人間なり。種族酌女なると共に、箇人お力なり。此に於てか其主人公は朦朧たる影に非ずして、血あり涙ある人間なることを得たり、是実に吾人が『にぎり江』を推さんとする所以なり。由来人間は或は種族としての境遇の下に、常に心にもあらぬ行為を成さざる可からざる運命を有す。而して彼の心は其特種の境遇に対して形作られずして、単に人間として作られたり「…」此憐なる者が「…」未だ全く人間としての心を撲滅し盡さざる時、麻の如く糸の如く、乱れに乱れたる情緒は、決して単純なる三段論法と帰納法の説明し盡す所にあらず、此間

の消息を捉へ来る者、人間唯一の詩人あるのみ。

〔…〕「丸木橋の場面を」何者か狂じみたりと云ふ、何者か厭世観を振り廻す者なりと云ふ、若し是をしも狂気なりと云はゞ、人生は元来狂気なり、若し是をしも厭世観なりと云はゞ、人間は総て厭世漢也、単に理屈世界の人物と、俗社会の行動言為を精細に直写し来つて、小説の能事終れりとなすものは、畢竟写真と絵画とをも區別し得ざる者也。彼の広漠たる領土はフアンタジイの支配する処也、影と形は決して実物なること能はざる也。みだりに實際らしき虚事を構ふる者は、拙なき人形芝居にて、無障無碍なるフアンタジイの活動こそ、詩人の生命なれ。

（無署名『鰻旦那』と『にこりえ』『青年文』第二巻五号 一八九五〔明治二八〕年一月、一五―一六頁）

『青年文』（一八九五〔明治二八〕年二月創刊―一八九七〔三〇〕年一月廃刊）創刊者の一人にして、編集主幹であった田岡嶺雲のもと、おそらく佐々醒雪（樋口一葉全集）は筆者を佐々と同定¹¹⁵）がここで述べている内容は次の通りである。

零落したかつての上客・源七にたいするお力の所為は、「種族酌女」のそれではなく「血あり涙ある人間」としての所為であり、そんな彼女の「俠気即ち意気地」、つまり昨今の「濁江社会普通の常態」である経済効率至上主義をいさぎよしとしない非功利的な側面をみごとに描出した一葉こそ、「詩人」である。いかにも作り事めいているという批判もある心中思惟場面もふくめた、このお力の非功利的人物像の造形にこそ、一葉の「詩人の生命」が脈動している。

この言説において注目すべきは、かの『いきの構造』が「江戸文化の道徳的理想¹¹⁶。」と呼んだ「辰巳の俠骨¹¹⁷」、すなわち金銭にひざまずく「蹴ころ」「不見転」を卑しむ凜乎とした意地¹¹⁸。」をお力のうちにも認め、その「江戸文化の道徳的理想」と当世風の卑俗な功利主義との狭間を生きる彼女の「乱れに乱れたる情緒」や「狂気」を捉えた点に最大の評価をあたえることによって、同時代文壇を席捲し、その後の日本人の文学観をも長らく規定した、前掲、坪内逍遙『小説神髓』へのあからさまな批判を行なっている点だ。

「単に理屈世界の人物と、俗社会の行動言為を精細に直写し来つて小説の能事終れりとなすものは、畢竟写真と絵画とをも區別し得ざる者」とはそのまま、『小説神髓』の本文「心理学者のごとし宜しく心理学の道理に基づき其人物をバ假作るべきなり¹¹⁹。」「小説の作者たる者ハ専ら其意を心理に注ぎて我假作りたる人物なりとも一度篇中にいでたる以上ハ之を活世界の人と見做して其感情を写しただすに敢ておのれの意匠をもて善悪邪正の情感をバ作設くることをバなさず只傍観してありのまゝに模写する心得にてあるべきなり¹²⁰。」に対する、また、「みだりに實際らしき虚事を構ふる者は、拙なき人形芝居」は、やはり『神髓』の「見るが如くに画きいだし活たる如くに写しただすを其本分とハなすものなり¹²¹。」に対する、真つ向からの反論であることは明白であろう。

なお、田岡嶺雲も「写真と理想」と題された『青年文』時文において、右の『鰻旦那』と『にこりえ』の内容と酷似した内容——「写真もとより可なり、然れども写真にして小説の能事畢〔終〕れりとせば即ち不可。作家は写真を材として理想の樓閣を築かざる可らず¹²²。」と強調していることから、嶺雲と醒雪の文学的価値観や評価軸は同一であったと言い得るだろう。

佐々醒雪、そして編集主幹として文責を負っていたはずの嶺雲は、ベインの心理学やフェノロサの美術論やスペンサーの進化論といった最新の学知を総動員して小説の本分を科学時代にふさわしい（リアリズム）に規定した逍遙の¹²³、その実証的小説観が全的に否定する要素——「乱れに乱れたる情緒」「俠気」「狂気」「厭世」などの混沌とした情念——をお力のなかにみとめ、そのような「人

間」の非合理的な側面——「単純なる三段論法と帰納法」による合理的解釈には回収されえない「無障無碍なるフアンタジイの活動」——を紙上においてみごとに展開したとして、一葉に最大級の賛辞を贈っているのである。

つまり、ここで醒雪らは、『小説神髓』の〈リアリズム〉対『にこりえ』の「フアンタジイ」という対立的図式を立てたうえで、後者を全面的に支持する論を展開しているわけだが、このとき彼らはその議論において、両テクスト間に伏在するもうひとつの対立をも射程に入れていたにちがいない。〈進化〉対〈歴史〉、あるいは〈未来〉対〈過去〉という対立である。醒雪らはこの対立点について直接的な言及こそしていないものの、彼らの評価の最大根拠たる「無障無碍なるフアンタジイの活動」が、後述するように〈歴史〉の記憶と密接不可分に結びついているかぎりにおいて、彼らの『小説神髓』批判のうちには、その〈進化〉論的小説観にたいする、ほとんど生理的嫌悪といって良いほどの反撥がふくまれていたはずなのである。

社会進化論の洗礼を東京帝国大学在学中に受けて以来、その先端アカデミズムとしての進歩史観を信奉しつづけてやまなかった逍遙が、歴史や過去への視点を内在させているロマン主義的政治小説や歴史小説を「歴史の進歩に逆行する邪悪なしるし¹²⁴」と見、人情世態リアリズム小説におのずと取って代わられるべき旧弊ジャンルと捉えていたことは、前田愛氏の文学史論「明治歴史小説の原像¹²⁵」に述べられている通りである。坪内逍遙の小説観は、『神髓』の一節——「かくの如き進化を経て小説おのづから世にあらはれまたおのづから重んぜらる是しかしながら優勝劣敗自然淘汰のしからしむる所まことに抗しがたき勢といふべし¹²⁶」が端的に示すように、冷徹な合理性と楽観きわまりない未来信仰とにらぬかれた進歩史観に全面的に依拠していたのである。

他方、たとえば、年少時から土佐民権運動にかかわったのち上京し、政治経済科を卒業した坪内逍遙とは対照的に、東京帝国大学前身・文科大学では「死文字¹²⁷」に凋落しつつあった漢学を修めた田岡嶺雲は、同窓であった憂世の漢詩人、中野逍遙らと社会の格差矛盾に悲憤慷慨しい、社会変革を希求する浪漫的熱情——「满腔不平の迸り出でたる¹²⁸」「熱情¹²⁹」と「狂¹³⁰」情——を交感しあう「多情多感¹³¹」の人であった。

そうした嶺雲ら、「詩人の要件として靈識と狂熱を強調する¹³²」批評者を揶揄、批判した坪内逍遙の『太陽』論説文¹³³にたいして、嶺雲が、「吾人は飽くまでも狂熱を以て詩人たる所以の最も重き要件なりと信ず¹³⁴」と激しく応酬したことは特記されてよいだろう。

『青年文』廃刊後に移った『万朝報』（二八九二〔明治二五〕—一九四〇〔昭和一五〕年）や『文庫』（二八九六〔明治二九〕—一八九七〔三〇〕年）でも、富閥と藩閥を打倒する「第二の革命¹³⁵」の必要性を唱えて臆することがなかった嶺雲にとって¹³⁶、維新とは〈進化〉ではなく「裏切られた革命¹³⁷」であり、自由民権運動こそが真の「革命の継承¹³⁸」であったのである。「強が弱を凌ぎ、富が貧を凌ぐ¹³⁹」「左顧右眄唯実利を的とするのみ¹⁴⁰」の世相に、「满腔鬱勃の不平¹⁴¹」をつのらせ痛飲するみずからを、嶺雲も一葉のテキスト表現と同様、「狂愚¹⁴²」と形容していることは重要である。

そのような嶺雲と醒雪がもつとも価値を置いたのが、「お上」への抵抗に「狂」して幕末維新期の〈歴史〉の波間に沈んでいった祖父の記憶と分かちがたく結びついているところの、お力の「俠氣」「狂氣」「厭世」であったのは、至極当然のことだったはずだ。辛くも発禁をまぬがれた『明治叛臣伝』（二九〇九〔明治四二〕年）でも、風化の危機にあった自由民権激化諸事件の事跡を丹念に辿りなおし、明治維新の意義をきわめて批判的に検証することになる嶺雲¹⁴³らは、畢竟、『にこりえ』のほ

かならぬロマン的な部分——時の政権へ叛逆して敗れ去った者をめぐる記憶——に強い印象を受けていたと言い得る。

だが、そうした〈歴史〉の記憶とむすびついている「俠氣」「狂氣」「厭世」などのロマン的なパトスこそ、逍遙の進歩史観にあつては、万物進化の理に昏い無知蒙昧たちの愚痴であり、自棄にすぎなかった。逍遙はつぎのように述べている。「ローマンチズム¹⁴⁴」としての歴史小説とは、「多情多感なる血気の徒¹⁴⁵」の「狂憤¹⁴⁶」「絶望¹⁴⁷」の「慰鬱排悶の具¹⁴⁸」にすぎない。「限なき理想の進歩ハ限なき人間の進歩を意味す人世また樂しからずや狂憤と絶望とハ史に暗きが故に生ず¹⁴⁹」。おそらく嶺雲らはこうした逍遙の進歩史観、すなわち〈歴史〉の転換期に潰えていった無数の敗者たちの思念をいっさい捨象し、その幕末維新から自由民権運動壊滅までの激動期を国家発達のたんなる一段階としてのみ把握する逍遙の、傲慢といえは傲慢、呑氣といえは呑氣な進歩史観にたいして、辛辣な批判を突き付けずにはいらなかったのである。

こうした嶺雲の明治維新にたいする批判的視座¹⁵⁰と、進歩史観の対置概念としての「狂」「俠」にたいする積極的肯定、別言すれば、「狂」あるいは「俠」の精神をもって未完の革命たる明治維新を真に完遂せしめようという客氣にかられた主張は、じつは、同時代にあつて決して独特ではなかった。

『国民之友』『日本人』『日本』『時事新報』『しがらみ草紙』『女學雜誌』などの誌上において、欧化主義と国粹主義、民権と国権、キリスト教精神と儒教道徳、世界主義と国家主義、実利主義と理想主義、改良と伝統など、幾通りもの対立項をめぐって議論が尽きることなく交わされ、論壇がかつてないほどの熱氣を帯びていたこの明治二〇年代中葉の「評論の時代¹⁵¹」、とりわけ『文學界』（一八九三〔明治二六〕年一月—一八九八〔三一〕年二月）につどった文学青年たちもまた、明治維新政府とその社会批判としての「狂」「俠」論をものしていたのであり、彼らの「若いさかりの熱」「熱病」（前掲、一葉『ゆく雲』の青年桂次をめぐる形容）は一葉にも少なからず伝播していたはずである。

一葉研究史においては、すでに大井田義彰氏によって著名な日記文「わがこゝろざしは国家の大本にあり」（『塵中につ記』一八九四〔明治二七〕年三月）や、「俠」の体現者石之助による「弱者救済というモチーフ¹⁵²」をもつ『大つごもり』が、以下でも取り上げる星野天知「俠客伝」、透谷「徳川氏時代の平民的理想」「三日幻境」と「どこかで響き合っていた¹⁵³」と正しく指摘されているが、本節では論点を変えて、一葉の諸テクストに通底する維新をめぐる歴史認識と、『文學界』言説のそれとの相同性について言及してみたい。

時系列に沿って、まずは『文學界』創刊人にして「社内内部に於て同人を統率したる者（…）」文學界を支配せし眞の人物¹⁵⁴」と考証されている星野天知の「俠客論」（『女學雜誌』第三二〇号・甲の巻、一八九二〔明治二五〕年六月四日）を見てみよう。

村上浪六のいわゆる撥鬢小説の流行を背景に書かれた¹⁵⁵ 同言説は、「今や社会俠氣なく卑劣不徳の者白昼に横行し、金と権とは正義の口を嚙まば得らるべしと認定し、腕と威とは弱を凌駕し遂ぐべきものと信じ、強に媚び弱を犯し、昔への壯士は俠客にして今の壯士は不義暴人と成りぬ¹⁵⁶」という、地に堕ちた人心を諷め改める契機として「俠客」を理想人物として掲げ、その行動原理を仔細に紹介することを通して、荒唐のきわみにある社会全体の変革を呼びかけた、いうなれば一種の檄文ともいべきテクストである。

天知は、「史公」に定義された遊俠者像と江戸期の俠客像をあわせて分析、その、信義に篤く、謙

讓を旨とし、陰徳に徹して、能を矜らず、といった美德の数々が、すべて「他愛¹⁵⁷」とりわけ「弱き者¹⁵⁸」の救済に結実している点に、至高の価値を置いている。「彼ら〔侠客〕が歴史は非常なる血文字なり、不権衡の大刺激は彼らの生立ちをして殆んど狂せしめんとし、終に其氣風は必要の急流に乗じ、先ず社会の下層に一種の慷慨を叫んで弱者の身方となりし者は彼れなり¹⁵⁹」。そう述べたうえで、天知は次のように主張する。「弱者」へ「多情多涙」を注ぐあまりに「最も好まざる破壊者たるべく而かも烈叫たる争闘者と成ることは彼れが濃厚の氣質を現はす所にして、感激殆んど狂に近く¹⁶⁰」、¹⁶⁰、「凡そ社会が非常なる不権衡を生ずるに当てや、必ず之れを整ふるの必要として、非常の平均策を非常の手腕に仮らざるを得ず〔…〕此変則なる非常物は実に非常時期の救済者にして、其束縛を切放つの利刃¹⁶¹」。

つまり、星野天知は、維新政権を「非常なる不権衡」をもたらし「壓制¹⁶²」と認識し、その「壓制」がまねいた現時の「国家の衰運」「道德極衰」「社会不権衡¹⁶³」を打破する手段として、侠客たちの「破壊」「争闘」も辞さない「非常の手腕」、すなわち「弱者」への過剰なまでの共感の発露としての「狂せる「侠」」（前出、増井経夫氏）を挙げているのである。それは、侠客論のかたちを借りた、維新という「裏切られた革命」への批判論であり、「狂」せる「侠」という無私の精神による「第二の革命」（以上、前出、田岡嶺雲）の待望論に等しいかぎりにおいて、先の田岡嶺雲の主張内容といささかも変わるところがない。

この「侠客論」に啓示を受けて執筆されたのが¹⁶⁴、北村透谷の「徳川氏時代の平民的理想」〔『女學雜誌』第三二二―四号・甲の巻、一八九二〔明治二五〕年七月二・一六・三〇日〕である。

同評論は、江戸庶民の理想的行動規範としての「侠」の本態を、「欧州諸国」文学に描かれた「シバルリイ（侠勇）¹⁶⁵」と比較対照しながら分析したテキストだが、そこから導き出される結論は、次のようである。わが江戸の「侠」は、西欧の「華奢麗澤¹⁶⁶」「燦然たる光輝を放つ¹⁶⁷」騎士道としての「シバルリイ」とは異なり、あくまで市井の民草のあいだにのみ存在する「壓抑の反動として凶暴に対する非常の手腕として発したるもの¹⁶⁸」、すなわち「政権に抗し威武に敵する氣稟あるシバルリイ¹⁶⁹」である。

ところで、この「徳川氏時代の平民的理想」をめぐる論攷「馬琴と透谷——「侠」をめぐる——¹⁷⁰」においてもその一連の幕末維新期文学論においても、前田愛氏は、透谷が「明治文學管見」（一八九三〔明治二六〕年）のなかで「明治維新を未完の革命として把握¹⁷¹」すると同時に「自由民権運動を第二の明治維新として把握¹⁷²」していたことを、くりかえし指摘している。

この前田氏の指摘をふまえた上で本稿が述べようとするのは、次の事柄である。透谷が同評論において、「侠」の本態を「壓抑の反動として凶暴に対する非常の手腕として発したるもの」「政権に抗し威武に敵する氣稟あるシバルリイ」であると論じたことは、「侠」が「壓抑の反動として」発生したという「侠」の生成背景を論じたことに等しい。透谷が同評論において試みたのは、じつは「侠」の本態分析を通して、この「侠」が生成された政治的、歴史的背景に照明を当てることではなかったか。評論全体を通して、透谷がたえず視線を注いでいるのは、なによりこの「侠」の生成過程、あるいは「侠」を希求せざるを得ない平民たちの精神のありようなのである。

とすれば、このとき透谷は、「侠」という平民的エートスが生み出されたその封建時代の政治的状況と、村上浪六の撥鬢小説『三日月』（一八九一〔明治二四〕年）や『奴の小万』（一八九二〔明治二五〕年六月）が大好評をほくしている、「侠勇を謳ふの時代未だ過ぎ去らざる¹⁷³」（一八九二〔明治二五〕年現

在の状況を、重ねあわせて見ないわけにはいかなかったはずだ。

透谷は、この「徳川氏時代の平民的理想」のなかで、近世文学に映し出された平民たちの精神を「虚無思想¹⁷⁴」であると述べている。「自由」という「人間天賦の靈性」をあらかじめ封圧された平民たちは「権勢家の剛腹にして、暴慢なる制抑を離れて、別に一種の思想境を造り自ら縦にするところなきを得ず¹⁷⁵」〔傍点原文〕、その結果おのずと身にまとうようになった「虚無思想」が、時として「不羈磊落の調子¹⁷⁶」を帯びた「放縦¹⁷⁷」となつて発現し「暗に武門の威権を嘲笑¹⁷⁸」などするうちに、閭巷に「幕政を軽侮し平民社会の保護者となり、壓抑者に対する破壊的手腕¹⁷⁹」をふるう「侠客」が登場した。彼等が体現する「侠」を熱愛して止まないが、「侠」を重んずるかと思われれば答えに窮する——そう透谷は記したのち、論の最後をこう締め括っているのである。「われは実に徳川時代に平民の理想となりて異色の光彩を放ちしこの「侠」を其時代の平民のために憐れむなり。〔…〕彼等平民は自ら重んずる故を知らず、自ら侠客なるものをして擅横縦暴の徒とならしめたり、侠客の俠客たる所以甚だ重しとせず、平民界に入て一種の理想となりたる跡真に痛べし¹⁸⁰」。

「侠」とは、あるいはその発現としての「破壊的手腕」とは、「自由」が剥奪されたことによつて平民たちが等しく陥つた「虚無」から派生したものであり、つまりは平民の被抑圧的位相を象徴する精神と行動であるにもかかわらず、それをひたすら無心に理想化してやまない平民たちに、透谷は憐憫のまなざしを注いでいるのである。だとすれば、このとき透谷は、それと同じまなざしを、町奴の侠勇を活写した撥鬢小説に快哉をさけび、「調子の低くして陰なる〔…〕虚無¹⁸¹」的な俗謡を甚に流行らせる一八九二〔明治二五〕年現在の平民たちにも向けていたにちがいない。

「徳川氏時代の平民的理想」と題された評論は、現在が封建時代と同様、「精神の自由」が保障されず、「虚無」が瀰漫する暗黒時代にほかならないことを言外に訴えたテクストなのである。嶺雲や天知のばあいと同じように、現行の維新政権とその社会への辛辣な批判が、「侠」を称揚する評論をとおして発せられているのだ。

さらには透谷にも、その詩人としての感受性がなせるわざであろう、嶺雲や天知以上に、「侠」に変革の精神の理想をみようとする視座があった。たとえば、同評論がまさに『女學雜誌』に分載されていたさなかに再会をはたした、「老侠客」にして多摩自由民権運動の担い手のひとり、秋山国三郎が体現する侠に、透谷は変革の精神の理想型を認めてやまなかった¹⁸²。

このときの南多摩郡川口村再訪記「三日幻境」〔女學雜誌〕甲の巻、第三三五・三三七号、一八九五〔明治二五〕年八月一三・九月一〇日〕において、先に引用した「侠客なるものをして擅横縦暴の徒とならしめたり」を髣髴とさせる表現で、「一個の俠骨男子¹⁸³」「豪俠を以て自から任じ¹⁸⁴」「或時は劍を挺して武人の暴横に当り、危道を踏み死地に陥りしこと数を知らず¹⁸⁵」と語られている龍子秋山国三郎こそ、「我性尤も俠骨を愛す¹⁸⁶」と広言してはばからなかった透谷が生涯でもっとも敬慕した、「生きた「徳川時代平民的思想」の具現者¹⁸⁷」であった。

色川大吉『新編 明治精神史』によれば、川口村周辺に門弟百余名を擁する義太夫師匠でもあった秋山は、多摩民権運動の高揚期、自由の二字を金糸で刺繍した衣装を着せた車人形をあやつり、佐倉宗五郎などの義民ものを語っては、「村民たちをふるい立たせた¹⁸⁸」という¹⁸⁹。透谷は、「世に知られず人に重んぜられざるも胸中に萬里の風月を蓄へ綽々余生を養ふ、この老俠骨¹⁹⁰」の中に、「奇運に遭会し代議士の榮譽を荷ひて議場に登るや、酒肉足りて脾下見苦しく肥ゆるもの¹⁹¹」となつた「昨日の一壮士」からは絶えて失われた、変革や抵抗の精神の理想を見ていたのである。

民権運動の退潮に失望し、煩悶に囚われていた十代の自分に精神の恢復をもたらしてくれた老侠客とその故郷の不易不変ぶりに、ふたたび心身を癒された三日間を時にユーモラスに綴った「三日幻境」は、透谷のテキストのなかでは珍しく明るく、なにより美しいテキストだが、その末尾に、高尾山琵琶滝附近に集住する「狂人」たちの示す無心の「真意」¹⁹²に透谷が心を打たれる場面がある。透谷にとって「狂」「狂痴」とは、そのように無私や他愛、衷心を象徴する言葉であると同時に、かかる非功利的行為への強い志向を意味するかぎりにおいて、「俠」と近接した言葉であったことを指摘しておきたい。その一例として、以下を掲げる。「名利を貪らんとするの念慮は全く消え憐む可き東洋の衰運を恢復す可き一個の大政治家となりて己れの一身を苦しめ万民の為に大に計る所あらんと熱心に企て起しけり（…）一個の大哲学者となりて欧州に流行する優勝劣敗の新哲学を破砕す可しと考へたり（…）嗚呼何者の狂痴ぞ斯かる妄想を斯かる長き年月の間包有する者あらんや」¹⁹³（石坂ミナ宛て書簡草稿、一八八七〔明治二〇〕年八月一八日）

最後に掲げる評論は、島崎藤村が星野天知にあてた書簡のなかで「一葉女史尤も変調論を愛読するやにて実にめづらしきすねものと存候」¹⁹⁴と印象深く記したところの、戸川秋骨の「変調論」『文學界』第三号、一八九四〔明治二七〕年一月〕である。

万物の「造化」と個人の「精神」が融合した「生命」こそがあらゆる活動の根源的なエネルギーであり、人間と宇宙の究極の目的は「此の生命が自由に濶歩翱翔するの境」¹⁹⁵に達することである、という宣言にはじまる同評論は、「凡ての秩序と繩墨とを破り去りたる生命的活動物」¹⁹⁶の象徴として、「革命」と「狂乱」と「詩人」を挙げ、とりわけ詩人の「無用」性、非「功利」性、「時代」にたいする「超絶」性、すなわち「大不健全なる精神」¹⁹⁷を大いに称揚する内容の、透谷「内部生命論」『文學界』第五号、一八九三〔明治二六〕年五月三日〕と「バイロン」(原文)の影響を濃厚にうかがわせるテキストである。「浪漫的情熱」¹⁹⁸がみなぎっていた当時の『文學界』を象徴する言説といえようか。

一葉文学における同言説の受容問題について考察した藪楨子氏は、「二十七年から二十九年の一葉文学を見通す上で、「何ぞ必ずしも静平を尊ばん、何ぞ必ずしも狂乱を厭はん」という言葉は、きわめて有効なもの」であり「狂乱を内に抱えながら、しかし日常を生きねばならぬ者たち、特に女性の鬱屈する思いが、その後の一葉文学を貫通するものになった」¹⁹⁹と正しく指摘しているが、ここでは本章の主旨に直接かかわる部分として、テキスト後半で展開されている以下の主張に眼を転じてみたい。「今少しく問題を転じ目を挙げて現時に於ける日本国の地位を考へ、而して更にわが理想を察せよ、（…）維新の革命は未だ以て此の国民の大革命にはあらず、大革命は現時此の境界に起らざるべからず、大革命は秩序より来るものにはあらず、今は大いに狂し大いに狂ふべきの時なり、万想混沌として入り乱れ爰に新想の起り、生命の発し来り此の国民をして此の国民たらしむべきの時なり、変調の時なり」²⁰⁰。

これまで見てきた三つの言説と同様、ここでも、明治維新は国民本位でない未完の革命であるという歴史認識が開陳されつつ、国民ひとりひとりの「生命」の発現としての「狂」の精神による、真の革命の到来が待望されているのである。

「満腔蒼莽の霸心」²⁰¹にかられ、「富者強者の寡人の政治」の下での貧者の「筆となり、彼等の舌となり、絶叫絶喚、上は九天に翹へ下は九地に訴へて、彼等が為めに其鬱塞を開かしむるもの文学者に非ずして將た誰ぞや」²⁰²と訴えた嶺雲。「精神的義侠の靈骨」²⁰³と評されていた天知。「己れ

の一身を苦しめ万民の為に大に計る所あらんと熱心に企て²⁰⁴」て倦まなかった透谷。「狂乱とは即ち精気生命の大に動くに外ならず²⁰⁵」「人間の真価は此の生命の活動にあり²⁰⁶」と述べ、一葉の文学的名声の上昇を我が事以上に「狂せるやうに喜²⁰⁷」んだという秋骨。

今日から見れば、「心は高处に寄せてゐる人々が、明治時代には多かつた。それが明治の人物の一の型を成してゐた²⁰⁸。」という森銃三の明治時代評（白河鯉洋による嶺雲『数奇伝』序文をめぐって述べられたもの）を立証しているような彼らは、精神的に見ると、明治二〇年代における思想潮流としてのキリスト教精神と啓蒙思想と浪漫主義に立脚して、日清戦争前後の社会に噴出していった「不権衡」や、立身出世主義の敷衍による功利性の跋扈や、「忠君愛国²⁰⁹」主義への急傾斜による精神的自由の「壓抑」にたいして激しく慷慨している点で一致していた。かれらは例外なく、かかる状況を招いた明治維新と、その後編成された天皇制官僚国家の「壓制」に鋭く批判的であり、自由民権運動が果たすことのできなかった「天下の蒼生²¹⁰」、すなわち人民による第二の維新の契機を激しく求めていた。そのさいに抛りどころとされた概念が、卑俗な功利主義とは対蹠的な、精神の自由の発露としての「狂」や、「他愛」の発現としての「侠」であり、「幕末には尊王攘夷論となつて発動した²¹¹」ような人民による人民のためのナショナリズム「国民の元氣²¹²」であつたのである。

五. 同時代言説との通脈と断絶——『十三夜』の虚無

笹淵友一氏は、『文學界』研究の先駆書『『文學界』とその時代』のなかで、以上の内容を激切に論じたかれらを評して、「近代的人間性の自覚²¹³」と「浪漫主義の憧憬的精神²¹⁴」をあわせもち、「世俗と対立すべき理想の確立²¹⁵」が見られると指摘した。他方、『文學界』の文学史的評価に大きく貢献し、その同人たちとも親密な交流をむすんでいた一葉には、そうした面は看取できない、と述べた。「一葉の苦悩、絶望は封建遺制の拘束をより多く受けてゐた女性の社会的地位に根ざしてをり」、「『文學界』同人の近代的人間性の自覚と結びついた苦悩、絶望とはかなり距離があり、単なる社会的或は生活的のものに近く、従つてもし生活的環境が変化すれば或いは簡単に解消するかもしれな²¹⁶」にすぎない。そのように氏は概括している。

なるほど、樋口一葉は、貧困、借金、苛酷な労働、病苦、薄遇、性差別、人間関係の破綻といった、市井におけるきわめて具体的な——笹淵氏の表現でいえば「単なる社会的或は生活的」な——負の出来事を物語ることに終始した作家である。それらはみな一葉じしんが直面していたまぎれもない現実だったからであり、そのように卑近な出来事しか題材に採らなかつたという意味においては、「世俗と対立すべき理想の確立が見られない²¹⁷」という氏の指摘は正しい。

だが、樋口一葉は、小説を書くことが高等教育をうけた知識層男性とかれらの推挽を得た数人の上流層女性に限定され、小説が基本的には彼・彼女らの周辺世界を模写したものとなつた明治二〇年代に、きわめて異例な立場から特異なエクリチュールを実践した作家であつたことはまちがいない。本人みずからが、吉原裏の細民町あるいは新開の銘酒屋街における無一物の暮らしに転落することによつて、最底辺の場所からしか見渡すことのできない明治近代の全体像を、転じて明治維新そのものの意義をきわめて批判的になかたちで発見し、それを表現したからである。

自身のいわば通俗的な不幸を凝視することを通じて巨視的な視点を獲得した、同時代としては稀有な作家だったのであり、本論文各章でみてきたように、「奇蹟の期間」の傑作はいずれも、市井の

卑近な負の出来事を微視的に物語るなかに、天皇制官僚国家Ⅱ近代日本の国家システムを鋭く問いなおす巨視的な視点をかならず含んでいる。

そのような、微視的省察を通して得られた巨視的洞察、いかえれば、困難にみちた個人史を通して得られた歴史認識は、先の『文學界』『青年文』知識層青年たちの、「近代的人間性の自覚」にもとづいた維新とその政権批判にじゅうぶん比肩しうる内実をそなえている。嶺雲、天知、透谷、秋骨がそろって掲げた明治近代の問題点、すなわち、社会の不公平性（「不権衡」）の拡大、卑俗な功利（「金と権」²¹⁸）主義の跳梁、国民規範（「秩序と繩墨」²¹⁹）の強化による「壓抑」性の蔓延、およびそれらを惹起した維新政権の「壓制」性などは、みてきたように、すべて一葉のテキストに伏在する重要なテーマでもあったではないか。「奇蹟の期間」のテキスト全体を貫徹するその揺るぎないテーマ性は、笹淵氏の述べるような「生活環境が変化すれば」「簡単に解消する」ような薄弱なものではないはずだ。

また、笹淵氏は、一葉のテキストに登場する人物たちは、「世俗に対する反抗の声が直ちに絶望の声につながって「…」せいぜい世のすね者になってしまふ」²²⁰」だけだとも指摘した。たしかに、「利口の君、才子の君、万々歳の世」にテロルを試みる『暗夜』の蘭や、明治上流社会を代表する貴顕紳士に呪詛の言葉を投げつける『われから』の町をのぞけば、一葉の物語世界の男女は、明治近代における敗者としてのルサンチマンや絶望を「厭やだ」「面白くない」「詰らないづくめ」といった感性的な言葉で表白するだけで、後はただ社会階層を転落する薄運に身をまかせただけである。

だが、天皇制的正統性の正嫡子である立身出世を叶えるために、だれもが功利的にふるまうことが当然の時代に、そしてそれが国家によって大いに言祝がれる時代に、たとえば『にぎりえ』のお力や源七、あるいは次に瞥見する『十三夜』の高坂録之助のような、他者への思いからみずからの身を滅ぼしてゆく人物、すなわち非功利性という〈狂愚〉を生きる「非合理的主体」をきわめて印象的に物語ったこと自体が、「功利主義排撃の熱弁」²²¹と評される『文學界』の言説と通脈していると言えるのではないか。

同時に、そのような〈狂愚〉による破滅の物語を共感的に語るこそが、国是としての立身出世主義にたいする文学的反骨であり、天皇制的正統性にたいする巧まざる抵抗だったのであるまいか。いずれにせよそれは、一葉が愛読した「変調論」が主張する「時代」「超絶性」であり、「秩序と繩墨」の打破であるにちがいない。

しかしながら、その一方で、主人公たちの「厭やだ」という叫びにともなわれる絶対的な虚無感は、「日本人民の「精神の自由を求めて」往かんと欲する希望」²²²」に期待し、その「蒼生」たちによる第二の革命を待望し、「国民の元氣」の発動を呼びかけてやまなかつた、透谷をはじめとする『文學界』言説が発散する熱情とは、あきらかな差異を示しているのである。

その虚無感は、阿閔の「嫁入りの噂」を機に放蕩のかぎりを尽くして車夫に身を落とした『十三夜』の高坂録之助をめぐる場面にもっとも色濃く漂っているだろう。父の説得によって、自分を冷罵してばかりいる奉任官の夫の元にふたたび戻ろうとしていた阿閔との、有名な邂逅場面である。

男は流れる汗を手拭にぬぐふて、お恥かしい身に落まして今は家と言ふ物も御座りませぬ、寝処は浅草町の安宿、村田といふが二階に転つて、氣に向ひた時は今夜のやうに遅くまで挽く事もありまするし、厭やと思へば日がな一日「ころく」として烟のやうに暮して居まする「…」遊ん

で遊んで遊び抜いて、呑んで呑んで呑み尽して、家も稼業もそつち除けに箸一本もためやうに成つたは一昨々年、「……」

男はうす淋しき顔に笑みを浮べて「……」車を挽くと言ふも名ばかり、何が楽しみに轆轤をにぎつて、何が望みに牛馬の真似をする、銭を貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭やで、お客様を乗せやうが空車の時だらうが嫌やとなると用捨なく嫌やに成りまする「……」

何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひし阿闍に向つてさのみは嬉しき様子も見えざりき。

この奇遇の場面で、語り手は、録之助をほぼ一貫して「男」という普通名詞で叙述する。不特定者を表徴する普通名詞「男」こそ、視点人物である阿闍に「知らぬ他人の車夫」と見誤れるほど落魄したその姿にもっとも似つかわしい呼称であるにちがいない。ひるがえって言えば、「男」という普通名詞のもつ不特定者性、非固有性、無名性の響きは、十三夜の「さやけき月」の明光に照らし出された「二十五六の色黒く、小男の痩せぎす」の、個性ある精神ではなく、その即物的な〈身体〉をこのうえなく際立たせる効果を發揮してもいる。

「世にある頃の唐棧ぞろひに小氣の利いた前だれがけ」姿のわずかな片鱗すらうかがうことの出来なくなつた「色も黒く見られぬ男」の、その「浅ましい身の有様」。たつた五〇銭にみたない日銭²²³をかせぐだけの道具となり果てた、その〈身体〉の哀しいありさまを、皓然とした名月の澄明な光のなかに浮きあがらせる語りの流れからは、「入用のない命と捨て物に取あつかふて居ました」という録之助じしんの表白どおり、みずからの人格の物象化さえも甘んじて受け入れるほど自分自身を見捨てた「男」の、深い虚無と寂寥が立ちのぼってくるのである。

〈身体〉をめぐる表現から生じるこの寂寥感と虚無感は、北村透谷の「精神の自由」をめぐる議論において述べられた「虚無思想」とは、おのずから対照的である。前掲「徳川氏時代の平民的理想」のばあいの「虚無」は、封建時代にも匹敵する明治二〇年代現在の抑圧状況をあらわす語にほかならなかつた。それは克服されなければならない〈精神〉であり、言い方をかえれば、より良き未来を志向する透谷の〈精神〉をものがたる言葉であつた。その意味では、ツルゲーネフ『父と子』の翻訳である二葉亭四迷『虚無党形氣』（一八八六〔明治一九〕年ころ執筆、未刊）や、宮崎夢柳『虚無党実伝記 鬼啾啾』（一八八四〔明治一七〕年）に描かれた、革命的民主主義思想としてのニヒリズムを念頭においていたかもしれない透谷の「虚無」は、したがって政治的文脈における理性的な言葉である。

一方、くだんの『十三夜』のばあいの虚無は、端的にいえば、人間という存在をめぐる、あるいは世界の存在意味をめぐる、樋口一葉という作家の文学的回答であつた。

ある日とつぜん「魔でもさしたか、祟りでもあるか、よもや只事では無い」ほどの放蕩に〈狂〉い、無一物の漂泊者になつた録之助の「何も彼も悉皆厭や」という虚無²²⁴的な叫びは、一切の現世的な価値に意味を見いだせなくなり、自己存在それ自体も「烟のやうに」空ろな無としてしか認識できなくなる、いわば究極の逸脱としての、生からの脱落をおこなうことすらある人間という存在の、非理性的な側面を物語っている。『十三夜』は、家長制度下の女性の悲劇を織り交ぜた——たとえば新派悲劇の演目としての——悲恋小説の枠には収まり得ない、人間という存在の根源性に触れた危機きわまりないテクストなのである。

天皇制的正統性観念にすみずみまで包摂された近代日本にあつて、樋口一葉は、そのような、逸脱

的で「破滅」的なかたちでしか生きることのできない人物ばかりを造形した。創作動機について記した「おのれも知らぬ心のそこに、怪しうひそむ物ありて心細き感²²⁵は常有し²²⁶」(第五章一節参照)という日記の一文は、「心のそこに、怪しうひそむ物」に突き動かされるようにして、虚無という非理性の極点、死の領域にさしかかるほどの極限的な逸脱の様相まで覚え知れず描いてしまった自分自身にたいする、一種の怖ろしさの表白として読むことが可能であろう。

終章で詳述するが、見方を変えれば、この日記文は、文学テキストというものが作家の非理性の産物にほかならず、したがってその本質にかならず非理性的なもの——あらゆる支配的イデオロギーからの逸脱——を含んでいることを一葉が直感していたことをしめす文でもある。

その樋口一葉の非理性によって創作された、近代日本の正統性観念からの逸脱という物語こそは、近代日本、否、現代日本をもいまだに拘束する群生秩序につらぬかれたムラ社会国家にたいする、鮮烈な批判ともなりえているのである。

なお、『文學界』同人たちとは正反対に、樋口一葉の世界観においては、現世における負の出来事が償われる「他界²²⁶」も存在しなければ、「他愛」としての「俠」の共同体幻想も存在しなかった。「俠」が発揮されるとすれば、『にこりえ』の場合のように、あくまで個人によってである。「天地の誠ハ虚無のほかにあるへからず」『塵之中日記』一八九四(明治二七)年三月一四日。世俗的な女性規範を叶えることもなく、貧困と死の予感に囚われながら、祈り²²⁷や幻想も持ちえずに、ただ書くことのみを通して、人と人の世のありようについて思索したのが樋口一葉なのである。たしかに同時代において特異な作家であった。

樋口一葉の文学は、逸脱と狂愚の文学である。一葉のテキストをそのようなものとして捉え得た論攷が、田中優子氏の『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』であろう。氏は次のように結論している。

厭やだ、という叫びが放蕩となり、布団屋の源七も、たばこ屋の録之助も、山村の石之助も、身を滅ぼしてゆく。滅びながら、自分を作っている。滅びながら、自分を見つめている。落ちながら、生きている。一葉の書く女主人公たちはそのようなあり方にこそ、心を重ね合わせることでできた。一葉自身が、落ちながら生きているからである²²⁸。

みてきたように、樋口一葉のテキストは、忠君愛国思想と立身出世主義が分かちがたく融合した近代日本の正統性のもとより、啓蒙思想と進化論に象徴される西欧近代の理性主義とも、超越的な他界観念とも異質であった。したがってその文学は、立身出世主義を女性向けに仕立て直した閨秀小説群、職業への精進というかたちで立身出世主義を受容した幸田露伴の芸道もの、進化論に全面的に依拠した『小説神髓』とその人情世態・写実主義を戯作風にアレンジした硯友社小説群、理想主義を情熱的にかかげる『文學界』言説群が居並ぶ同時代文学史において、独自の位置を占めているのである。

¹ 安藤、前掲書、一七一頁。

² 同書、一七二頁。その他、澁澤栄一に関して、同書、一六五—一七七頁、参照。

³ 永谷、前掲書、二一四頁。

⁴ 同書、九六頁。

5 同右。

6 「奸商」をめぐる記述はすべて、同書「第一部 第三章 上流階級イメージの変容 奸商イメージの時代―明治二〇年代前半」、とりわけ九六頁、参照。

7 同書、九七頁。

8 同書「第一部 第三章 上流階級イメージの変容 奸商イメージの時代―明治二〇年代前半」、とりわけ九八頁、参照。

9 同右。

10 同書、一〇四頁。〈奸商〉イメージの変化について、同書「第一部 第三章 上流階級イメージの変容 富豪イメージの生成―明治二〇年代半ばから明治三〇年代」を参照。

11 同右。

12 関、菅、校注、前掲書、六三頁、注一三。

13 澁澤、前掲書、五八五―五九三頁。

14 横山、前掲書『明治富豪史』、一八頁。

15 同書、一九頁。

16 安藤、前掲書、九九頁。

17 同書、九八頁。

18 『われから』物語内時間を執筆、初出時である一八九五、六〔明治二八、九〕年ごろとする
と、町は現在二六歳、数え歳として考えると、町は明治四年ごろの生まれ。町が「高笑いするこ
ろ」から一カ月後に美尾は失踪、それから与四郎は大蔵省を退職して蕎麦搔売りを始めたことか
ら、その蕎麦搔売りは一八七一〔明治四〕、一八七二〔明治五〕年ごろから着手された計算になる。
なお、一葉自身が島田政子から「悲話」を聞いたのは一八九二〔明治二五〕年四月二三日『につ
記』同日付）であるが、それを物語内時間だとすると町は一八六八〔明治元〕年生まれとなり、そ
れ以前の与四郎と美尾の上野の花見場面は維新以前だったことになってしまう。その場面に登場す
る「華族」は一八六九〔明治二〕年からの名称である。

また、後藤、前掲書は、与四郎が梅見に出かけた土曜午後が官庁の休みに指定されたのが一八七六
〔明治九〕年であったこと等を考証、美尾出奔を一八七七〔明治一〇〕年以降とするが、町追放の
結末をテキスト執筆時、あるいはそれ以前とすると、梅見が慶応年間になることなどの矛盾を指摘
する（二七八―二九〇頁）。

19 安藤、前掲書、一〇四頁。

20 同右。および寺谷武明「目 産業財閥―浅野・川崎・古河―」、安岡重明編『日本経営史講座
第3巻 日本の財閥』（日本経済新聞社、一九七六年）所収、七六―七七頁。

21 同書（安岡）。

22 前田、前掲「露伴における立身出世主義」『近代日本の文学空間―歴史・ことば・状況』、一三
七頁。

23 永谷、前掲書、二一五頁。

24 同右。

25 同右。

26 鈴木啓子「第二部 項目篇 砲兵工廠」前掲『樋口一葉事典』、三一八頁。

27 鈴木（博之）、前掲書、一七五―一七九頁。

28 同書、一七七頁。

29 ただし、同書によれば、大崎辰五郎が初めて貸家を手がけたのは一八八五〔明治一八〕年のこ
とであり（二七六頁）、与四郎が「一念発起」した時期とはズレがあることになる。

30 横山、前掲書『明治富豪史』、五一―六頁。

31 安藤、前掲書、一〇六頁。

32 同書、四四―四五頁。

33 大巻の別の鼻痕客「兜町の米様」を想起させる人物名は見当たらないが、横山、前掲書『明治
富豪史』は当時の兜町の隆盛をつぎのように伝える。「御用商人などより、最つと泡沫金を儲けてゐ
る者が居る。株屋ぢや！〔…〕支那戦争の時は、「東株」は八百円まで漕ぎ上げたから、今度も八

百円位まで漕ぎ上げるぢやらう。「…」栗生武右衛門、村上三三郎や鈴木圭三などいふ一騎当千の連中は、手具脛引いて、一六勝負を遣つてゐるぢやらう。福島浪造、神田鐳藏、森戸鈿太郎（…）鈴木久五郎、福澤桃助。」（四頁）

³⁴ 安丸、前掲書『近代天皇像の形成』、二八〇頁。

³⁵ 丸木橋のイメージを分析した、愛知峰子「にこりえ」に渡る〈丸木橋〉、前掲『論集樋口一葉』所収は、「千載集」の〈丸木橋〉の歌などを踏まえ、「伝統的な〈危うさ〉、失敗の恐れのある

恋、浮世、辛い人生」といったイメージが、〈丸木橋〉、〈踏みかえす〉、〈落ちる〉などといった語が配されることによって、念入りに醸し出されている」（八三―八四頁）と指摘する。

³⁶ 同論文、七七頁。

³⁷ 同右。

³⁸ 同論文、七八頁。

³⁹ 同論文、七九頁（愛知峰子氏の提示する解釈）。

⁴⁰ 野口碩「第三部 資料篇 キイワード事典 丸木橋」、前掲『樋口一葉事典』、三九三頁。

⁴¹ 以下の「丸木橋」を渡る行為をめぐる解釈は、関、管、校注、前掲書、『にこりえ』補注二五、五二―八頁を併せて参照。

⁴² 前田、前掲書『樋口一葉の世界』、二一九頁。

⁴³ 加藤周一『日本文学史序説 下』（ちくま学芸文庫、一九九九年）五三三頁。

⁴⁴ 同右。

⁴⁵ 吉田松陰「狂愚」（松陰詩稿 西征残稿）一八五七（安政四）年、山口県教育会編纂『吉田松陰全集 第六卷』（大和書房、一九七三年）所収、一八五―六頁。

⁴⁶ 訓読も、同右。なお、前田愛「松陰における「狂愚」下田踏海まで」『前田愛著作集第一巻 幕末維新期の文学 成島柳北』（筑摩書房、一九八九年）所収、一八四頁でも、同詩文と同右の訓読をめぐる分析がされている。

⁴⁷ 同書（前田）、二四一頁。

⁴⁸ 同右。

⁴⁹ 前田愛「幕末・維新期の文体 5 吉田松陰『講孟余話』——無私の文体——」、前掲『近代日本文学空間』二七〇頁。

⁵⁰ 同書、二七三頁。

⁵¹ 同右。

⁵² 同書、二七〇頁。

⁵³ 同書、二六九頁。

⁵⁴ 同書、二六八頁。

⁵⁵ 同右。

⁵⁶ 同書、二七〇頁。

⁵⁷ 同右。

⁵⁸ 同書、二六九頁。

⁵⁹ 同右。なお前田愛氏は、徳富蘇峰『吉田松陰』（二八九三（明治二六）年）を挙げ、これを「明治二十年代の国粹主義」という「維新再評価の機運」の中で捉えると同時に、明治二十年ごろより蘇峰に抱かれてきた「第二の革命」の発想の現れとしても捉え、そうした蘇峰の発想と「明治維新を未完の革命として把握した透谷の発想」との通脈性を指摘している（「近世から近代へ——愛山・透谷の文学史をめぐる——」前掲『前田愛著作集第一巻』所収、一一―一二頁）。同時代、松陰の名は維新の歴史的评价をめぐる記号として浮上していたのである。

⁶⁰ 前田、加藤両氏の前掲論攷のほか、松陰の思想にかんして、藤田省三「書目撰定理由——松陰の精神的意味に関する一考察——」、吉田常吉・藤田省三・西田太一郎校注『日本思想体系³⁴

吉田松陰』（岩波書店、一九七八年）所収、および、橋川文三「忠誠意識の変容」『橋川文三著作集2』（筑摩書房、一九八五年）所収、参照。

⁶¹ 吉田松陰『李氏焚書抄』、京都大学附属図書館所蔵、尊攘堂史料、京都大学附属図書館維新資料データベース (http://edb.kuhf.kyoto-u.ac.jp/exhibit/isihin/kanren/sonjo_index_hunsho.html) 二〇一一

年三月、閲覽)、参照。

⁶² 増井経夫『世界の歴史 第一巻 中華帝国』(講談社、一九七七年)、二五二頁。

⁶³ 以上、李卓吾に関して、同書、二四七―二四八、二五二―二五三頁。併せて「六 明代社会の過熱と思想展開 明代社会の嫡子李卓吾」全体、参照。

⁶⁴ 同書、二五三―二五四頁。

⁶⁵ 溝口雄三「孤単」の知己——松陰における李卓吾』『日本思想体系 月報61』岩波書店、一九七八年十一月、所収、二―三頁。

⁶⁶ 劉岸偉『明代の文人 李卓吾』(中公新書、一九九四年)一九二―一九五頁。

⁶⁷ 溝口、前掲論文、二頁。

⁶⁸ 同論文、三頁。

⁶⁹ 同右。

⁷⁰ 中丸宣明作成「一葉読書目録」、前掲『樋口一葉事典』(第三部 資料編)所収、四七八―四七九頁。

⁷¹ 「雑記7 やたらつけ」、前掲『樋口一葉全集 第三卷(下)』六五六頁、補注一。

⁷² 同書、六五六―六五七頁。

⁷³ 明治初年期には、そのリテラシーの昏さゆえに「童蒙」と表象され、総ルビ小新聞の稟告などをもって教化啓蒙されるべき対象であった婦女たちは、この頃にはようやくリテラシーの低性を克服しつつあり、読解可能な書物の幅も広がっていたのだが、そのことが却って読書をめぐる厳格な性コードを用意した経緯は、平田由美氏の前掲『女性表現の明治史』第2章 三「小説の時代」の女の読み物」に詳しい。

試みに、同時代の開明的女性の読書傾向の一例を探してみると、「ちとせ」女史は「平生愛読せる書物」として、原田助訳『泰西俊傑』、徳富猪一郎・岩本善治序、竹越竹代著『婦人立志編』、若松しづる著『小公子』、三島通良著『母のつとめ』、内村鑑三著『求安録』、岩本善治著『吾党の女子教育』、小崎弘道著『政教新論』、竹越与三郎(三又)著『新日本史』を挙げている(『女子の読むべき書物』『婦人新報』第二号、一八九五(明治二八)年三月二八日、一八頁)。熊本バンドや横浜バンドに属した著者による質実謹厳な書が網羅されているのは、キリスト教婦人矯風会系雑誌ならはだが、やはりここでも同時代の女性規範通り、西洋翻訳物、婦人立志物、女訓書というジャンルで愛読リストが構成されている。むしろ読書をめぐるこうした女性規範はあくまで建前であって、若しくは高水準のリテラシーを獲得しえた開明的女性のみ適用できる規範であって、いまだ(童蒙婦女)の域を脱しきれない女性たちは、明治二〇年代まで刊行されていた戯作本を依然として手にしていたかもしれないが、この『通俗忠義水滸伝』は、彼女らが好んだ草双紙でも人情本でもなく、『小説神髓』が批判の標的とした馬琴の『八犬伝』『侠客伝』に多大な影響を及ぼした中国民衆伝奇である。その意味において、この『通俗忠義水滸伝』は、強化の一途をたどっていた儒教的女徳に背馳する書であると同時に、西欧進歩史観にもとづく読書規範を破る書でもあるだろう。

⁷⁴ 因みに、一葉の『水滸伝』受容と鷗外のそれとは鋭い対照をなしている。『水滸伝』はじめ鷗外における白話小説受容問題については、前田愛「鷗外の中国小説趣味」『近代読者の成立』(岩波現代文庫、二〇〇一年)に詳細である。その一部を掲げる。「技術者としての確実な将来を保証されるままに、この時代のめまぐるしい動きに積極的に切り込もうとはせず、ある距離を置いて対している独特な精神の姿勢「…」このような精神にとつて、白話小説の豊かな現実把握、辛らつな社会批判、壮大な構想力——われわれが本格小説の資格と認めるところのもの——は共感しにくく、文人の逸興になった雅文小説の「美しい夢」の世界こそふさわしかった」とのではあるまいか。(一一三頁)

⁷⁵ 高島俊男『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』(大修館書店、一九九一年)「第二部 第一章 明治の『水滸伝』概況」二二―二二三頁。

⁷⁶ 増井、前掲書、二五二頁。

⁷⁷ 李卓吾は「知識人が軽蔑する恋愛小説や通俗文学にも真実のあることを認め、『西廂記』『三国志演義』『水滸伝』などの評釈本を書き(同右)いたという。

⁷⁸ 高島、前掲書や中村幸彦「解題」中村幸彦編『近世白話小説翻訳集』(汲古書院、一九八七年)

六一四―六一六頁に述べられているように、『通俗忠義水滸伝』の訳者が岡島冠山であることが未詳であるのと同様、批点者も李卓吾であるかは、実際は不明。だが劉、前掲書では『水滸伝』を「発憤の作」と評する李卓吾の「読忠義水滸伝序」が『通俗忠義水滸伝』に付されていると述べられている（一六八―一六九頁）。

⁷⁹ 「世の中を見渡せば、みな利を嗜み、義を嗜む者がいない〔…〕義を嗜めば、死を視ることなお生の如く〔…〕利を嗜めば、生といえども、なお死の如きである〔…〕いま、世のなかの朋友と称する者みな生きていながら死んだのと同然である。それはほかでもなく、利を嗜む人々であつて、朋友を嗜む人ではないからだ。」（『焚書』巻五、朋友篇、同書（劉）、四四頁）

⁸⁰ 松陰と中斎大塩平八郎に通底する「郷原への憎悪」について、前田愛「山陽と中斎 危機の予覚者たち」、前掲『前田愛著作集第一巻』所収、四三―四四頁、参照。

⁸¹ お力の祖父の生年と没年を確定できるテキスト表現は存在しない。物語内容時間を初出時・一八九五〔明治二八〕年と仮定すると、お力の父は「生きていてもまだ五十」（数え年か）とあるので、一八四五〔弘化二〕年前後の生まれ。お力の年齢を二〇歳前後（一八七五〔明治八〕年前後生まれ）と仮定すると、お力は父の三〇歳前後の時の子である。祖父が父をもうけたのも同年齢と仮定すれば、祖父は一八一五〔文化一二〕年前後の生まれ。「六十にあまるまで」生きたわけだから、没年は一八七五〔明治八〕年となる。お力は祖父の生前をめぐる直接的記憶を持っていないので、広く取って、祖父は、一八〇五〔文化二〕年頃から一八一五〔文化一二〕年前後の生まれ、没年は一八六五〔慶応元〕年頃から一八七五〔明治八〕年頃となるだろうか。

⁸² 乞胸に関して、以下の書を参照した。高柳金芳『乞胸と江戸の大道芸』（柏書房、一九八一年）、石井良助『近世賤民に関する若干の考察』『近世関東の被差別部落』（明石書店、一九七七年）所収、中尾健二『江戸社会と弾左衛門』（解放出版社、一九九二年）、兵藤裕己『（声）の国民国家・日本』（日本放送出版協会、二〇〇〇年）

⁸³ 同書（兵藤）、一一五頁。

⁸⁴ 丸山、前掲書、一九頁。なお、前田愛、前掲論文「松陰における「狂愚」にも、同書に示された松陰評価の一部が紹介されている（一八七頁、注二）。

⁸⁵ 同書、四九頁。「日本の近代史を通じて抵抗権の觀念が比較的広い範囲で定着した時代といえ、この明治一〇年代を凌駕する時代はついに来なかった」（同頁）

⁸⁶ 同書、六〇―六一頁。

⁸⁷ 前田愛「明治歴史文学の原像」、前掲『近代日本の文学空間―歴史・ことば・状況』、九頁。

⁸⁸ 丸山、前掲書、一〇五頁。

⁸⁹ 緒方、前掲論文（醜業婦に付きての所感）、二四―二五頁。

⁹⁰ 小島烏水「一葉女史」『文庫』一八九六〔明治二九〕年一月、『小島烏水全集 第十二卷』（大修館書店、一九八七年）所収、七六頁。

⁹¹ 露伴・緑雨・學海・鷗外・篁村・紅葉・思軒「雲中語 にごりえ」『めさまし草 卷之十五』一八九七〔明治三〇〕年三月三十一日、「概論家」の発言（二頁）。

⁹² 吉田松陰「將及私言」一八五三〔嘉永六〕年、山口県教育会編纂『吉田松陰全集 第二巻』（大和書房、一九七三年）所収、一二頁。

⁹³ 山中浩之「第三章 第4節 変革期の思想 吉田松陰」、古田光／子安宣邦編『日本思想史読本』（東洋経済新報社、一九七九年）一六五頁。なお、橋川文三、前掲「忠誠意識の変容」『橋川文三著作集2』に「將及私言」同引用文に関する精緻な分析がある（七七頁）。

⁹⁴ 丸山眞男氏は前掲書において、松陰を「没我的」忠誠と主体的自律性、絶対的帰依の感情と強烈な実践性との逆説的な結合」（二〇頁）と評している。

⁹⁵ 橋川文三「近代日本の忠誠の問題」前掲書（『橋川文三著作集2』）所収、全体を参照。

⁹⁶ 山中、前掲論文、一六六頁。

⁹⁷ 同右。

⁹⁸ 芝原拓自『日本の歴史 第三三巻 開国』（小学館、一九七五年）一二六頁。

⁹⁹ 山中、前掲論文、一六六頁。

¹⁰⁰ 成田、前掲論文（新聞を読む樋口一葉）、八八頁。併せて、拙論文第二章脚注でも記した通

り、国民化を指標する（戦争）に対して無関心という一葉伝説に関しては、菅、前掲書『女が国家を裏切るとき―女学生、一葉、吉屋信子』一四七―一四八頁、参照。

101 安丸、前掲書『近代天皇像の形成』、二七二頁。

102 田中（彰）、前掲書、五二頁。

103 同書、一八六頁。

104 前田愛「明治立身出世主義の系譜」、前掲『近代読者の成立』所収、一一七頁。

105 田中（彰）、前掲書、三〇四頁。

106 永井（秀夫）、前掲書、三四八頁。

107 「市制町制」をふくむ近代日本の自治制度の制定と中央集権化をめぐる政治思想的分析について、橋川文三「明治政治思想史の一断面」『橋川文三著作集3』（筑摩書房、一九八五年）所収、全体を参照。

108 山住正己『教育勅語』（朝日選書¹⁵⁴、朝日新聞社、一九八〇年）八六頁（勅語全文、一二九―一三一頁）。

109 前田愛、前掲「正統と伝統——近代日本文学形成の条件」『前田愛著作集第四卷』所収、四三二頁。

110 同論文、四三四頁。

111 同論文、四三五頁。

112 同右。

113 丸山、前掲書、六〇頁。

114 「天皇の権威を擁して専制的に民衆の開明化を強行した政府の側では、権力と教育のあらゆる手段をつくして、日本人を近代国家機能に適応しうる「国民」に育成しようとした。その結果として、史上稀に見るほどの従順な「日本臣民」が形成されたことはよく知られるとおりである。」（橋川、前掲「忠誠意識の変容」『橋川文三著作集2』所収、九八頁）

115 『青年文』第二巻第三号に掲載された、無署名『にこりえ』の筆者を、筑摩書房版『樋口一葉全集 第三巻（上）』補注は「筆者おそらく佐々醒雪」とし、この無署名『鰻旦那』と『にこり江』を「同じ筆者による」（四五七頁）と述べている。同記事は『田岡嶺雲全集 第一巻』（法政大学出版会、一九六九年）『同 第二巻』（法政大学出版会、一九八七年）にも所収されていない。

116 九鬼周造『いき』の構造 他二編（底本『いき』の構造』岩波書店、一九三〇年）（岩波文庫、一九七九年）二二―二四頁。

117 同右。

118 同右。

119 坪内逍遙『小説神髓 上巻』『小説の主眼』、『明治文学全集 16 坪内逍遙集』（筑摩書房、一九六九年）所収、一六頁。

120 同書、一七頁。

121 坪内逍遙『小説神髓 下巻』『主人公の設置』、同書、所収、五七頁。

122 田岡嶺雲「写実と理想」『青年文』第二巻五号、一八九五（明治二九）年二月一〇日、初出、のち『嶺雲揺曳』（新聲社、一八九九（明治三二）年三月）に収録。同引用は、田岡嶺雲 西田

勝解説『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』（底本、同右）（日本図書センター、一九九二年）三九頁。

123 前田愛『小説神髓』のリアリズムとは何か」前掲『近代日本の文学空間―歴史・ことば・状況』所収、二九五、三〇〇頁。

124 前田、前掲「明治歴史文学の原像」同書、所収、九頁。

125 同右。

126 坪内逍遙『小説神髓 上巻』『小説の変遷』、前掲『明治文学全集 16 坪内逍遙集』所収、一五頁。なお同部分は、同右にも引用されている。

127 「熙は〔…〕帝国大学を卒業後は直に助教に挙げられ、老免せられるまで凡三十年漢文の講座を担当してゐたのであるが、深く時勢に感ずる所があつたと見えて、平素学生に向つては、今の世の中に漢文学のごとき死文字を学ぶ程愚な事はない」（永井荷風『つゆのあとさき』一九三二

『昭和六』年一月一日、中央公論社、初出、『荷風全集 第一六卷』(岩波書店、一九九四年)所収、一三二頁)

¹²⁸ 田岡嶺雲「多感の詩人故中野逍遙」『日本人』一一、一二号、一八九五(明治二九)年二月五、二〇日、初出、のち『第二嶺雲揺曳』(新聲社、一八九九年一月)に所収。同引用は、田岡、西田解説、前掲『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』、一五九頁。

¹²⁹ 同右。

¹³⁰ 中野逍遙の漢詩「狂殘銷魂録」などを掲げながら、嶺雲は中野逍遙の「悲しんで殆んど狂せる」(同書、一六二頁)性情に共鳴している。

¹³¹ 同書、一五九頁。なお、前田愛氏も「中野逍遙」、前掲『近代日本の文学空間』所収のなかで、嶺雲を「多情多感」(一一一頁)と評している。

¹³² 坪内逍遙「新作家某の親戚より所謂批評家連中に与へて「詩人小説家特待法」を請求する書」『太陽』第三卷第一号、一八九七(明治三〇)年一月五日。鈎括弧内は、西田勝「解題 詩人の狂熱」、田岡嶺雲 西田勝編、前掲『田岡嶺雲全集 第二卷』所収、七九五頁より引用。

¹³³ 同右(坪内逍遙「新作家某の親戚より所謂批評家連中に与へて「詩人小説家特待法」を請求する書」『太陽』第三卷第一号、一八九七(明治三〇)年一月五日)。

¹³⁴ 田岡嶺雲「詩人の狂熱」『文庫』第五卷第五号附録「青年文」一八九七(明治三〇)年五月二〇日、初出、前掲『田岡嶺雲全集 第二卷』所収、三八八頁。なお、同評論と類似した内容のものとして、「詩人と厭世観」『日本人』二号、一八九五(明治二八)年七月二〇日、初出(前掲『第二嶺雲揺曳』所収)、「神来と狂熱」『青年文』第二卷五号、一八九五(明治二八)年二月一〇日、初出(前掲『嶺雲揺曳』所収)、「天才と狂熱」『青年文』第二卷三号、一八九五(明治二八)年一〇月一〇日、初出(同書、所収)などがある。

¹³⁵ 田岡嶺雲「社会問題」『文庫』第九卷六号、一八九八(明治三一)年三月二〇日、初出、のち前掲『嶺雲揺曳』に所収。同引用は、前掲『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』六三頁。また嶺雲は「新春の第一喝」『日本人』第三四号、一八九七(明治三〇)年一月五日、初出、のち前掲『嶺雲揺曳』所収においても、「第二革命の機は既に熟す」(同書『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』、

一七頁)と主張している。

¹³⁶ 西田勝「田岡嶺雲」、前掲『日本近代文学大事典 机上版』所収、八二二頁。

¹³⁷ 丸山、前掲書における嶺雲評(一〇二頁)。

¹³⁸ 同右。

¹³⁹ 田岡嶺雲「ヒューマニチー」『青年文』第二卷六号、一八九六(明治二九)年一月一〇日、初出、のち前掲『嶺雲揺曳』に所収。同引用は、前掲『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』五一頁。

¹⁴⁰ 田岡、前掲「新春の第一喝」『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』、一六頁。

¹⁴¹ 田岡嶺雲「人才の閉塞」『日本人』第二六号、一八九六(明治二九)年九月五日、初出、のち同書『嶺雲揺曳』に所収。同引用は、同書『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』一頁。嶺雲はこの『嶺雲揺曳』において、しばしば「満腔不平」「満腔不満」と書き付けている。

¹⁴² 田岡嶺雲「京を去るの辞」『日本人』第三三号、一八九六(明治二九)年六月五日、初出、のち同書『嶺雲揺曳』に所収。引用は、同書『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』一〇四頁。

¹⁴³ 嶺雲『明治叛臣論』については、丸山、前掲書における節「抵抗の精神と謀叛の哲学」に精緻な分析がある。ここで丸山は嶺雲を徳富蘆花、山路愛山、三宅雪嶺とともに、「天皇制的な「集中」に各々の仕方でも抵抗したいわば最後の旗手であった」(二〇二頁)と評している。

¹⁴⁴ 坪内逍遙「歴史小説の尊厳」『読売新聞』一八九五(明治二八)年一〇月二八日、のち『文学その折々』(春陽堂、一八九六(明治二九)年)所収。同引用は前掲『明治文学全集 16 坪内逍遙集』二八五頁。

¹⁴⁵ 同右。

¹⁴⁶ 同右。

¹⁴⁷ 同右。

¹⁴⁸ 同書、二八六頁。

¹⁴⁹ 同右。なお同部分は、前田、前掲「明治歴史文学の原像」『近代日本の文学空間—歴史—こと

ば・状況」九頁にも引用、言及されている。

150 森銑三「田岡嶺雲の本領」『新編明治人物夜話』（岩波文庫、二〇〇一年）所収は、嶺雲を「革新的な思想の持ち主」（二八六頁）であると同時に、「国体の変革」（一八八頁）は是認しない「憂国の至情」（二八九頁）の持ち主と指摘する。

151 中村（光夫）、前掲書、「第二章 第四節 評論の時代」（節タイトル）、一一三頁。

152 大井田義彰『『文學界』の中の一葉―「大つごもり」と「俠」』、前掲『論集樋口一葉』所収、四〇頁。「二一葉と「俠」」「三 「大つごもり」」全体を参照。

153 同論文、三七頁。

154 増田五良「『文學界』創刊までの事」『文學界記傳』（国書刊行会、一九七四年）一〇―一一頁。

155 山路愛山や星野天知の侠客論が撥鬢小説の流行を背景とした立論であることは、前田愛「馬琴と透谷―「俠」をめぐる―」、前掲『前田愛著作集第四卷』所収、三五四頁、参照。

156 星野天知「侠客伝」、『明治文學全集』32 女學雑誌・文學界』（筑摩書房、一九七三年）所収、一四〇頁。

157 同書、一三九頁。

158 同右。

159 同書、一三八頁。

160 同書、一三九頁。

161 同書、一三八頁。

162 同右。

163 同右。

164 「天知君の侠客論精緻を極めたれば（…）我が分に甘んじて文学的に徳川氏時代に平民流の理想となりし俠と粹とが如何なる者なるべきやを観察する。」（北村透谷「徳川氏時代の平民的理想」、

前掲『明治文學全集』29 北村透谷』所収、八八頁）

165 同書、八九頁。

166 同書、九二頁。

167 同右。

168 同右。

169 同右。

170 この前掲「馬琴と透谷―「俠」をめぐる―」『前田愛著作集第四卷』所収では、「徳川氏時代の平民的理想」が「天知・愛山の侠客伝からの衝撃」（三三三頁）によつて執筆されたものであると同時に、

悪政に耐えかねた「犬土と俠者が関東周辺を舞台に展開するさまざまな武力闘争の類型」として読解可能な点で、「自由民権運動時代の民衆反乱を先取りした文学的形象」（同書、三五七―八頁）とも把持し得る『八犬伝』や『侠客伝』などの馬琴の「義」「俠」（同書、三五五頁）の文学に多大な啓示を得て執筆されたものであることが精緻に分析されており、示唆を受けた。

171 同論文、三五〇頁。同「維新」か「御一新」か―明治維新と近代文学―、前掲『前田愛著作集第四卷』所収、二三頁、同、前掲「明治歴史文学の原像」『近代日本の文学空間―歴史・ことば・状況』二九頁。

172 同右（「馬琴と透谷―「俠」をめぐる―」三五〇頁）。同右（「明治歴史文学の原像」二一九頁）。

173 ここで透谷は、撥鬢小説流行の行く末を語りながら、嶺雲同様、没理想をかかげる逍遙を皮肉

つてみせている。「俠勇を謳ふの時代未だ過ぎ去らざるか、抑も他の理想未だ混沌たる創造前にあり

て、未だ何の形をも成さざるの故か、借問す没却理想の論陣を布きながら理想詩人ドラマチストに

先ちて出でんと預言し玉ひし逍遙子は如何なる理想の生如来をや待つらむ。」（北村透谷、前掲「徳

川氏時代の平民的理想」『明治文學全集』29 北村透谷』所収、八九頁）

174 同書、八六―八七頁。

175 同書、八七頁。

176 同書、九一頁。

177 同右。

- 178 同右。
- 179 同右。
- 180 同書、九三頁。
- 181 同書、八七頁。
- 182 前田、前掲論「「維新」か「御一新」か―明治維新と近代文学―」『前田愛著作集第四卷』所収
- 183 は、「国三郎の生き方に未完の革命としての明治維新の可能性を望見していた」（二四頁）と指摘する。透谷と秋山国三郎については、同、前掲「透谷と〈侠〉」三五頁でも言及されている。
- 184 北村透谷「三日幻境」、前掲『文學全集』29 北村透谷』一八四頁。
- 185 同右。
- 186 同書、一八五頁。
- 187 色川大吉『色川大吉著作集1 新編 明治精神史』9 伝統型の文人思想―秋山国三郎―（筑摩書房、一九九五年）二六五頁。
- 188 同書、二六五頁。
- 189 同書、二六四―二六五頁。
- 190 北村、前掲「三日幻境」『明治文學全集』29 北村透谷』一八五頁。
- 191 同右。
- 192 同書、一八七頁。
- 193 石坂ミナ宛て書簡草稿、一八八七〔明治二〇〕年八月一日、同書、二九〇頁。
- 194 一八九四〔明治二七〕年、星野天知あて島崎藤村の書簡。藪楨子「第二部 項目篇 島崎藤村」『樋口一葉事典』二〇八頁、および筑摩書房版、前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』補注、四七八頁より引用。
- 195 戸川秋骨「変調論」、前掲『明治文學全集』32 女學雑誌・文學界』所収、二六七頁。
- 196 同書、二七〇頁。
- 197 同右。
- 198 笹淵友一「解題」、前掲『明治文學全集』32 女學雑誌・文學界』所収、四二八頁。
- 199 藪楨子「一葉と『文學界』」、樋口一葉研究会編、前掲『論集樋口一葉』、一六七―八頁。
- 200 戸川、前掲「変調論」『明治文學全集』32 女學雑誌・文學界』所収、二六九頁。
- 201 田岡嶺雲「盛代の賜歎」『新聲』一編一号、一八九九〔明治三二〕年二月二五日、初出、のち前掲『嶺雲揺曳』、所収、引用は、前掲『近代文藝評論叢書』30 嶺雲揺曳』所収、一一三頁。
- 202 田岡、前掲「ヒューマニチー」『前掲『近代文藝評論叢書』30 嶺雲揺曳』所収、五一頁。
- 203 北村、前掲「徳川氏時代の平民的理想」に記されている天知評（八八頁）。
- 204 前掲、北村透谷の石坂ミナ宛て書簡草稿、前掲『明治文學全集』29 北村透谷』所収、二九〇頁。
- 205 戸川、前掲「変調論」『明治文學全集』32 女學雑誌・文學界』所収、二六八頁。
- 206 同右。
- 207 『ミつの上日記』一八九六〔明治二九〕年五月二日、前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収。
- 208 森銑三『明治人物夜話』（東京美術、一九六九年）12 わが読書の記 白河鯉洋』一三六頁。
- 209 「旧組織の遺物たる忠君愛国などの岐路に迷ふ学者、請ふ刮目して百年の後を見ん。」（北村透谷『文學史骨』第二回 精神の自由 明治文學管見之二、前掲『明治文學全集』29 北村透谷』所収、一二七頁）
- 210 同「第三回 変遷の時代 明治文學管見之三」、同書、所収、一二八頁。
- 211 前田、前掲「近世から近代へ―愛山・透谷の文学史をめぐって―」『前田愛著作集第一卷』所収、一一頁。および同、前掲「「維新」か「御一新」か―明治維新と近代文学―」『前田愛著作集第四卷』所収、一二三頁。
- 212 北村、前掲『文學史骨』第四回 政治上の変遷 明治文學管見之四』『明治文學全集』29 北

村透谷』所収、一三〇頁。この「国民の元氣」をめぐる言説分析に関しては、同右、参照。

²¹³ 笹淵、前掲論文、前掲『明治文學全集 32』所収、四一六頁。

²¹⁴ 同右。

²¹⁵ 同論文、同書、所収、四一七頁。

²¹⁶ 同右。

²¹⁷ 同右。

²¹⁸ 星野、前掲「侠客論」、同書、所収、一四〇頁。

²¹⁹ 戸川、前掲「変調論」、同書、所収、二六七、二六八頁。

²²⁰ 笹淵、前掲論文、同書、所収、四一七頁。

²²¹ 石丸久「文學界」運動の性格(抄)、同書、所収、四〇三頁。

²²² 北村、前掲『文學史骨』第二回 精神の自由 明治文學管見之二『明治文學全集 29 北村透谷』所収、二二七頁。

²²³ 横山、前掲書『日本の下層社会』、四三頁。因みに、二月と十月は、人力車夫中もとても多い人数を占めていた「もうろう」の収入が低い時期であったという(同頁)。

²²⁴ 菅、前掲書『女が国家を裏切るとき』も、「何も彼も悉皆厭や」という録之助を「すべての関係性を放棄し、絶対的かつ徹底的な孤絶化を自ら導き、虚無のなかを漂っている」(二四五頁)と指摘する。

²²⁵ 『みづの上日記』一八九六(明治二九)年六月二日、前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収。

²²⁶ 北村透谷「他界に関する観念」『国民之友』第一六九、一七〇号、一八九二(明治二五)年一〇月一三、一三日、初出、前掲『明治文學全集 29 北村透谷』所収。

²²⁷ 樋口一葉の周辺には、萩の舎同門のうちで最も親しく交流していた田辺夏子や、『文學界』同人たちなど、キリスト教を深く信仰していた人物たちが存在し、一葉自身『新約聖書』を読んでもいる(中丸、前掲「一葉読書目録」『樋口一葉事典』四七七―八頁)。田辺夏子と信仰について長々と語り合ったり(「につ記」一八九三(明治二六)年五月二九日)、彼女に依頼されて賛美歌の翻訳に協力するなど(「よもきふにつ記」同年三月二九日)、キリスト教に浅からぬ関心があったことがわかる。一葉が馴染めなかった観念は、現世でのルサンチマンが逆転する「他界」観念であり、その意味で仏教における輪廻転生説も否定される。「天地とこしなへにありといへども一度此土をさりし物二度現世にあらはるゝ事をきかず(…)他界に対する観念といふものそもく此土に何の功あらんや哲といひ仏といふもと此土の人の為なるのみ善偽方便何ぞことくく探る事を用ひんや」(感想、聞書8断簡)

²²⁸ 田中(優子)、前掲書『樋口一葉「いやだー」と云ふ』、一三三頁。

終章 近代日本からの逸脱

——予言するテキスト『たけくらべ』と永井荷風『里の今昔』

一．はじめに

多くの文学テキストにあてはまる事柄ではあるが、とりわけ樋口一葉のテキストは、時代を表象する文化記号に満ちあふれている。のみならず、その文化記号のひとつひとつは、きわめて重要な意味内容をもっている。一葉のテキストの場合、臍化された物語言説、あるいは空白箇所が随所に散りばめられているために、それらが解釈にあたっての大切な手がかりとなるからである。したがって、樋口一葉のテキストを論じようとすれば、テキスト内時間である明治二〇年代を徹視的に観察する必然性が生じるのはむろんのこと、明治二〇年代を幕末維新期から近代日本の歴史全体のなかに位置づけて、巨視的に俯瞰する必要性もおのずから生じてくる。樋口一葉の文学は、テキストと、明治二〇年代をふくむ近代日本の時空間のあいだを絶えず往還することを、強く要請するのである。

明治二〇年代をふくむ近代日本の時空間は、各章でみてきたように、明確な方向性があった。上昇であり、進歩である。そして樋口一葉のテキストは、明治二〇年代をふくめた近代日本のこの鮮明なベクトルと、正反対の方向を示していた。各章では、下降と破滅、あるいは逸脱と転落の様相をえがいた各テキストが、それぞれ、いかに明治二〇年代において、また幕末維新期において、特異であったかを分析してきた。

そこで本論文を締め括るにあたって、樋口一葉の文名を近代日本文学史の頂のひとつに押し上げたテキスト『たけくらべ』（初出『文學界』一八九五〔明治二八〕年一月―一八九六〔二九〕年一月、一括再掲『文芸倶楽部』一八九六〔明治二九〕年）にも内在する下降性について指摘したい。といっても、それは各章で試みられたような、テキストと同時代ないし幕末維新期文脈との異相を発見するための作業なのではない。むしろその逆に、以下では、〈時間小説〉としてのテキスト『たけくらべ』における、ひたすら下降に向かって進行してゆく語りが、奇しくも近代日本の歴史の流れと一致している点を指摘しようとする。テキストと、同時代ないし過去との差異ではなく、未来との暗合を指摘しようとするのである。

結論から述べれば、『たけくらべ』は、その〈テキストの無意識〉が、上昇とはうらはらに暗い昭和へと下降してゆく近代日本の行く末を予言した作品である。そして、そのようなテキストの超時代的なありようこそ、「坂の上」への登頂の成功を信じてやまなかつた近代日本の出発点において、きわめて特異であったはずだ。

二．挽歌『里の今昔』

『たけくらべ』初出から三九年後の近代日本。時代が出口のみえない暗晦な階段を下りはじめた一九三四〔昭和九〕年一二月、『たけくらべ』がはらむ下降の気配を敏感に察知し、それを優美な散文にあらわした文学者がひとりいた。「落魄趣味」²「廃滅趣味」³の散人、永井荷風である。もともと荷

風は、閨秀の粹をとりはらった文壇全体における偉大な先達のひとりとして一葉を敬愛していたのだ。一九一七「大正六」年から一九五九「昭和三四」年の死の直前まで書き継がれた『断腸亭日乗』の内容からも、それをうかがい知ることができる。

たとえば、『日乗』起筆から間もない一九一七「大正六」年大晦日には、「余この頃かつて愛読せし和洋書巻の批評をものせむとの心あり。〔…〕今余の再読して批評せむと思へるもの⁴」として、『柳橋新誌』『即興詩人』などとともに『一葉全集』を挙げている。また、一九二三「大正一二」年の五月三日には、五月雨のふる閑雅な午後、「一葉全集の中『たけくらべ』『濁江』の二篇を読む⁵」。一九二五「大正一四」年一月一日には、以前、自筆原稿を送りつけてきた「海老茶の袴はきたる婦人⁶」の突然の来訪をしりぞけて、つぎのように記す。「かの草藁といひ書簡といひいづれも西洋昏にペンを走り書きにしたるもの。また書簡は殆ど文体をなさざるものなれば、面会したりとて、かくの如き婦人とは文学の事を談るべきよしもなし。今の世の婦人にして、もし文学に志す所あらんとせば、まづ一葉女史の著述を誦じて、然後人を訪うてその意見を叩くべきなり。日常の手紙をも書くこと能はずして、小説を作らむとするは、無謀の至といふべし⁷」。これを読むかぎり、荷風は一葉の婦女子向け『通俗書簡文』（二八九六「明治二九」年、博文館刊）すらも読了していたのではないか。なお私見によれば、葎町の半玉になる少女と、幼馴染の少年との淡い恋と別れを描いた『すみだ川』（一九〇九「明治四二」年）には、『たけくらべ』の影響が濃厚に認められる。

その荷風が、一九三四「昭和九」年にあらわした詩的散文が、問題の『里の今昔』である⁸。もっとも近世的な記号のひとつ「里」吉原の無残な変貌を惜しみ、「たけくらべ」が文藝倶楽部第二巻第四号に「〔…〕掲載せられた⁹」頃の「浄瑠璃を聴くに異らぬ一種の哀調が漲る¹⁰」。北里のたたずまいを、みずからの記憶を丹念にたどりながら精細に書き留めたこの佳作は、余り知られておらず、言及されることも少ない。だが、『たけくらべ』評の面はもとより、時代からの逃走小説である傑作『濯東綺譚』（一九三六「昭和一一」年脱稿、『東京大阪朝日新聞』一九三七「昭和一二」年四月―六月）の生成プロセスにも少なからず関与していると思われる点において、この小品は看過しがたいテキストであると思われるのである。

ところで、川本三郎氏は『荷風と東京』のなかで、『濯東綺譚』の舞台となった場末の陋巷玉の井は、一九三六「昭和一一」年からの荷風の「隠れ里探しの最後にあらわれた¹¹」場所であったと指摘している。「昭和十一年、人生の秋に、そして、時代が急速に戦争に向かって緊張していくなかで〔…〕なによりも、瞬時とはいえ自分の行方をくまますことのできる隠れ場所を求めていた¹²」荷風は、「非日常の夢を見る場所として、時代の表面には決してあらわれてこない陋巷、狭斜の巷を求めて¹³」亀戸の私娼街や東京北端の未知の裏町にまで杖を曳いたのち、最後に、昭和七年にぐうぜん見知った玉の井に行き着いた、というのである¹⁴。

すると『里の今昔』は、荷風散人が、玉の井という東京に存在する脂粉の巷のひとつをはじめて発見した昭和七年と、「隠れた桃源郷、ユートピア¹⁵」として玉の井を再発見する一九三六「昭和一一」年の、ちょうど中間に書かれたテキストということになる。

端整な美文のなかに政治的年号を巧みに配した『濯東綺譚』『作後贅言』によれば、荷風は一九三〇、「一」昭和五、六」年から、つまり「満州の野に風雲の起つた¹⁶」満州事変、「血盟団¹⁷」事件、「霞ヶ関の義挙¹⁸」五・一五事件が連続した時点から、夜ごと銀座で神代箒葉と回顧談義に耽るとともに、つとに偏愛していた遊歩趣味にいつそう没入するようになっていく。とりわけ「葛西村の海

辺」の「人跡の絶えた枯蘆の岸¹⁹」といった寂寞とした風景に惹かれ、荒川放水路などに好んで足を向けており、昭和七年の玉の井発見も「堀切四ツ木の放水路堤防を歩みし帰り道」(『日乗』一九三二(昭和七)年一月二日)のことであった。

この東京周縁への散策が、時代からの逃走としての性格をいっそう明確にするのが、時局がさらに緊迫するなかでの、一九三六(昭和一一)年の「隠れ里探し」であったわけである。

私見では、一九三二、二(昭和六、七)年にはじまる(時代からの消極的な逃走)が、一九三六(昭和一一)年における(時代からの積極的な「亡命」)としての「隠れ里探し」に接続される前に、荷風のなかで一度、本来の意味における「里」に対する弔いが行なわれなければならなかった。それが「里」吉原にたいする、いわば挽歌としてのテキスト『里の今昔』の執筆だったのではないか。

ありし日の北里の情景をせめて紙上において美しく蘇らせてやることで、荷風散人はかつての「旧習と其情趣²¹」を完全にうしない、「特徴なき陋巷²²」(『里の今昔』)と化した吉原を、哀悼をこめて葬つたのである。その儀式を経なければ、玉の井という東京に残された最後の「非日常の夢を見る場所」(前出『荷風と東京』)を舞台とした『溼東綺譚』は書かれなかったはずだ。ユートピア小説『溼東綺譚』は、近世以来の「別天地²³」(『里の今昔』)北廓の無残な廃滅がなければ、あるいは成立しえなかったテキストなのである。その証拠に、『溼東綺譚』の玉の井は、あきらかに、今は亡き北里北廓に見立てられており²⁴、「いつも島田か丸髻にしか結つてゐない²⁵」娼婦お雪もまた、「三四十年むかしに消え去つた²⁶」吉原娼妓の美しい亡霊として造形されている。吉原の(死)を前提としなければ成立しない表現手法である²⁷。

三二 軍靴と吉原

荷風はなぜ、かくまでも吉原の(死)を語らなければならなかったか。その廃滅を哀惜したのか。「吉原の遊里は今年昭和甲戌の秋、公娼廃止の令²⁸の出づるを待たず、既に数年前、早く滅亡してゐたやうなものである²⁹。」という『里の今昔』冒頭の一文を手がかりに考えてみたい。

荷風は、『溼東綺譚』作後贅言の時空間を象徴する風景として、一九三一(昭和六)年の一二月、「白木屋」の店窓に「黄色の荒原の処々に火の手の上つてゐる背景を飾り、毛衣で包んだ兵士の人形を幾個となく立て並べてあつた³⁰」光景を挙げている。時代は、同年九月、満州事変を惹起させた軍部、とりわけ陸軍の近代史上かつてない台頭時代に急転化していた。この軍部台頭という時局を、活況というかたちで直截的に反映させていたのが、公娼地帯であった。

藤目ゆき氏が『性の歴史学』のなかでくりかえし指摘しているように、検閲制度に基礎づけられる近代公娼制は、軍隊への性供与を主眼として築かれている³¹。したがって、「日清・日露戦争」から「満州」における勢力拡大³²にいたる軍拡の過程は、「公娼制度から見れば、軍隊の売買春に関する需要が拡大し、内地と植民地に遊廓が激増³³」する過程にほかならなかった。同書には、とりわけ一九三〇年代から「軍隊売春が拡大³⁴」したとあるが、ことに満州事変以降³⁵、日本各地の公娼地帯がどのような状況を呈したかは想像に難くない。なかでも「東京は日本最大の兵士の人口を有する都市³⁶」であり、『警視庁統計書』によれば、じっさい一九二八(昭和三)年から一九三二(昭和八)年のあいだに遊廓に登楼する客数は急増している³⁷。稀少な資料である一九四二(昭和一七)年新宿遊廓「遊客人名簿」からその職業分析をおこなった折井美耶子氏も、「非常に限られた資料でしかも

戦時中という特殊な時代であり、結論は出しにくいだが、やはり兵士が多い³⁸。」と述べている。

こうした軍人兵士による廓の席捲という事態は、当時、都内に九ヶ所あった公許遊廓のうち随一の娼妓数を抱えた吉原³⁹にこそ、顕著であったにちがいない。一九三二〔昭和七〕年から一九三七〔二一〕年にかけて、他の遊廓の娼妓数は、八王子をのぞいてわずかながら減少しているのに対して、吉原では増加を示していることから、そのことが推測されるのである⁴⁰。

一方、荷風は、満州国建国宣言がなされた直後にあたる、一九三二〔昭和七〕年四月九日の『日乗』に、つぎのように書きつけた。「世の風説をきくに日本の陸軍は満州より進んで蒙古までをわが物となし露西亜を威圧する計畧なりと云ふ。武力を張りて其極度に達したる暁独逸帝国の覆轍を踏まざれば幸なるべし。百戦百勝は善の善なる者に非らず、戦わずして人の兵を屈するは善の善なる者とは孫子の金言なり⁴¹。」

川本三郎氏は「荷風は、軍隊、軍人が大嫌いで、それが日中戦争の後に強まってい⁴²」くと指摘しているが、警保局による検閲を用心した婉曲な言葉遣いのうちに、軍部への嫌悪と皮肉をこめた荷風にとって、遊里吉原の軍用化こそ、許しがたい暴挙にほかならなかったはずだ。かつて維新という歴史の転換期に、辰巳の粹を引き継ぐ柳橋が、新興する無風流な藩閥権力者たちに侵食されてゆくさまを悲傷とともに記したのは、無用の漢詩人成島柳北であった。その柳北を敬仰してやまなかった荷風にとって、あらゆる近世文芸の想像力の源泉であった、かの北廓吉原が、満州事変という近現代史の転換点以降、無粋きわまりない野卑な軍人兵士たちによって席捲、否、蹂躪され、様式も情趣もない、単なる「軍隊買春」地帯に変容してゆくさまは、忍びがたいものであったにちがいない。

むろん、維新以降、新橋をはじめとした花街の殷賑によって、吉原は相対的に衰退していたという事実もあるにはあった。だが、荷風散人のなかでは、とりわけ満州事変の勃発とともに、吉原は、最終的にその息の根を止められて「滅亡」したのである。「吉原の遊里は今年昭和甲戌の秋、公娼廃止の令の出づるを待たず、既に数年前、早く滅亡してゐたやうなものである」（前出）と書きつけられた所以である。

ここで留意しなければならない点がある。「吉原は、最終的にその息の根を止められて」云々と記しておいたように、文化記号としての遊里吉原が、突然にはなく、しだいにその文化的様式をうしない衰微していったことを、『里の今昔』の語りがくりかえし強調している点だ。『溼東綺譚』同様、周到に年号を配した、次の叙述を見てみたい。

明治時代の吉原と其附近の町との情景は、一葉女史の「たけくらべ」、広津柳浪の「今戸心中」、泉鏡花の「註文帳」の如き小説に、滅び行く最後の面影を残した⁴³。

『たけくらべ』や『今戸心中』のつくられた頃、「……」吉原の遊里もまたどうやらかうやら従来の風習と格式とを持続して行く事ができたのである⁴⁴。

明治四十一年の秋、重ねて来り見るに及んで、転た前度の劉郎たる思ひをなさねばならなかつた⁴⁵。

明治四十三年八月の水害と、翌年四月の大火とは遊里と其周囲の町の光景とを変じて、次第に今日の如き特徴なき陋巷に化せしむる階梯をつくつた⁴⁶。

明治三十年代の吉原には江戸浄瑠璃に見るが如き叙事詩的の一面が猶実在してゐた⁴⁷。

わたくしは三十年前の東京には江戸時代の生活の音調と同じきものが残つてゐた。そして、そ

の最後の余韻が吉原の遊里において殊に著しく聴取せられた事をこゝに語ればよいのである⁴⁸。

ここで荷風は、吉原が「今日の如き特徴なき陋巷」へと衰退していった過程を語りながら、みずからが愛惜してやまないその遊里吉原の姿が、『たけくらべ』ないし『今戸心中』『註文帳』にかろうじて留められていることを、幸いとして受けとめている。だが、これを言いかえれば、『たけくらべ』のなかにも、すでに、吉原の衰微、下降の気配は含まれているということだ。『たけくらべ』において、『江戸浄瑠璃に見るが如き叙事詩的「情趣は、その「一面」だけしか「實在」していない。『たけくらべ』が内包する、北里ならではの「哀調」は、あくまで「最後の余韻」、残響であって、その本来の調はずでに失われているのである。

『たけくらべ』の執筆時期は、一八九四〔明治二七〕年末ごろから、一年後の一八九五〔明治二八〕年末ごろまでと考証されている⁴⁹。テキスト生成を促したとされる吉原遊廓外での生活体験は、一八九三〔明治二六〕年七月から、九カ月後の一八九四〔明治二七〕年四月まで。先の藤目氏の、日清戦争にはじまる軍拡の過程は遊廓における軍隊買春の拡大の過程である、という指摘を踏まえると、樋口一葉がその様子をじっさいに見聞きすることができた、一八九三〔明治二六〕年七月から翌年四月までの吉原は、一八九四〔明治二七〕年八月一日に宣戦布告された日清戦争とその大勝利の直接的な影響下にはない。つまり、軍人兵士の横行はそれほど目立っていない。まさしく荷風の叙述したように、このときの吉原は「どうやらかうやら伝来の風習と格式とを持續して行く事ができた」のである。

だが、一八九四〔明治二七〕年六月の東学党の乱への出兵と大本營の設置、それ以前の壬午軍乱、甲申事变を考えると、樋口一葉がじっさいに眺めた吉原が、日清戦争開戦前夜の廓であったことも、また、事実なのである⁵⁰。執筆期間の前半が、そのまま日清戦争時にあたること、考慮の外に置くことはできない。つまり『たけくらべ』の吉原は、近世的な姿を「どうやらかうやら」留めるうちに、変容と衰滅の兆しを確実に孕ませていた。まさに荷風が述べたように、『たけくらべ』は吉原の「滅び行く最後の面影を残した」テキストであったわけである。

そしてその後の「明治四十一年の秋」には、日清戦後の帝国主義への転化、義和団鎮圧への出兵、日露戦争の勃発、西園寺内閣における軍備拡充、植民地経営への着手といった近代日本の軍拡のプロセス⁵¹と符節を合わせるように、吉原は完全に残照につつまれていた、と荷風は回想しているのである。

四. 『たけくらべ』の「哀調」

その荷風散人が、「江戸浄瑠璃に見るが如き叙事詩的の一面」を「捉え来つて描写の功を成した⁵²」と絶賛しているのが、『たけくらべ』の次の場面である。

春は桜の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶ事此通りのみにて七十五輛とかぞへしも、この替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃にみだるれば横堀に鶉なく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣り香懷炉灰に座をゆづり、石橋の田村屋が粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を伝へるや

うになれば、四季絶間なき日暮里の火の光も彼れが人をやく烟りかとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町芸者が冴たる腕に、君が情の仮寝の床にと何ならぬ一ふし哀れも深く、此時節より通ひ初るは浮かれ浮かるゝ遊客ならで、身にしみくゝと実のあるお方のよし、遊女あがりの去る女が申き

荷風は、この一節を「浄瑠璃を聴くに異ならぬ一種の哀調が漲つてい^{5.3}」る、と贊嘆した^{5.4}。「哀調」とはむろん、つぎの表現を字句通りに受けとめたものであろう。「石橋の田村屋が粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を伝へるやうになれば」「仲之町芸者が冴たる腕に、君が情の仮寝の床に何ならぬ一ふし哀れも深く」。だが同時に、おそらく荷風散人は——そして本章も——その「哀調」を、この一節のみならずテクスト全体の通奏音として聴きとっている。なぜなら、この一節をふくむテクスト全体に漲る「哀調」の本態は、テクストそれ自体が内包する下降性、暗い方向に向かつてゆく気配から生じる悲哀にほかならないからだ^{5.5}。

この一節では、季節の推移が語られている。だが、むろんそれは、厳冬のあとの春の訪れをよろこぶ語りではない。その逆に、陽春から盛夏、晩夏をへて、冬の気配をふくんだ秋冷にいたる語りである。しかも、その秋冷は、陽春から初秋までにあいついで開催される吉原三大行事——遊里吉原がもつとも艶やかな華やぎをみせる四月の仲之町の夜桜（春は桜の賑ひ）、眩惑的な美しさの揺曳する盃蘭盆の「玉菊が燈籠」、約一ヶ月にもわたって盛大に繰り広げられる九月の「新仁和賀」がすべて終了したところに到来する季節であるだけに、いっそう深い「哀れ」を誘う。

右のように、この一節は、季節の移り変わりと、吉原の時間の推移、さらにはいえば、吉原という巨大な遊廓それ自体が象徴する実体的な人の〈生〉の時間の進行とを、巧みに混交させながら語られている。以下のごとくである。

廓周囲に広がる鄙びた風景をめぐる語り「赤蜻蛉田圃にみだるれば横堀に鶉なく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて」を通して秋の深まりを告げる語り手は、併せて廓者たちの営みの変化を語ることで、陰影ある季節への移り変わりを印象的に提示する。「上清が店の蚊遣り香懐炉灰に座をゆづり、石橋の田村屋が粉挽く臼の音さびしく」。

これに接続されるのは、「角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を伝へるやうになれば」、すなわち吉原という廓空間における時間の進行をめぐる語りである。それは『今戸心中』（明治二十九年）にも描かれているように——「少時前報ッたのは、角海老の大大時計の十二時である。京町には素見客の影も跡を絶ち、角町には夜を警めの鉄棒の音も聞える。里の市が流して行く笛の音が長く尾を引いて、張店にも稍雑談の途切れる時分となッた^{5.6}」——、遊興空間としてのハレの時間を終えて、寂寥とした時間へ移行したことを告げる廓内の「時計の響き」が、秋の深まりとともにいっそう「哀れの音」を帯びるさまを伝える。季節と、吉原の時間、そのふたつがいわば手に手をとって未明な方向に進行してゆくのである。このあとに続く語りが、「四季絶間なき日暮里の火の光も彼れが人をやく烟りかとうら悲しく」である。

時間の進行の終着点がここで示されている。暗い方向に進行してきた時間はここで行き止まりに遭遇する。ここに来て、この一節に潜在する〈死〉への下降性があらわになるからである。それまで、吉原遊廓という、いかに高度に洗練された遊戯様式によって膿化させようとも濃密な性の空間にほかならない悪場所、すなわち人々のなまなましい〈生〉の迸る場所をめぐる語り手が、

ここで日暮里火葬場という、索漠とした〈死〉の処分場をめぐる語りへと静かに移行する。都市人口の膨張にしたがって一八八九〔明治二二〕年に新設された近代的赤煉瓦造りのそこは、当時東京に存在した七ヶ所の火葬場のうち最大の稼働施設だったのであり、その高々とした煙筒⁵⁷の上空には、「四季絶え間なく」「人をやく烟」がうす暗く棚引いていた。

思い起こしたいのは、この一節（十）が執筆された⁵⁸。わずか五か月前から一年前が、成歓、牙山、平壤、旅順などの激戦で知られる日清戦争の渦中にあたる事実である。田山花袋は、前掲『東京の三十年』「出発の軍隊 日清戦争」のなかで、このときの東京という都市空間——号外の鈴の音が響き渡り、極彩色の戦争絵草紙が至るところに掲げられ、勇猛にして哀切な軍歌を唱和する声が流れる——に、出発の軍隊を満載した機関車の「黒い白い烟⁵⁹。」と、砲兵工廠の「青い、黒い、白い煤烟⁶⁰。」が、凄愴な気配を伴いながら漂っていたさまを綴っている。これらに、花袋をはじめ人々の想像の裡にあった戦場の「砲烟」——「さびしいひろい野に死屍になつて横つてゐる同胞⁶¹」の背後で「白く炸裂する⁶²」「砲烟⁶³」——を加えると、「日暮里」の「うら悲し」い「烟」の背後には、戦傷死のアレゴリーとしての「烟」が幾筋も立ち昇っていたと考えられよう。なお、同火葬場はこのあと、日露戦争時にあたる一九〇四〔明治三七〕年にさらに拡張されて町屋に移転している⁶⁴。

陽春から冬枯の季節に向かって進行してゆく語り。遊興空間としての華やかな宵から、廓としての意味機能をうしなう未明に向かって進行してゆく語り。並走する二つの時間をめぐる語りは、こうして〈死〉、しかも戦傷死を濃厚に想起させる〈死〉をめぐる語りと共に至るのである。四季および時間の推移が強調されるこの一節において、唯一不変なのは、「四季絶え間なき日暮里の」「人をやく烟」すなわち〈死〉であり、季節と時間、そしてそこに存在する「人」をめぐる語りはすべて、この「うら悲し」い〈死〉をめぐる語りに収斂する。すべてが無明の方向に下降してゆく、この蕭条とした語りの構造にこそ、荷風は悲哀としての「哀調」を聴き取ったのであろう。

これに続く語り、「茶屋が裏ゆく土手下の細道に落ちるやうな三味の音を仰いで聞けば仲之町芸者が冴たる腕に、君が情の仮寝の床にと何ならぬ一ふし哀れも深く」も、その語りの構造の内にある。歌沢節——荷風も愛し『深川の唄』（一九〇八〔明治四一〕年）の主題に選んだ、それ自体が衰退の途を辿っていた端唄の一派——の名唄、この「香に迷ふ」は、本格的な春の到来を待ち焦がれる心と、恋の成就をねがう真率な心とを掛けた恋唄として、後続する語り「此時節より通ひ初るは浮かれ浮かるゝ遊客ならで、身にしみかくと実のあるお方のよし」と照応する。その意味では、縁起の良い色唄であるわけだが、歌詞は次の通りである。

「香に迷ふ、梅が軒端にほひ鳥花に逢瀬を待つ年の、明けてうれしき懸想文、聞く初音のはづかしく、まだとけかねる薄氷、雪に思ひのふか草の、百夜も通ふ恋の闇、君が情けの仮寝の床の、枕かたしく夜もすがら⁶⁵。」

詞全体の統合関係をいったん解体し、言葉の意味内容だけを見れば、「軒端」＝見世の「梅」の色「香」を求めて、「初音」をもらしながら、こなたの谷からこなたの谷へ渡ってゆく「にほひ鳥」鶯が遊客であるならば、遊女の側からすれば、「ふか草」の少将のように最後の一夜を残して「百夜」通いに挫折する悲恋どころか、遊客の無情な心移りという時間の推移による〈暗転〉を、この色唄も暗示していないとはいえないのだ。荷風が絶賛した一節における語りは、こうしてすべて〈暗転〉に向かっているのである。

『たけくらべ』のプロットも同様である。「お職を徹す姉が身の、憂ひの愁らいの数も知」らずに、

「子供中間の女王様」として子供の時間を「活々」と「活潑」に過していた美登利も、八月二〇日の千束神社の夏祭りが終わり、十一月の鷲神社の西の市を境に、近代公娼制度下の吉原の「憂き事さまざま」な陰惨な現実に関われてゆく。「ゑゝ嫌やく、大人に成るは嫌やな事、何故此やうに年をば重る、もう七月十月、一年も以前へ戻りたいにと老人じみた考へをして」というこの日の美登利の悲痛な内言は、正太の「怪しきふるへ声」で歌われる「十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ」「今では勤めが身にしてみても」という厄介節の、卑俗であるが故にいつそう悲惨な内容と響き合い⁶⁶、不可逆的な時間の進行の残酷さを、「子供の時間」を完全に終えた後の美登利の人生の暗転を、生々しく伝える。「大巻さんよりも奇麗だと皆がいつも美登利のその暗転は、「今日此頃の全盛」を誇る姉の大巻が「お職」の座から転落し、その人生をさらに暗転させることを意味してもいるだろう。

五・近代日本の破局の原風景

以上のように、『たけくらべ』は、ストーリーの重要背景を成している季節が、盛夏から「さびしく」「哀れ」な晩秋へと推移し下降してゆくのに呼応して、物語内容、物語言説ともに暗転し下降を蕭寥と辿ってゆくテキストなのである。物語空間である吉原も、物語内時間である日清戦争前夜を境として、日本内外に点在していた単なる「軍隊買春」地帯の一角へと衰微し下降してゆく。テキストにおいて唯一不変の存在は、「四季絶え間なき日暮里の」「人をやく烟」、すなわち戦死を含む無数の人々の死にほかならない。そのような〈夥しい死〉だけが確定的に刻印されたテキストにおける、いま述べてきたようなメタレベルにわたる下降性は、日清戦争に端緒を開いた軍拡国家としての近代日本が、一九四五〔昭和二〇〕年の壊滅的な破局にむかって下降してゆくさまを、巧まらずして先取りしていると言い得る。

この『たけくらべ』のはらむ予言性は、軍事を国策の中心に据え、そのための統制経済の導入を主張した、陸軍省新聞班印刷の冊子『国防の本義と其強化の提唱』が各方面にばら撒かれ、澎湃するナショナリズムを背景にその主張が歓迎をもって受け入れられた一九三四〔昭和九〕年⁶⁷、すなわち軍部による国家支配の欲望がにわかに現実味を帯びてきた同年の段階において、荷風のような明敏な知識人には読みとれていたはずだ。

荷風みずからも、この二年後の日中戦争前夜に脱稿された『瀧東綺譚』において、戦雲急を告げる同時代風景を、『たけくらべ』に倣うかのように、「晩秋のたそがれ」と表現しているのである。『瀧東綺譚』テキスト部分の終端に掲げられた、耽美な散文詩の終節「宿かる夢も 結ぶにひまなき晩秋の たそがれ迫る庭の隅⁶⁸。」も、帝国主義、大東亜共栄圏という壮大な「夢」を「宿」し、それをいつときは「結」びかけた東洋の「隅」の国家に、今まさに「晩秋のたそがれ」が忍び寄るさまを形象したものとしてみることが可能であろう⁶⁹。

そのような鋭敏な時代認識と「落魄趣味」の詩的感受性をあわせもつ荷風散人であればこそ、近代日本の凋落の原風景が描かれた『たけくらべ』のはらむ下降性に着目した『里の今昔』を、一九三四〔昭和九〕年の時点で著さないわけにはいかなかったのである。

『たけくらべ』は、近代日本の至上命題であった〈上昇〉〈進歩〉とはうらはらに、下降性を濃厚に内在させた、陰翳あるテキストであることはまちがいない。みてきたように、国民的熱狂を巻き起こした日清戦争時にはだれ一人として想像だにしなかった近代日本の凋落を予兆したとも言い得る、

その時代超越性は、同時代のあらゆるテクストを見渡してみても特異であったことは、いうまでもないであろう。

六．結語——ユートピアへの希求と断念のはざま

本論文の各章では、樋口一葉の諸テクストが、明治二〇年代にほぼ確立をみた「天皇制的「正統性」」（前出、丸山眞男氏）「天皇制に直接的にかかわる正統性観念」（前出、安丸良夫氏）と、文明開化の中心イデオロギーとしての立身出世主義が共作用的に結ばれた（近代日本の正統性）から、いかに著しく逸脱していたかを眺めてきた。近代日本の支配的イデオロギーから逸脱してやまない樋口一葉のテクストの特異性を、同時代の閨秀小説をはじめとする文学テクストや新聞・雑誌メディア言説、時に視覚メディアと対比させ、析出したのである。

前章・第六章においては、そのように近代日本の支配的なイデオロギーから逸脱的にしか生き得ない主人公たちの、非理性的な（狂愚）や虚無を表現したテクストが、幕末維新期および同時代の言説と一部において相同しつつも、やはり明白な差異を示していることを分析した。つまり、樋口一葉のテクストの過去および同時代にたいする歴史超越性を指摘することによって、そのテクストの特異性を再確認したわけである。

そして今、本終章において、『たけくらべ』が含み持つ、時間の推移による暗転という主題と、未来、すなわち一九四五（昭和二〇）年の敗戦という破局との暗合を発見することで、過去と同時代のみならず、国是としての発展を軍拡による国家勢力の拡大へと収斂させていった近代日本の歴史それ自体にたいする、同テクストの超越性を指摘したのである。

樋口一葉の文学は、そのように、〈国民国家にたいする立身出世を通した忠誠〉という正統性観念に貫かれた近代日本それ自体にたいする、背理の文学である。そのかぎりにおいて、その文学が、近代日本の言説空間において特異な光彩を放つのは当然であろう。本論文各章においてなされた分析が、すべてテクストの特異性を指摘することに帰結したのも、それゆえによる。

一義的な判読をこばむ断片表現や空白のあわいから、あるいは多声的な科白の交錯のなかから、その近代日本の絶対無比の正統性に背馳した、もしくは背馳せざるを得なかった娼婦や下女や土方や車夫たちの、時に無言でしか表現できない痛切な内面——情念や鬱懐や悔悟や寂寥などを形象しよう志向するそのテクストの数々は、とどのつまり、世界の中心から逸脱することによってしか見えてこない（何か）を語ろうとしているのであり、その（何か）とは何かをめぐって、さまざま解釈が生まれてきたのであろう。これを言い換えれば、樋口一葉の文学においては、近代日本の価値観とは正反対に、逸脱という非理性的な（狂愚）にこそ、じつは至高の価値が置かれているのである。だが、そのように、世俗的には無価値どころか災厄にほかならないものの中にこそ、最も豊かな可能性を見出そうとするのが、おそらく文学という営為なのである。

さしあたり、それが本論文の結論ではあるが、最後に、この特異なテクストの書き手である樋口一葉という異形の作家について考察することをもって、結語に代えたい。

述べてきたように、樋口一葉の文学を（狂愚）たらしめている、別言すれば豊饒たらしめているものこそ、イーザーの文学定義に述べられている「支配的な意味システム」から「排除されたもの」への親和性、つまり「支配的な意味システム」からの逸脱性であった。「虚構テクストは、支配的な意

味システムの再生産を行なうわけではなく、むしろ、どの支配的意味システムの中にもある潜在化され否定され、従って排除されたものと結びついている。「…」すなわち、虚構テキストは、システム構造の周縁ないし、境界を示すものに出発点をとる⁷⁰。」

樋口一葉の文学を文学として屹立させているのは、近代日本にあまねく張り巡らされた「支配的意味システム」の、「再生産」ではなくそこからの逸脱、反復ではなく「否定」の様相なのである。本論文の各章で確認したような、立身出世主義・忠君愛国思想からの逸脱というプロットはむしろのことで、そもそも閩秀小説においては描写の禁忌対象にほかならなかった、娼婦や車夫や土方や廓者など正統性の埒外に「排除されたもの」たちとその世界が主題化されていることから、それは明らかである。

だがなにより、そのような閩秀に課せられた厳格な禁忌を犯してしまった樋口一葉という書き手こそ、「システム構造の」「境界」外に出てしまった逸脱者にちがいなかった。身近に存在する文芸の師たち、御歌所派の代表的歌人にして、女徳の最強のイデオログであった「高等婦人」中島歌子や三宅花圃たちからは、その小説世界を淫猥、卑陋と冷ややかに否定され⁷¹、江湖の読者たちからは、そのような小説を書いた自分に淫靡なまなざしが注がれることを充分承知したうえで——現に同時代メディアは、花圃の証言を傍証として掲げながら、一葉本人の閱歴があたかもそのようなものであるとしてスキャンダラスに書き立てた⁷²——、『にぎりえ』や『たけくらべ』、あるいは『暗夜』や『われから』を書き、世にしめすことは、実はそれ自体がまったき「狂愚」であり、非理性にほかならなかったからである。

樋口一葉という作家に内在する、かかる逸脱性と非理性性を、近代文壇においてもっとも肯定的に評価した批評者の一人が、くだんの永井荷風であった。

およそ明治の末年東京市内にありし私窩子の風俗、名家の文章にその跡を留めたるもの、本郷柳町の風俗の一葉女史が名作「にぎりえ」に描かれたるを以て第一となすべし。「…」およそ明治中葉以降藝者のことを書きたる小説汗牛充棟もたゞならぬに、地獄白首のことを書きたるものに至つては晨星寥々たるの感あるは何ぞや。藝者の内幕を穿つて書けば通人と云はるゝに引かへて、白首の事より外には知らぬ人と云はれては、文士もいさゝか気まりがわるくなるものと見えたり⁷³。

（荷風『桑中喜語』一九二六（大正一五）年）

樋口一葉の覚悟に比した場合の、「文士」たちの卑小な体面主義を嘲罵したこの文章がよく示しているように、大正期の男性作家ですら描写の対象とすることに抵抗のあった「私窩子」を、明治中期の閩秀作家が取り上げ、ましてその内面を描くことは、文壇のみならず近代日本の正統性観念においても逸脱の極みと言つてよかつた。事実、『にぎりえ』や『たけくらべ』の物語空間は、戦後も一〇年ほど経て、芝木好子の小説が登場するまで、女性作家にとつて黙過の対象以外の何物でもなかった。だが、「芸術は遂に国家と相容れざるに至つて初て尊く⁷⁴」、『妾宅』一九一二（明治四五）年）を持論としていた荷風にとっては、そうした樋口一葉の正統的国民像からの逸脱性こそが、その文学における「芸術」性を担保する根拠であつたわけである。

なぜ樋口一葉は、みずからも正統性観念から逸脱するという困難を冒してまで、逸脱や「破滅」を

主題に据えたテキストを書いたのか。ここで改めて参照したいのが、創作動機についてみずから語った一文「おのれも知らぬ心のそこに、怪しうひそむ物ありて心細き感は常有し⁷⁾」である。同文をめぐって、拙稿は以前、次のように述べた。文学テキストというものが作家の非理性の産物にほかならず、したがってその本質にかならず非理性的なもの——あらゆる支配的イデオロギーからの逸脱——を含んでいることを一葉が直感していたことをしめす文である、と。以上の管見をもう少し掘り下げながら、その問い、つまり樋口一葉という作家について考えてみたい。

このきわめて断片的な、しかし一読するものに興味を喚起させずにはおかない謎めいた短文からは、少なくとも次の事柄を読み取ることができる。樋口一葉は、言葉を書きつらね、物語を形象する、すなわち紙上において世界を創造するという行為が、自分自身の識閥下にひそむ名状しがたい奇怪な衝動の作用によるものとして感知していた。樋口一葉にとって、書くこととは、たとえば荷風が侮蔑した「文士」たちのように「功利的判断力を働かせること」から最も遠く離れた営為であり、自身の理性的な意思を超えた出来事であるかぎりにおいて、世俗的な観点からすれば災厄すら蒙りかねない不穏な出来事として予感されていた。「心細き感は常有」と書きつけずにはいられたかったゆえんである。

したがって、書くことは、自己解放の愉悅に浸される幸福な出来事というよりは、むしろ圧倒的な孤独に呑み込まれる空恐ろしい出来事にほかならなかった。そして実際、その不吉な予感どおり、怪しい衝動から生まれたテキストはいずれも、〈今ここにある世界〉——天皇制的正統性と資本主義に緊密に支配された立身出世成功主義の近代日本——の外に出てしまった者たちの物語なのであった。

この現前するテキストに即していえば、奇怪な衝動とは、〈今ここにある世界〉の外部を志向する情動ということになる。〈今ここにある世界〉に静態的に安住し続けようとする態度ではなく、その外部を指そうとする、あるいは目指さざるを得ない動態的な志向こそが、「おのれも知らぬ心のそこに、怪しうひそむ物」の正体なのだ。

それを敷衍していえば、樋口一葉にとって書くこととは、歴史的な時間と地政学的空間の結節点としての〈今ここにある世界〉、すなわち、そこに偶然生を享けた者を拘束する宿命としての、〈今ここにある世界〉から解き放たれようとする衝動にほかならなかった。言い換えれば、樋口一葉にとって、書くこと、紙上において世界を創造することは、近代日本という、〈今ここにある世界〉の「意味システム」を解体する出来事に等しかったわけである。だが、いうまでもなくそれは、〈今ここにある世界〉にしか存在しえない自分自身を、自分が造形した主人公たちと同様、ほとんど「身の破滅」『十三夜』に晒すような危機的経験を意味するだろう。

書くことをめぐる経験を考える上での好個の参照例として、ここでもう一度、樋口一葉の文学を高く評価していた永井荷風を召喚してみたい。みずからの作家としての心象風景を「現代文士の一人」「珍々先生」に仮托して綴った前掲『妾宅』において、荷風はこう記している。

芸術は遂に国家と相容れざるに至つて初て尊く、〔…〕けれども其処まで進まうといふには、妻あり子あり金あり位ある普通人には到底気味わるくて出来るものではない。そこで自然と、物には専門家と素人の差別が生ずるのだと、珍々先生は自己の廃類趣味に絶対の芸術的価値と威信とを附与して、聊か得意の感をなし、荒みきつた生涯の、せめてもの慰藉にしようとして試みるのであつたが、なんとなくその身の行末空恐ろしく、あゝ人間もかうなつてはもうおしまひだ〔…〕

惆悵として盃を傾くる事二度び三度び⁷⁶。

文学における「絶対の芸術的価値」を担保するのは「廃類趣味」そのみであり、それがおのずから国民道徳に背反するかぎりにおいて、書くこととは「国家」と世間の外に離脱してしまう「その身の行末空恐ろしい」経験である。耽美派を自他共に称する作家の「威信」が思うさま誇示された一文といえようが、やはり荷風にとつても、書くこととは、まぎれもなく「空恐ろしい」経験として確信されていた。

だが、留意すべきは、その主人公の命名に端的に示されているように、荷風は自身に擬した主人公をことさらに戯画的、諧謔的に造形することで、同テキストの架空性をしっかりと確保している点である。というのも、荷風がここで主人公の口を借りて披瀝している「空恐ろしい」エクリチュール論とはうらはらに、じっさいの荷風——「ランティエ⁷⁷」という特権的金利生活者であった荷風にとつて、書くこととは、とどのつまり風流韻事としか言えないような営為だったからだ。偏奇館という俗世から遮断された城の中の高踏的文人であることを可能にするだけの恒産のある、そのため生涯べ切のある原稿依頼を受け付けることのなかった⁷⁸。悠々自適な上流紳士荷風にとつて、逸脱や「廃滅」や「落魄」を描くことは——むろん「成功主義の物欲しい世の中⁷⁹」（前掲『妾宅』なる言葉にうかがえるように、近代日本の貧しい精神風土に対する鋭い批判行為であるにはちがいないが、それも含めて——みずからの審美的「趣味」の実践であり、突きつめていえば、好事とよぶべき営為であった。

他方、「わか身は無学無識にして家に産なく縁類の世にきこゆるもなし はかなき女子の一身をさゝけて思ふ事を世になさんとするとまこころに限あり 智恵の極ミしるへきのミ」『水の上につ記』一九五（明治二八）年五月一〇日）と、書くうえでの何重もの限界に思い至りながらも懸命に書かれ、そのことが生命を縮める直接原因となった、つまり文字通り生命を削って書かれた樋口一葉のテキストにおける逸脱や「破滅」や「狂愚」が、荷風のそれとはおのずから異なる迫真の響きを放つのは必然であろう。荷風とは社会的属性において余りに対照的な、きわめて脆弱な周縁的存在——繰り返されるテキスト表現でいえば「小さ」な「捨てられ物」——であった一葉が、近代日本の正統性觀念から逸脱する「破滅」的人物ばかりを造形することは、趣味や好事であるはずがない、みずからの存在の根源に関わる営為にちがいがなかった。閨秀作家に課された厳格なコードを犯してまでも、〈今ここにある世界〉から逸脱した「破滅」者たち、あるいは「排除されたもの」たちをめぐる物語を創造することによって、その「意味システム」に抗おうとするやみがたい衝動、それが一葉の「おのれも知らぬ心のそこに、怪しうひそむ物」にほかならなかったのである。

ここで参照したいのが、ベンヤミンのエッセー『破壊的性格』を祖述するなかで、逸脱ないし「破滅」の歴史的意義を提示した、今村仁司氏の論攷「破滅への願望」である。論旨はつぎの通りである。

自己保存／破滅願望は、通常かんがえられている、生／死、エロス／タナトスの対応関係と、まったく逆の関係にある。つまり「自己保存は、必ずしもよりよく生きる行為ではないし、破滅への願望または破滅への意志は、必ずしも死の本能ではない」。むしろ「自己保存ではなくて、破滅願望こそ生への意志であり、よりよく生きることに通じる」かぎりにおいて、破滅願望は「ユートピア的契機」にほかならない。したがって、破滅行為は「暴力的な形をとるとき〔…〕能動的な世界変革の方向

に向か」い、「観念的な行為にとどまるかぎりは「……」ユートピアの物語を生み出す」。以上のことがらを基にベンヤミンは、破壊的性格を「歴史的人間」、すなわち「歴史の新しいルートの開拓者」と定義した。じゅうらいの政治体制とその体制下の秩序が揺らぎをみせる歴史の転換期には、往々にして秩序再建の傾向が強まり、それにもなつて何者かが排除される動きも強まるが、このとき破壊的性格は「社会的な文脈上で自己排除を自ら自覚的に実践」することで変革の契機を担おうとする。その成否はどうあれ、「歴史の中に「新しいルート」をひらく条件をつくりだすのは、破壊的性格であることに変わりはない。破壊や破滅への意志は、私的な営みではなく、自己の理性的な判断にすら抗して動いてしまう種々の力なのである」。破壊的性格は、歴史の力学の中心に位置づけられる荒ぶる力にほかならない⁸⁰。

明治維新という政治体制の大変換、その反撥としての自由民権運動の激化、それへの対抗措置としての天皇制的正統性観念の確立という、秩序の再建と強化の時代——維新から明治二〇年代までの歴史の転換期における激しい揺らぎのなかで、樋口一葉が造形した人物たちの多くも、まさしく「社会的な文脈上で自己排除を自ら自覚的に実践」する〈狂愚〉的な「破滅」者たちであった。

そして、そのような逸脱と「破滅」の人物たちの造形こそ、作中人物の架空性を冷静に確保する余裕のあった荷風とは異なり、終始、切実に、みずから作中人物に投影せずにはいられたはずの一葉じしんの「破滅への意志」のあらわれであり、〈今ここにある世界〉の外部をめざす「ユートピア的契機」のあらわれであった。

問題としてきた「おのれも知らぬ心のそこに、怪しうひそむ物」とはまさに、近代への歴史的転換期という特殊な条件下における、かような一葉の「破滅への意志」、すなわち「自己の理性的な判断にすら抗して動いてしまう種々の力」であった。樋口一葉は、「歴史の力学の中心に位置づけられる「荒ぶる力」を潜在させた書き手であり、「歴史の新しいルートの開拓者」としての側面を秘めていた作家にちがいがなかった。

だが、その一方で、一葉が『にこりえ』のお力やその父祖に代表される「歴史の中に新しいルートをひらく」「破滅」的人物ばかりでなく、先に見た『十三夜』の録之助のような、いかなるポジティブな意味ももたない、文字通りの〈自滅への意志〉に貫かれた虚無的、厭世的な人物を、印象的に造形していることを忘れてはなるまい。樋口一葉は、ユートピアへの志向と、ユートピアへの諦念とを、同時に生きていたのである。それをよく示している文章が、つぎの有名な最晩年の日記文にほかならない。

しはし文机に類つえつきておもへば誠にわれは女成りけるものを、何事のおもひありとてそはなすへき事かは われに風月のおもひ有やいなやをしらす塵の世をすてゝ深山にはしらんこゝろあるにもあらず さるを厭世家とゆひさす人あり そは何のゆゑならん はかなき草紙にすみつけて世に出せは当代の秀逸など有ふれたる言の葉をならへて明日ハそしらん口の端にうやくしきほめ詞などあな侘しからずや かゝる界に身を置きてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく我れをしるもの空しきをおもへばあやしう一人この世に生れし心地をする我れは女なり いかにおもへることありともそハ世に行ふへき事かあらぬか

『みづの上』一八九六〔明治二九〕年二月一〇日。

近代の黎明期、女性が歴史の変革の主体となることなど想像すらしえなかった時代に、よりよく生きようと希求する「生への意志」¹「破滅への意志」と、現世における営みのすべてを無常と見、生を虚無としか捉えざるを得ない「死への意志」²「自滅への意志」とに引き裂かれていたのが、あるいはその両義性を生きていたのが、樋口一葉という書き手であった。

もとより、同時代の女性作家たちが、せいぜい家父長制の抑圧に呻吟する同性への同情的表現に達した程度の段階で、そのような、生／死それぞれへの意志を混在させたみずからの内面を、男女の性別を超えた普遍的な人間のそれとして表現することができた点において、樋口一葉は真に稀有であったというべきであろう。

およそ「文学テクスト」というのは、絶えずユートピア的なものを目指している³とは、文学論においてしばしば語られる定義であり、じじつ文学テクストの多くはそうである。だが、述べてきたように、樋口一葉の文学は、ユートピアへの強い志向と、ユートピアへの深い断念との相剋に特徴づけられる。

それは、天皇制的正統性と資本制、その双方が具現化した立身出世主義という「支配的な意味シテム」の網の目を緊密にはりめぐらし、正統と非正統とをたえず峻別し、後者をきびしく排除しながら進行していった近代日本に初めて登場した後者の側の女性作家にして、みずからの境位から近代日本を批判的に捉え返すまなざしを持ちえた初めての女性作家、樋口一葉だけに可能な文学表現にほかならなかつた。日本近代文学史の黎明期に開花した、そのような特異な大輪こそが、樋口一葉の文学なのである。

その意味において、立身出世成功主義と資本主義という、近現代の絶対的価値観のアイコンである紙幣に、本論文冒頭で述べたように、現在、樋口一葉の肖像画が印刷され、市場に流通、氾濫しているさまは皮肉である。だがそのこと自体が、樋口一葉の文学が未読、あるいは誤読されてきたことを証しているだろう。本論文は、それを指摘するための、ひとつの試論であった。

¹ 『たけくらべ』本文引用は、すべて前掲『樋口一葉全集 第二巻』所収による。

² 川本三郎『荷風と東京 『断腸亭日乗』私註』（都市出版、一九九六年）六〇頁。

³ 同右。

⁴ 永井荷風『断腸亭日乗』、『荷風全集 第二十一巻』（岩波書店、一九九三年）所収、一六頁。

⁵ 同書、二二二頁。

⁶ 同書、三五三―三五四頁。

⁷ 同書、三五四頁。

⁸ 『里の今昔』の執筆に関わる『断腸亭日乗』の記述については、昭和二年一月一日付と、昭和九年一月二八日付を参照のこと。

⁹ 永井荷風『里の今昔』、『荷風全集 第十七巻』（岩波書店、一九九四年）所収、三〇七頁。同テク

スト巻末に「甲戌（一九三四、昭和九年）十二月記」とある。『中央公論』第五十年第三号、一九三五（昭和一〇）年三月一日、初出（以上、同全集「後記」四五―四六頁）。

¹⁰ 同書『荷風全集 第十七巻』、三二五頁。

¹¹ 川本、前掲書、四〇―四一頁。

¹² 同右。

¹³ 同書、四〇一—四〇二頁。

¹⁴ 同書「三十 瀬東の隠れ里——玉の井」全体を参照。

¹⁵ 同書、四〇〇頁。

¹⁶ 永井荷風『瀬東綺譚』一九三七（昭和一二）年、前掲『荷風全集 第十七卷』所収、一七一頁。

¹⁷ 同書、一八三頁。

¹⁸ 同書、一七二頁。

¹⁹ 同右。

²⁰ 小森陽一氏は『瀬東綺譚』を「日本近代文学において稀有な、亡命者の文学である」と指摘する（『ゆらぎ』の『日本文学』NHKブックス、日本放送出版会、一九九八年、一九六頁）。

²¹ 荷風、前掲『里の今昔』、前掲『荷風全集 第十七卷』所収、三〇七頁。

²² 同書、三一四頁。

²³ 同右。

²⁴ 「むかし北廓を取巻いてゐた鉄漿溝より一層不潔に見える此溝も」（荷風、前掲『瀬東綺譚』、

前掲『荷風全集 第十七卷』所収一四一頁）、「溝際の家〔…〕仮に之を北里に譬えて見たら、京町一丁目も西河岸に近いはづれとでも言ふべきものであらう。」（同書、一二〇頁）、「溝の汚さと、蚊の鳴声」（同書、一二二頁）、「去年お西様の時分にはまだ居たかも知れない。」「やつぱり反歩か。」ときいたが、時代の違つてゐる事に気がついて、「この辺でも吉原の裏に行くのか。」「ええ。」「（同書、一五〇頁）、など、『瀬東綺譚』で玉の井は明らかにかつての吉原に見立てられている。

²⁵ 同書、一二二頁。

²⁶ 同右。

²⁷ 江藤淳氏は、『荷風散策—紅茶のあとさき—』（新潮社、一九九六年）所収「橋の彼方の世界」において、つぎのような意見を提示している。

『里の今昔』執筆同年＝一九三六（昭和九）年作『冬の蠅』『深川の散歩』によれば、「新大橋」の彼方の深川には、金融恐慌と大恐慌によつて大震災後一一年を経ても、未だ焦土のままの荒涼茫漠たる景色が広がっていたが、この頃、荷風が深川から砂町埋立地に頻繁に赴いている理由は、こうした「他界と現世とのあいだに横たわる空間に架けられた記号」としての「新大橋」を渡るためであった。荷風はこの「新大橋の彼岸に杖を曳きながら、実は死の世界に出遭おうとして」いたのであり、「荷風は死の世界を彷徨しながら、同時に強く超倫理的な腐敗と解体の温みに身を浸すことを求めていたのかもしれない」。その彼岸の世界を象徴する世界が洲崎遊郭近傍なのである（四七—五五頁）。

以上の江藤氏の意見を踏まえれば、吉原の「腐敗と解体」「死」を描いた『里の今昔』にも、この時期の荷風の心情が反映されていたはずである。江藤氏によれば、荷風は『瀬東綺譚』執筆後、「吉原に取材した作品を構想中」（同書、一四一頁）であったという。「腐敗と解体の温み」にある『ひかげの花』の洲崎、亡き吉原の仮構空間『瀬東綺譚』の玉の井、そして「腐敗と解体」が進み完全な「死」の空間と化した吉原の執筆構想。この創作の流れの中に『里の今昔』を位置づけることが出来るのではないか。

²⁸ 藤目、前掲書によると、「婦人及児童の売買金糸二関スル国際条約」（一九二五（大正一四）年）批准を受けての、内務省刑務課長の発言「公娼廃止の腹案は出来ている」（一九三五（昭和九）年）、「一九三五年（昭和九）年までに一四県の「廃娼」の実現」（藤目、前掲書、三二四頁）を指していると思われるが、「廃娼を実現したという一四県」は「実質的にはならんら変化がな」（同頁）く、公娼制度は一九五八（昭和三三）年まで引き継がれることになる。

²⁹ 荷風、前掲『里の今昔』、前掲『荷風全集 第十七卷』所収、三〇七頁。

³⁰ 荷風、前掲『瀬東綺譚』、同書、所収、一七二頁。

³¹ 公娼制と軍隊との不可分の関係性について、藤目、前掲書、第一章「欧米の公娼制と廃娼運

³² 動」、第二章「近代日本の公娼制と廃娼運動」全体を参照。

³³ 同書、九七頁。

³³ 同右。

³⁴ 同書、三二四頁。

³⁵ 伊藤隆『日本の歴史 第30巻 十五年戦争』（一九七六年、小学館）によれば、一九三三（昭和八）年度軍備費は、前年を約三億円も上回る、二二億三九〇〇余円であった（八一頁）。

³⁶ 折井美耶子「五 近代日本の公娼制と買春」、総合女性研究会編『日本女性史論集9 性と身体』（吉川弘文館、一九九八年）所収、一一二頁。

³⁷ 同書、一二〇頁に掲載された『警視庁統計書』によれば、一九一八（大正七）年（遊客数四、三二五、〇九二人）、一九二二（大正一一）年（一、〇九六、四二六八）、一九二八（昭和三）年（四、六九八、〇〇三人）、一九三三（昭和八）年（五、三五四、九一九人）、一九三七（昭和一二）年（六、三二五、九三六八）。

³⁸ 同書、一一二頁。

³⁹ 同書、一一五―一一七頁。

⁴⁰ 同書、一一五頁に掲載された「表1 娼妓数比較」による。

⁴¹ 『断腸亭日乗』一九三二（昭和七）年四月七日、『荷風全集 第二二巻』（岩波書店、一九九三年）所収、五〇一頁。

⁴² 川本三郎・荻野アンナ・井上ひさし・小森陽一「座談会昭和文学史 永井荷風と坂口安吾」『すばる』二〇〇〇年一月号、川本三郎氏の発言（二八九頁）。

⁴³ 荷風、前掲『里の今昔』、前掲『荷風全集 第十七巻』所収、三〇七頁。

⁴⁴ 同書、三一三頁。

⁴⁵ 同書、三一四頁。

⁴⁶ 同右。

⁴⁷ 同右。

⁴⁸ 同書、三一六頁。

⁴⁹ 松坂俊夫「第一部 作品篇 たけくらべ」『樋口一葉事典』四二―四三頁。

⁵⁰ 小森陽一教授より、テキスト結末における西の市の日、「乱れ入る若人達の勢ひとは天柱くだけ、地維かくるかと思はるゝ笑ひ声のどよめき〔…〕絃歌の声のさまぐくに、湧き来る様な面白さは、大方の人々思ひ出で、忘れぬ物におぼすも有るべし」と語られているような、凄まじい熱気と興奮に包まれている吉原の盛況（一葉が実見した一八九三（明治二六）年末）の要因として、すでに開戦の端緒をうかがい、翌年六月には正式に大本営が設置される日清戦争直前における、従軍を控えた兵士たちの登樓の多さを御指摘いただいた。

⁵¹ 宇野、前掲書、三一〇―三一六頁。

⁵² 荷風、前掲『里の今昔』『荷風全集 第十七巻』所収、三一五頁。

⁵³ 同右。

⁵⁴ 上田敏、前掲「一葉女史」においても、同一節は次のように評価されている。「大作といったらそれはたけくらべになる、文章の一番よいところはその中の「春は桜の賑ひ…」からの一節だと思ふ」（四八頁）

⁵⁵ 無署名（前掲『田岡嶺雲全集 第二巻』解題、七四七頁によれば田岡嶺雲）「たけくらべ」『青年文』三巻四号、一八九六（明治二九）年五月一〇日も、『たけくらべ』本文のなかに悲哀、すなわち「さびしき趣」と「情趣」を読み取り、次のように評する。「文藝倶楽部第五篇中の庄巻は一葉の『たけくらべ』なるべし〔…〕此人の筆つよき裡になんとなくさびしき趣ある、よく西鶴が神を傳へたるものといはん哉。」（二二六頁）

⁵⁶ 広津柳浪、前掲『今戸心中』『今戸心中 他二篇』所収、九七頁。

⁵⁷ 関、菅、校注、前掲書、五一五頁、補注六五。及び大河晴美「第二部 項目篇 日暮里の火葬場」『樋口一葉事典』二七九頁。

⁵⁸ 松坂、前掲「第一部 作品篇 たけくらべ」『樋口一葉事典』における考証「現「たけくらべ」執筆の時期は、それぞれの部分が〔…〕「文学界」にそれぞれ発表の直前に脱稿されたものと考えられる」（四三頁）を参照。「第九―第十章・第三二号（明治二八・二九）」（同書、四二頁）

⁵⁹ 田山花袋、前掲『東京の三十年』「出発の軍隊（日清戦争）」、前掲『明治大正文学回想集成2 東京の三十年』九二頁。

- 60 同書、九三頁。
- 61 同書、九一頁。
- 62 同右。
- 63 同右。
- 64 大河、前掲文、『樋口一葉事典』二七九頁。
- 65 関、菅、校注、前掲書、五一五頁、補注六七。
- 66 高田知波『たけくらべ』における制度と〈他者〉、前掲『樋口一葉論の射程』所収では、藤沢衛彦『明治流行歌史』(一九二九〔昭和四〕年)に採録された厄介節とは異同する、『花街風俗志』で「中略」と書かれている部分には、「活字では公表できないような生々しい文句が歌われていた可能性を想像することもできる」(八四頁)と指摘されている。
- 67 伊藤(隆)、前掲書、一一八頁。
- 68 荷風、前掲『澤東綺譚』『荷風全集 第十七卷』所収、一六五頁。
- 69 同散文詩のみならず、作中に掲げられた『紅楼夢』『秋窓風雨夕』、および、玉の井の娼家で「わたくし」が思い起こす自作の句八首は、すべて暮秋を題材とした詩歌である。なお、江藤淳氏はテクストに挿入されたこれら詩歌を「単に季節感を強調するのみならず、メタ・小説の時空間の奥行きを一層深めるという意図で象嵌されている」(江藤、前掲書、一三二頁)と指摘する。
- 70 ヴォルフガング・イーザー 轡田収訳『行為としての読書』(特装版岩波現代選書、一九九八年)「ロ A 4 レパートリーの関連領域とその選択」一一二頁。なお、同部分は、前田愛『増補文学テクスト入門』(ちくま学芸文庫、一九九三年)一四二頁においても引用されている。
- 71 「濁江は非常に評判がありました様ですが、場所がきたなくて、それに人間がどうやら生きて居りません様で・・・もうチートトどうか仕方がありそうなものでした」(中島歌子「緑陰苔話」『読売新聞』一八九六〔明治二九〕年五月二八・二九日)
- 72 花圃の反一葉的言説や、同時代メディアにおける一葉に対するスキャンダラスな言説について、小川、前掲論文、二〇頁を中心に全体、参照。
- 73 永井荷風『桑中喜語』一九二六〔大正一五〕年四月一日、春陽堂『荷風文藁』初出、『荷風全集 第一五巻』(岩波書店、一九九五年)四一四頁、所収。
- 74 永井荷風『妾宅』一九二二〔明治四五〕年四月、初出、『荷風全集 第八巻』(岩波書店、一九九二年)二二一頁。
- 75 『みづの上日記』一八九六〔明治二九〕年六月二日、前掲『樋口一葉全集 第三巻(上)』所収。
- 76 前掲『妾宅』『荷風全集 第八巻』所収、二二一―二二二頁。
- 77 川本、前掲書、二六四頁。金利生活者としての荷風について、同書 二十 ランティエの経済生活』二六四―二七四頁、参照。
- 78 川本他、前掲「座談会昭和文学史 永井荷風と坂口安吾」における川本三郎氏の発言(二〇五頁)。
- 79 前掲『妾宅』、前掲『荷風全集 第八巻』一九九頁。
- 80 以上、今村仁司『現代思想の系譜学』(ちくま学芸文庫、一九九三年)「破滅への願望」二七九―二八四頁。
- ヴァルター・ベンヤミン 野村修編訳「破壊的性格」『暴力批判論 他十篇 ベンヤミンの仕事』(岩波文庫、一九九四年)所収、および『ヴァルター・ベンヤミン著作集1 暴力批判論』高原宏平、野村修、編集解説、晶文社、一九六九年、所収、参照。
- 81 前田、前掲書『増補 文学テクスト入門』一四五―六頁。

主要参考文献

凡例

以下の参考文献は、本文中または脚注で言及したものに限って記載した。各章ごとに、一次資料（原典）と二次資料（研究文献）とに分け、前者を先に、後者を後に、著者名字の五十音順に記載した。樋口一葉の原テキストだけは各章冒頭に掲げた。原典資料において、雑誌記事や近世テキストなどで著者が不明のばあいは、雑誌名、書名を五十音順に配列した。重要資料は各章に重複して記載した。一九四五（昭和二〇）年までの原典資料は和暦を併記したが、同年以降は西暦のみ記した。

序章

（原典）

樋口一葉『棚なし小舟（甲種）』一八九一（明治二四）年、塩田良平、和田芳恵、樋口悦編纂『樋口一葉全集 第一巻』筑摩書房、一九七四年、所収《以下、『樋口一葉全集』と巻名のみを記す》

樋口一葉『につ記』一八九三（明治二六）年七月二二日、『みづの上』一八九六（明治二九）年二月一〇日、『樋口一葉全集 第三巻（上）』一九七六年、所収

樋口一葉『花ごもり』『文學界』第一四一―一六号、一八九四（明治二七）年二月二八日―四月三〇日
樋口一葉、伊東夏子宛書簡46、一八九四（明治二七）年四月末、樋口悦編『一葉に与へた手紙』今日の問題社、一九四三（昭和一八）年、所収

大町桂月「一葉全集を読む」『帝国文学』第三巻第二号、一八九七（明治三〇）年二月
小此木秀野「閨秀小説を読む」『女學雜誌』第四一八号、一八九六（明治二九）年一月

帰休庵「鷓鴣搔」『めさまし草 まきの一』一八九六（明治二九）年一月

「一葉」『青年文』第三巻一号、一八九六（明治二九）年二月

幸田露伴「家庭 故樋口一葉女史」『成功』第五巻一号、一九〇四（明治三七）年七月
国立印刷局公式ホームページ「お札に関するよくある質問（回答）」

<http://www.npb.go.jp/ja/intro/faq/ans.htm#001>（二〇一二年九月、閲覧）
財務省公式ホームページ「日本銀行券の改刷について（参考）」

<http://www.mof.go.jp/currency/bill/issued/ks140802a.htm>（二〇一二年九月、閲覧）

笹川臨風「一葉女史を吊ふ」『青年文』第四巻第五号、一八九六（明治二九）年二月

正太夫「金剛杵」『めさまし草 まきの一』一八九六（明治二九）年一月

「時報」樋口一葉女史逝く」『女學雜誌』第四三二号、一八九六（明治二九）年二月一〇日

脱天子・登仙坊・鐘礼舎「三人冗語（たけくらべ）」『めさまし草 まきの四』一八九六（明治二九）年四月

「雑録 一葉全集 再版」『智徳會雜誌』第四十一号、一八九七（明治三〇）年八月

土井晚翠「〇一葉女史」『帝国文学』第二巻第十二号、一八九六（明治二九）年二月

戸川安宅「樋口なつ子ぬしをいたむ」『女學雜誌』第四三二号、一八九六（明治二九）年二月一〇日

星野天知「明治廿五年文界」『女学生』一八九二（明治二五）年二月二三日

馬場孤蝶「樋口一葉に就いて」『雄弁』一九一三（大正二）年六月

「雑報」樋口一葉女史を悼む」『文藝俱樂部』第二巻第十五編、一八九六（明治二九）年二月

魯庵生「一葉女史」に「こり江」『国民之友』第二六六号、一八九五（明治二八）年一〇月

(研究文献)

- 岡保生『薄倅の才媛 樋口一葉』新典社、一九八二年
- 小川昌子「変貌する「一葉」——明治三十〜四十年代における「一葉」語りの諸相——」『日本近代文学』二〇〇二年一〇月
- カラー、ジョンナサン『文学理論』荒木映子、富山太佳夫訳、岩波書店、二〇〇三年 (Culler, Jonathan, *Literary Theory: A Very Short Introduction*, Oxford University Press, 1997.)
- 後藤積・山田有策、作成「年譜」、岩見照代、北田幸恵、関礼子、高田知波、山田有策編『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年《以降、『樋口一葉事典』とのみ記す》
- 小平麻衣子『女が女を演じる 文学・欲望・消費』新曜社、二〇〇八年
- 近藤富枝「たけくらべ殺人事件」『宵待草殺人事件』講談社、一九八七年、所収
- 坂本政親「一葉と同時代」『国文学解釈と鑑賞 特集樋口一葉の世界』一九八六年三月
- 笹尾佳代『結ばれる一葉 メディアと作家イメージ』双文社出版、二〇一二年
- 塩田良平『樋口一葉』吉川弘文館、一九六〇年
- 新フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読みなおす』学林書林、一九九四年
- 関礼子「闘う父の娘——一葉テキストの生成」、江種満子・漆田和代編『女が読む日本近代文学』新曜社、一九九二年、所収
- 瀬戸内晴美「うらむらさき(一葉をうけて)」「使者」七、一九八〇年一〇月、所収
- 高田知波「近代文学と「文化資源」——一葉研究を例として——」『国語と国文学』《文化資源》としての国文学』東京大学国語国文学会、二〇〇〇年十一月特集号
- 高橋修、三田村雅子、ハルオシラネ、松浦寿輝、兵藤裕己《座談会》新しい文学研究のために『文学』岩波書店、二〇〇〇年六月夏
- 竹村和子『思考のフロンティア フェミニズム』岩波書店、二〇〇〇年
- 西川祐子『私語り樋口一葉』リブレポート、一九九二年
- 日本近代文学館 小田切進編『日本近代文学大事典 机上版』講談社、一九八四年
- 野口碩「キイ・ワード事典 漂う舟〈彷徨〉」「舟」、『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 野口碩「資料一般から抽出される一葉の思考の世界——特に「流れ」をめぐって」、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉Ⅳ』おうふう、二〇〇六年、所収
- ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、一九九九年
- 平岡敏夫「一葉とその時代——風俗と世相」『国文学解釈と鑑賞 特集 夭折のロマン 樋口一葉』一九七四年一二月号
- 平田由美『女性表現の明治史 樋口一葉以前』岩波書店、一九九九年
- 前田愛、編集・評伝『新潮日本文学アルバム3 樋口一葉』新潮社、一九八五年
- 前田愛『樋口一葉の世界』平凡社ライブラリー4、一九九三年
- 松下浩幸「戦後民主主義と樋口一葉——児童向け伝記物語の問題点をめぐって——」、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉Ⅳ』おうふう、二〇〇六年、所収
- 松本清張「正太夫の舌——斎藤緑雨伝ノート——」『別冊 文藝春秋』一九七二年九月号、所収
- 丸山眞男『忠誠と反逆 転形期日本の精神的位相』筑摩書房、一九九二年
- 宗像和重『「一葉全集」という書物』『文学』第10巻・第1号、一九九九年冬
- 村松定孝『評伝樋口一葉《作品と作家研究》』実業之日本社、一九九九年
- 安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店、一九九二年

藪禎子、佐伯順子、菅聡子「座談会 樋口一葉——これまでの、そしてこれからの」『国文学解釈と鑑賞』二〇〇三年五月号
藪禎子「一葉文学——「世」を視座として」『国文学解釈と鑑賞』二〇〇三年五月号
湯地孝『樋口一葉論』至文堂、一九二六〔大正一五〕年
和田芳恵『一葉の日記』筑摩書房、一九五六年

第一章

(原典)

樋口一葉『うもれ木』一八九二〔明治二五〕年(未定稿をふくむ)、『樋口一葉全集 第一巻』所収
樋口一葉「ちり中日記 今是集」一八九二〔明治二六〕年一〇月一六日、『樋口一葉全集 第三巻(上)』所収

樋口一葉(雑記二)、草稿断片「作品」一、『樋口一葉全集 第一巻』所収

和田芳恵、解説、注釈『日本近代文学大系 第8巻 樋口一葉集』角川書店、一九七〇年

上田萬年『大日本國語辞典』富山房、一九一五〔大正四〕年

大槻文彦『言海 第三冊』秀英舎、一八九〇〔明治二三〕年

奥平昌邁「富ノ不平均ハ國力ヲ萎靡スルノ論」『郵便報知新聞』第一五四四號、一八七八〔明治一一〕年三月二二日、投稿欄、明治文化研究會編輯『明治文化全集 第十五巻 社会篇』日本評論社、一九五七年、所収

北村透谷「慈善事業の進歩を望む」『評論』第二五号、一八九四〔明治二七〕年六月五日、『明治文學全集 29 北村透谷集』筑摩書房、一九七六年、所収

窪田静太郎「財団法人中央社会事業協會創立の事情と其の後の推移」『窪田静太郎論集』日本社会事業大学、一九八〇年

島田三郎「日本之下層社会 序」、横山源之助『日本の下層社会』(底本『日本之下層社会』)教文館、一八九九〔明治三二〕年)岩波文庫、一九四九年、所収

横山源之助『日本の下層社会』(底本『日本之下層社会』)教文館、一八九九〔明治三二〕年)岩波文庫、一九四九年

(研究文献)

阿部美智子「「うもれ木」論」『日本文学ノート』第二二号、一九七五年二月

猪狩友一「〈美術〉の時代と硯友社」『硯友社文学集 新日本古典文学大系』岩波書店、二〇〇五年、所収

池田敬正『日本社会福祉史』法律文化社、一九八六年

石附実「シカゴ閣龍博と教育」、吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版、一九八六年、所収

上野千鶴子「解説三」、小木新造、熊倉功夫、上野千鶴子校注『日本近代思想体系23 風俗 性』

岩波書店、一九九〇年

上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店、一九九四年

岡野幸江「封じられた言葉の行方——『うもれ木』の深層」、新フェミニズム批評の会編『樋口一葉を讀みなおす』学林書林、一九九四年、所収

奥武則『大衆新聞と国民国家 人気投票・慈善・スキャンダル』平凡社選書208、二〇〇〇年

片野真佐子『皇后の近代』講談社選書メチエ、二〇〇三年

亀井秀雄『感性の変革』講談社、一九八三年

亀井秀雄「文体創造の秘儀」『国文学 解釈と教材の研究』二九(二三)、一九八四年一〇月

- 亀山美知子『近代日本看護史』 戦争と看護』ドメス出版、一九八四年
- 北沢憲昭『眼の神殿』美術出版社、一九八九年
- サイド、エドワード W. 『オリエンタリズム 上』今沢紀子訳、平凡社ライブラリー11、一九九三年 (Said, Edward W., *Orientalism*, New York, Georges Borchardt, 1978.)
- 坂本政親『一葉と露伴』『福井大学教育学部紀要』一六号、一九六六年
- 佐藤道信『〈日本美術〉誕生』講談社、一九九六年
- 佐藤道信『明治国家と近代美術―美の政治学―』吉川弘文館、一九九九年
- 佐藤道信『日本美術という制度』、『岩波講座 近代日本の文化史 三 近代知の成立』岩波書店、二〇〇二年、所収
- 十五代沈壽官「薩摩焼の世界性」、鹿兒島純心女子大学国際文化研究センター編『新薩摩学―世界の中的さつま』南方新社、二〇〇二年、所収
- 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』日本放送出版協会、一九九七年
- チェックランド、オリヴ『天皇と赤十字』工藤教和訳、法政大学出版会、二〇〇二年 (Checkland, Olive, *Humanitarianism and The Emperor's Japan 1877-1977*, London, Campbell Thomson & McLaughlin, 1994.)
- 塚本章子「一葉」「うもれ木」における〈芸〉の歴史的位相』『近代文学試論』一九九八年
- 長志珠絵「ナショナル・シンボル論』『岩波講座 近代日本の文化史 三 近代知の成立』岩波書店、二〇〇二年、所収
- 戸松泉「第一部作品篇 作品事典 うもれ木」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 永井秀夫『日本の歴史 第25巻 自由民権』小学館、一九七六年
- 中村隆英『明治大正の経済』東京大学出版会、一九八五年
- 中山和子「初期作品をどう読むか』『国文学 解釈と教材の研究』二九(一三)、一九八四年一〇月
- 樋口晋作「うもれ木」の本質―再初期小説の展開から』『近代文学論集』第二〇号、一九九四年一月
- 橋本めぐみ『うもれ木』にみる〈国民〉の実態―『社会文学』第一五号、二〇〇一年
- 日野永一「万国博覧会と日本の「美術工芸」」、吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版、一九八六年、所収
- 兵藤裕己『〈声〉の国民国家・日本』NHKブックス(900) 日本放送出版協会、二〇〇〇年
- T・フジタニ『天皇のページェント 近代日本の歴史民族誌から』米山リサ訳、日本放送出版協会、一九九四年
- 前田愛『前田愛著作集 第三巻 樋口一葉の世界』筑摩書房、一九八九年
- 牧原憲夫『客分と国民のあいだ 近代民衆の政治意識』吉川弘文社、一九九八年
- 目崎徳衛『王朝のみやび』吉川弘文館、一九七八年
- 安丸良夫『出口なお』朝日新聞社、一九八七年
- 安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店、一九九二年
- 山根賢吉「一葉と露伴」『大阪學芸大學紀要』一四号、一九六五年

第二章

(原典)

- 樋口一葉『暗夜』一八九四(明治二七)年(未定稿をふくむ)、『樋口一葉全集 第一巻』所収
- 樋口一葉『暗夜』、『文學界』第一九号、第二一号、第二三号、所収
- 樋口一葉『暗夜』(再掲)『文藝倶楽部第十二編 臨時増刊 閨秀小説』第一卷一二編、一八九五(明

治二八)年一二月、所収

樋口一葉『につ記 二』一八九二(明治二五)年三月一〇日、『水の上』一八九六(明治二九)年、
『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収

菅聡子校註『暗夜』、関礼子、菅聡子校註『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四』岩波
書店、二〇〇一年

和田芳恵、解説、注釈『やみ夜』『日本近代文学大系 第八卷 樋口一葉集』角川書店、一九七〇年
穴澤清次郎、旧筑摩書房版全集月報「一葉」第二号所掲「一葉さん」、『樋口一葉全集 三卷(上)』
所収

生方敏郎『明治大正見聞史』(底本『明治大正見聞史』春秋社、一九二六(大正一五)年)中公文庫、
一九七八年

香軒生「看護婦の資格」『女學雜誌』第二百三十七號、一八九〇(明治二三)年一月一日

かざしの花『村時雨』『文藝俱樂部 臨時増刊 閨秀小説』第一卷二編、一八九五(明治二八)年
一二月

花圃女史『萩桔梗』『文藝俱樂部 臨時増刊 閨秀小説』第一卷二編、一八九五(明治二八)年一
二月

花圃女史「特別寄書 梅雨のつれく」『婦人新報』第五號、一八九五(明治二八)年六月二八日
神戸務『日本赤十字社發達史』帝國癩兵慰藉會、一九〇六(明治三九)年

澁澤榮一『青淵百話 坤』同文館、一九二二(明治四五)年

「○佳伝 ナイテイングールの傳(二)」『女學雜誌』第三拾一號、一八八六(明治一九)年八月五日
『太陽 特集 皇太后崩御』一九二二(大正一一)年五月一日

「竹中すえ子 看護談」『婦人矯風會雜誌』第一号、一八九三(明治二六)年十一月

田沢稲舟『しろばら』『文藝俱樂部第十二編 臨時増刊 閨秀小説』第一卷二編、一八九五(明治
二八)年一二月

田山花袋『東京の三十年』「出發の軍隊(日清戦争)」(底本『東京の三十年』博文館、一九一七(大
正六)年)、平岡敏夫、監修、解説『明治大正文学回想集成2 東京の三十年』日本図書センター、
一九八三年

錦織剛清「神も仏もなき闇の世の中」(底本、春陽堂、一八九二(明治二五)年)『明治文學全集 96

明治記録文学集』筑摩書房、一九六七年、所収

『日本赤十字』第二十九號、一八九四(明治二七)年一二月二三日

日本赤十字社編刊『日本赤十字社史稿』一九二一(明治四四)年

藤島雪子『手箱の内』『文藝俱樂部 臨時増刊 閨秀小説』第一卷二編、一八九五(明治二八)年
一二月

「雜報 婦人從軍を願ふ」『婦人矯風雜誌』第一〇号、一八九四(明治二七)年八月二日

「雜報 各大臣夫人の如み」『文藝俱樂部』第九編、一八九五(明治二八)年九月二〇日

元田永孚「還曆之記」『元田永孚文書』第一卷、元田文書研究会、一九六九年

山路愛山『現代金権史』(初出『商工世界太平洋』一九〇七(明治四〇)年三一二二月)、大久保利謙
編『明治文學全集 35 山路愛山集』筑摩書房、一九六五年、所収

横山順編『幼年教育 婦女鑑』明昇堂、一八九四(明治二七)年

(研究文献)

浅岡邦雄「明治期博文館の主要雜誌發行部数」、国文学研究資料館編『明治の出版文化』臨川書店、
二〇〇二年、所収

- アンダーソン、ベネディクト『想像の共同体 ナショナルリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、リブ
 ロポート、一九八七年 (Anderson, Benedict, *Imagined Communities Reflections on the Origin and
 Spread of Nationalism*, London, Verso Editions, and NLB, 1983.)
- 出原隆俊『闇夜の背後』『日本近代文学』第五三集、一九九五年五月
- 岩本裕『日本佛教語辞典』平凡社、一九八八年
- エルシュテイン、ジーン ベスキー『女性と戦争』小林史子、廣川紀子訳、法政大学出版局、一九九
 四年 (Elstain, Jean Bethke, *Women and War*, Harper Collins Publishers, 1987.)
- 片野真佐子『近代皇后像の形成』『近代天皇制の形成とキリスト教』富坂キリスト教センター、一九
 九六年、所収
- 片野真佐子『皇后の近代』講談社選書メチエ、二〇〇三年
- 亀山美知子『近代日本看護史Ⅰ 日本赤十字社と看護婦』ドメス出版、一九八三年
- 亀山美知子『近代日本看護史Ⅱ 戦争と看護』ドメス出版、一九八四年
- 亀山美知子「看護婦の誕生」、奥田暁子編『女と男の時空—日本女性史再考—』V 関ぎ合う女と男—
 近代』藤原書店、一九九五年、所収
- 川本三郎「廃墟のなかの幻覚」『大正幻影』新潮社、一九九〇年
- 菅聡子『女が国家を裏切るとき—女学生、一葉、吉屋信子』岩波書店、二〇一一年
- 北川秋雄「やみ夜」論—年下の悪女—、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉』おうふう、二〇〇二年
- クニビレール、イヴオンヌ カトリヌ・フーケ『母親の社会史 中世から現代まで』中嶋公子、宮
 本由美訳、筑摩書房、一九九四年 (Knibiehler, Yvonne and Catherine Fouquet, *Histoire des mères
 — du Moyen Age à nos jours*, Paris, les Editions Montalba, 1977.)
- 久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』中央公論社、一九八八年
- 黒沢文尊、河合利修編『日本赤十字社と人道救援』東京大学出版会、二〇〇九年
- 黒田壽郎「オリエンタリズム」、今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社、一九八八年、所収
- サイド、エドワード W.『オリエンタリズム 上』今沢紀子訳、平凡社ライブラリー11、一九九
 三年 (Said, Edward W., *Orientalism*, New York, Georges Borchardt, 1978.)
- ジョーンズ、アン ハドソン編『看護婦はどう見られてきたか—歴史、芸術、文学におけるイメージ』
 中島憲子監訳、時空出版、一九九七年 (Jones, Anne Hudson, *Images of Nurses Perspectives from
 History, Art, and Literature*, University of Pennsylvania Press, 1988.)
- 鈴木淳「第四章 重工業・鉱山業の資本蓄積」、石井寛治・原朗・武田晴人『日本経済史 二 産業
 革命期』東京大学出版会、二〇〇〇年、所収
- 関礼子『姉の力』ちくまライブラリー、一九九三年
- 関礼子『暗夜』の相互テクスト性再考』『国文学解釈と鑑賞』二〇〇三年五月号
- 高田知波「鉄道と女権—未来記型政治小説への一視点」『国語と国文学』一九九三年五月号
- 高橋政子『写真でみる日本近代看護の歴史 先駆者を訪ねて』医学書院、一九八四年五月
- 丹治愛「フィクションとしての他者 オリエンタリズムの構造」、小林康夫・船曳建夫編『知の論理』
 東京大学出版会、一九九五年、所収
- 坪内祐三「編集者大橋乙羽」、鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』思文閣出版、二〇〇一
 年、所収
- 永谷健『富豪の時代 実業エリートと近代日本』新曜社、二〇〇七年
- 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、一九九七年
- 中村生雄「観音信仰と日本のカミ—とくに「自然」と「身体」の視点から」、速水侑編『観音信仰
 事典』戎光祥出版、二〇〇〇年、所収

- 中村元、福永光司、田村芳朗、今野達、末木文美士『岩波 仏教辞典 第二版』岩波書店、一九八九年
- 中村元『広説 佛教語大辞典 上巻』東京書籍、二〇〇一年
- 成田龍一「新聞を読む樋口一葉」『文学』第一〇巻・第一号、一九九九年
- 野口碩「第三部 資料篇 花紅葉」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 平田由美『女性表現の明治史』岩波書店、一九九九年
- ベーコン、アリス『明治日本の女たち』矢口祐人、砂田恵理加訳、みずず書房、二〇〇三年 (Bacon, Alice Mabel, *Japanese girls and women, Revised and Enlarged Edition*, Boston / New York, Houghton, Mifflin and Company, 1902.)
- 前田愛『樋口一葉の世界』平凡社ライブラリー4、一九九三年
- 目崎徳衛『王朝のみやび』吉川弘文館、一九七八年
- 森山重雄「一葉の「やみ夜」と相馬事件」『日本文学』一九七一年四月
- モール、オットマール フォン『ドイツ貴族の明治宮廷記』金森誠也訳、新人物往来社、一九八八年 (Mohl, Otmar von, *Am Japanischen Hofe*, Berlin, 1904.)
- 彌永信美『観音変容譚 仏教神話学Ⅱ』法蔵館、二〇〇二年
- 山根賢吉「第二部 項目篇 萩の舎」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 若桑みどり『戦争がつくる女性像』ちくま学芸文庫、二〇〇〇年
- 若桑みどり『皇后の表象』筑摩書房、二〇〇一年

第三章

(原典)

- 樋口一葉『にこりえ』一八九五〔明治二八〕年(未定稿をふくむ)、『樋口一葉全集 第二巻』一九七四年、所収
- 関礼子校注『にこりえ』、関礼子、菅聡子校注『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四』岩波書店、二〇〇一年
- 山本洋編『近代文学初出翻刻 一 樋口一葉集』和泉書院、一九九四年
- 和田芳恵 解説、注釈『日本近代文学大系 第8巻 樋口一葉』角川書店、一九七〇年
- 石川天崖『東京學 復刻版』新泉社、一九八六〔明治一九〕年
- 井上哲次郎『勅語衍義』鈎玄堂蔵版、成美堂、文魁堂発兌、一八九一〔明治二四〕年
- 上原東一郎撰者兼発行人『東京買物獨案内』出版社不明、一八九〇〔明治二三〕年
- 梅暮里谷峨『傾城買二筋道』一七九八〔寛政一〇〕年、中野三敏・神保五彌・前田愛校注『日本古典文学全集四七 洒落本 滑稽本 人情本』一九七一年、小学館、所収
- 緒方仙之助「醜業婦に付きての所感」『婦人矯風雑誌』第十号、一八九四〔明治二七〕年八月
- 小石川区史編纂室『小石川区史』小石川区史編纂室刊、一九三五〔昭和一〇〕年
- 露伴・緑雨・學海・鷗外・篁村・紅葉・思軒「雲中語 にこりえ」『めさまし草 卷之十五』一八九七〔明治三〇〕年三月三一日
- 山東京伝『傾城買四十八手 真の手』一七九〇〔寛政二〕年、中野三敏・神保五彌・前田愛校注『日本古典文学全集 四七 洒落本 滑稽本 人情本』小学館、一九七一年、所収
- 塩田良平編『たけくらべ 他三編』旺文社文庫、一九六七年
- 蛇道子「花柳界の敵」『文芸倶楽部 定期増刊 花柳風俗誌』第拾壹卷第拾號、一九〇五〔明治三八〕年七月
- 正太夫「金剛杵」『めさまし草 まきの一』一八九六〔明治二九〕年一月

- 「社説・天下の大勢」『女學雜誌』第一八九号、一八八九（明治二二）年一月
「雑録 近頃の所謂酌婦」『女學雜誌』第三〇七号、一八九二（明治二五）年三月
「社説・家庭は一国なり」『女學雜誌』第三二四号、一八九二（明治二五）年八月
「社説・経済の道（中）（八） 経済と道徳とは双子なり」『女學雜誌』第三二五七号、一八九三（明治二六）年十一月
「一葉」『青年文』第三卷一号、一八九六（明治二九）年二月
ちとせ女史「女子の読むべき書物」『婦人新報』第二号、一八九五（明治二八）年三月
『東京朝日新聞』三面「雑報 小石川の実弟殺し」一八九二（明治二五）年九月一六日
『東京朝日新聞』三面「雑報 羽織地獄のお清」一八九三（明治二六）年二月七日
永井荷風『腕くらべ』一九一七（大正六）年、『荷風全集 第一二卷』岩波書店、一九九二年
西川社史編纂委員会『西川四百年史』非売品、出版社不明、一九七六年
長谷川時雨『長谷川時雨全集 第四卷』日本文林社、一九三二（昭和七）年
服部誠一『東京柳巷新史 卷之二』南伝馬町・叢書閣、日本橋・丸善商社書店他、一八八五（明治一八）年
林田亀太郎『芸者の研究』潮文閣、一九二九（昭和四）年
平出鏗二郎『東京風俗志 復刻版』（底本『東京風俗志』一八九九（明治三二）年）八坂書房、一九七二年
広津柳浪『今戸心中』一八九六（明治二九）年、『今戸心中他二篇』復刻版岩波文庫、一九五一年
『臨時増刊風俗画報 第三百四十八号 小石川之部 其一 新撰東京名所図会 第四十四編』東陽堂、一九〇六（明治三九）年
藤原清編『小石川区勢総覧』東京輿論新聞社、一九三四（昭和九）年
『平民新聞』一九〇四（明治三七）年二月二一日
作者未詳『部屋三味線 寛政年間刊、水野稔編』洒落本大成 第十九卷』中央公論社、一九八三年、所収
横山源之助『日本の下層社会』（底本『日本之下層社会』一八九九（明治三二）年、教文館発行）岩波文庫、一九四九年
魯庵生「一葉女史の『にぎり江』」『国民之友』第二二六号、一八九五（明治二八）年一〇月
（研究文献）
安藤良雄「三井物産会社商品別取扱高表」『日本の歴史 第二八 ブルジョワジーの群像』小学館、一九七六年
石原千秋「注釈という読み方」『日本近代文学』第六一集、一九九九年五月
磯田光一「丸山福山町と日清戦争——『にぎりえ』の近景と遠景」『国文学 解釈と教材の研究 特集 樋口一葉——明治東京のフォークロア』29（13）、一九八四年一〇月
出原隆俊「『にぎりえ』の（彼の人）」『文学』第五卷・第二号、一九九四年
伊藤幹治『家族国家観の人類学』ミネルヴァ書房、一九八二年
上野千鶴子「解説（三）『日本近代思想大系二十三 風俗 性』岩波書店、一九九〇年、所収
上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店、一九九四年
岡保生「お力の死——『にぎりえ』ノートから」『學苑』一九七〇年一月
落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、一九八九年
金井景子「『女』の来歴——『にぎりえ』論への視角」『媒』vol 5、一九八八年十二月
菅聡子『女が国家を裏切るとき——女学生、一葉、吉屋信子』岩波書店、二〇一一年

- 岸井良衛『女芸者の時代』青蛙房、一九七四年
 木村真佐幸『樋口一葉』桜楓社、一九八〇年
 紅野謙介、小森陽一、十川信介、山本芳明『十三夜』を讀む』『文学』季刊 第一卷 第一号、一九九〇年冬
 週刊朝日編『続・値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社、一九八一年
 関良一「注釈のあり方」『樋口一葉 考証と試論』有精堂出版、一九七〇年
 関礼子『姉の力 樋口一葉』筑摩書房、一九九三年
 関礼子「記号化されざるもの」『にこりえ』『語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』新曜社、一九九七年
 高田知波「声というメディア——『にこりえ』論の前提のために——」、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉』おうふう、一九九六年、所収
 高田知波「注釈 一葉日記（明治二十八年五月—明治二十九年一月）」『文学』季刊 第10巻・第1号、一九九九年冬
 田中優子「近世の家族像」、上野千鶴子・鶴見俊輔・中井久夫・中村達也・宮田登・山田太一編集『変貌する家族2 セクシュアリティと家族』岩波書店、一九九一年、所収
 塚田満江『誤解と偏見—樋口一葉の文学』中央公論事業出版、一九八七年
 中野博雄『校注 樋口一葉』双文社出版、一九八二年
 中丸宣明「一葉讀書目録」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
 中山清美「新聞小説としての『うつつせみ』」、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉』おうふう、二〇〇二年
 成田龍一「新聞を讀む樋口一葉」『文学』第一〇巻・第一号、一九九九年冬
 西川祐子「性別のあるテキスト—一葉と読者」『文学 一葉特集』岩波書店、一九八五年
 西川祐子『近代国家と家族モデル』吉川弘文館、二〇〇〇年
 蓮實重彦「樋口一葉の『にこりえ』—「恩寵」の時間と「歴史」の時間」『文学』第8巻・第2号、一九九七年春
 平田由美「物語の女・女の物語」、脇田晴子・S・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史 下——主体と表現 仕事と生活』東京大学出版会、一九九五年、所収
 藤目ゆき『性の歴史学』不二出版、一九九九年
 本田康雄『新聞小説の誕生』平凡社選書183、一九九八年
 前田愛「樋口一葉の文学風土」『前田愛著作集第三巻 樋口一葉の世界』筑摩書房、一九八九年
 前田愛「文学テキスト入門」『前田愛著作集第六巻 テキストのユートピア』筑摩書房、一九九〇年
 松坂俊夫『増補改訂 樋口一葉研究』教育出版センター、一九七〇年
 水野稔『山東京伝年譜稿』ぺりかん社、一九九一年
 山田有策「共同討議 樋口一葉の作品を讀む にこりえ」『国文学』一九八四年一〇月
 山本洋「『にこりえ』の背景」『文林』第一二号、一九七八年三月
 山本洋「『にこりえ』の丸木橋」『国語国文学』第四七巻・第四号、一九七八年四月
 山本洋「『工場』「草津の湯」考——「にこりえ」注解のうち——」『高野山大学国語国文』一九八二年三月
 山本洋「第一部 作品篇 『にこりえ』『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
 吉見周子『売娼の社会史』雄山閣出版、一九八四年
 吉村武夫『ふとん綿の歴史』ふとん綿歴史研究会、出版社不明、一九六六年

第四章

(原典)

- 樋口一葉『わかれ道』一八九六〔明治二九〕年(未定稿をふくむ)、『樋口一葉全集 第二卷』所収
樋口一葉『よもぎふにつ記』一八九三〔明治二六〕年、『塵の中日記』表書・一八九四〔明治二七〕
年、『日記ちりの中』一八九四〔明治二七〕年、『水の上』一八九四〔明治二七〕年、『ミつのうへ』
一八九五〔明治二八〕年、以上『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収
関礼子校註『わかれ道』、関礼子、菅聡子校註『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四』
岩波書店、二〇〇一年、所収
石傳わか子『刷毛彩色』『文藝倶楽部臨時増刊 閨秀小説』第一卷一二編、一八九五〔明治二八〕年
一二月
泉鏡花『琵琶傳』『国民之友 附録 藻鹽草』第二七七号、一八九六〔明治二九〕年一月
上田敏「一葉女史」『中央公論』第廿二年第六号(第二百十九号)、一九〇七〔明治四〇〕年六月一日
上田敏「天才肌の人」『国民新聞』第六千参號、一九〇八〔明治四一〕年一月二三日
江見水蔭『炭焼の煙』『国民之友 附録 藻鹽草』第二七七号、一八九六〔明治二九〕年一月
「新日本の地盤 其二 新夫婦」『家庭雜誌』四号、一八九二〔明治二五〕年一月二十五日
花圃『八重桜』一八九〇〔明治二三〕年、塩田良平編『明治文學全集 81 明治女流文學集(一)』
筑摩書房、一九六六年、所収
花圃女史『萩桔梗』『文藝倶楽部臨時増刊 閨秀小説』第一卷一二編、一八九五〔明治二八〕年一二
月
花圃『空行月』『国民之友 附録 藻鹽草』第三〇九号、一八九六〔明治二九〕年
帰休庵『鶉翻搔』『めさまし草 まきの一』一八九六〔明治二九〕年一月
「一葉」『青年文』第三卷一号、一八九六〔明治二九〕年二月
『わかれ道』『青年文』第三卷第一号、一八九六〔明治二九〕年二月
警視庁編「退官終身恩給及退職給助年金」『警視庁事務年表』、警視庁刊、一八九一〔明治二四〕年
『広辞苑 第五版』岩波書店、一九九八年
「◎朝鮮事件に対する高島嘉右衛門氏の易断」『國民新聞』第壹千参百参拾参號、一八九四〔明治二
七〕年六月二七日
湖東小史(旧彦根藩土石黒務)『世帯論』出版社未詳、明治二〇年七月以降頃刊、田中ちた子、田中
初夫編纂『家政学文献集成 続明治期 第三冊』渡辺書店、一九七〇年、所収
後藤宙外『ひたごゝろ』『国民之友 附録 藻鹽草』第二七七号、一八九六〔明治二九〕年一月
阪谷素「○妾説ノ疑」『明六雜誌』第三十二號、一八七四〔明治七〕年三月
佐多稲子『年譜の行間』中央公論社、一九八三年
塩田良平編『明治文學全集 八一 明治女流文學集(一)』筑摩書房、一九六六年
司馬遼太郎『坂の上の雲(八)』「あとがき(一)」文春文庫、一九九九年
島田三郎「序」、横山源之助『日本の下層社会』(底本『日本之下層社会』一八九九〔明治三二〕年、
教文館発行)岩波文庫、一九四九年、所収
「社説・歳暮の回顧及警戒」『女學雜誌』第四一七号、一八九五〔明治二八〕年一月二五日
「第一回農商工康心会議々事速記録 第七諮問案 職工ノ取締及保護ニ関スル件」、明治文化資料叢
書刊行会編『明治文化資料叢書 第一卷 産業編』風間書房、一九六一年、所収
田口卯吉「世間細民の友なきか」『東京經濟雜誌』第九三五号、一八九八〔明治三二〕年七月九日、
『鼎軒田口卯吉全集 第四卷 經濟 上』鼎軒田口卯吉全集刊行会、一九二八〔昭和三年〕、所収
田口卯吉「慈善家は貧民の職を得るを妨害すべからず」『東京經濟雜誌』第一〇九三号、一九〇一〔明

- 治三四)年八月一〇日、『鼎軒田口卯吉全集 第四卷 經濟 上』鼎軒田口卯吉全集刊行会、一九二八(昭和三年)、所収
- 田口卯吉「労働時間の制限と夜業廃止」『東京經濟雜誌』一〇九七号、一九〇一(明治三四)年九月七日、『鼎軒田口卯吉全集 第四卷 經濟 上』鼎軒田口卯吉全集刊行会、一九二八(昭和三年)、所収
- 『東京朝日新聞』「眞術 広告」一八九四(明治二七)年二月二一日
- 「賑恤は自由競争の敵なり」『東京經濟雜誌』一三五号、一八八二(明治一五)年一〇月二八日
- 「衣食足而知礼節」『東京經濟雜誌』第二六七号、一八八五(明治一八)年五月三〇日
- 「社会の自療性」『東京經濟雜誌』第三五七号、一八八七(明治二〇)年三月五日
- 「我邦の職人社会」『東京經濟雜誌』一八九〇(明治二三)年九月六日
- 「貧民の統計」『東京經濟雜誌』第二九卷七二六号、一八九四(明治二七)年六月一九日
- 「政治家は貧民の惨状を無視すべからず」『東京經濟雜誌』第二九卷七三一号、一八九四(明治二七)年六月二三日
- 「物価騰貴の結果」『東京經濟雜誌』第二九卷八五五号、一八九六(明治二九)年二月一九日
- 中島湘煙『一沈一浮』『文藝俱樂部 臨時増刊 第二閨秀小説』第三卷・第二編、一八九七(明治三〇)年一月
- 農商務省商工局『職工事情』「燐寸職工事情」出版社不明、一九〇三(明治三六)年
- 農林省經濟更生部『興業意見 經濟更生計画資料 第十九號』出版社不明、一九三三(昭和八)年
- 長谷川時雨「近代美人伝」『長谷川時雨全集 第三卷』日本文林社、一九四二(昭和一七)年、『長谷川時雨全集 第三卷』復刻版、不二出版、一九九三年
- 林芙美子『放浪記 第一部』(初出『女人芸術』一九二八(昭和三)年)『林芙美子全集 第一卷』文泉堂出版、一九七七年
- 樋口悦編『一葉に与へた手紙』今日の問題社、一九四三(昭和一八)年
- 広津柳浪『雨』一九〇二(明治三五)年、『今戸心中他二編』復刻版岩波文庫、一九五一年
- 広津柳浪『妾』一九〇三(明治三六)年、『柳浪叢書 五編』博文館、一九一〇(明治四三)年
- 星野天知『のろひの木』『国民之友 附録 藻鹽草』第二七七号、一八九六(明治二九)年一月
- 松原岩五郎『最暗黒之東京』岩波文庫、一九八八年
- 深雪女史『うきよのあらし』『文藝俱樂部』第二卷第四編、一八九六(明治二九年)年
- 森鷗外『雁』一九一一(明治四四)―一九二二(明治四五)年、『鷗外全集 第八卷』岩波書店、一九七二年
- 横山源之助「都市の細民と地方の細民」『毎日新聞』一八九五(明治二八)年一〇月二七日、立花雄一編『横山源之助全集 第一卷』(社会思想社、二〇〇一年)
- 横山源之助「対談 佐久間貞一君」一八九八(明治三一)年、立花雄一編『横山源之助全集 第一卷』(社会思想社、二〇〇一年)
- 横山源之助『日本の下層社会』(底本『日本之下層社会』一八九九(明治三二)年、教文館発行)岩波文庫、一九四九年
- 横山源之助『明治富豪史』一九一〇(明治四三)年、『明治文學全集 96 明治記録文学集』筑摩書房、一九六七年、所収

- 井上章一『美人論』リブレポート、一九九〇年
- 井上琢智『黎明期日本の経済思想』日本評論社、二〇〇六年
- 上野千鶴子『家長制と資本制』岩波書店、一九九〇年
- 上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店、一九九四年
- 宇野俊一『日本の歴史 第二六巻 日清・日露』小学館、一九七六年
- 大濱徹也『社会事業と宗教』『岩波講座 日本通史 第一七巻 近代二』岩波書店、一九九四年、所収
- 荻野喜弘『第五章 国家権力と労働世界』、石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 二 産業革命期』東京大学出版会、二〇〇〇年、所収
- 春日豊『工場の出現』『岩波講座 日本通史 第一七巻 近代 二』岩波書店、一九九四年、所収
- 金井景子『第二部 項目篇 妾』『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 金津日出美『明治初年の「妾」論議の再検討―「近代的な一夫一婦制」論をめぐる―』、『日本家族史論集 五 家族の諸相』吉川弘文館、二〇〇二年、所収
- 神山恒雄『第二章 財政政策と金融構造』、石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 二 産業革命期』東京大学出版会、二〇〇〇年、所収
- 菅聡子『一葉の〈わかれ道〉―御出世といふは女に限りて―』『国語と国文学』一九九三年二月号
- 菅聡子『女が国家を裏切るとき―女学生、一葉、吉屋信子』岩波書店、二〇一二年
- 木村真佐幸『一葉の中の「俠気」―『国文学解釈と鑑賞―紅葉・露伴・一葉特集―』一九七八年五月
- 木村真佐幸『第一部 作品篇 『わかれ道』』『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 後藤積『作家としての『わかれ道』』『改訂増補 商人としての樋口一葉』千秋社、一九八七年
- 後藤積・山田有策『第三部 資料篇 年譜』『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年、所収
- 小森陽一『共同討議 樋口一葉の作品を読む・わかれ道』『国文学』一九八四年、一〇月
- 佐伯順子『色と愛の比較文化史』一九九八年、岩波書店
- テッサ・モリス・鈴木『日本の経済思想』岩波書店、一九九一年
- 鈴木博之『日本の近代 一〇 都市へ』中央公論新社、一九九九年
- 関礼子『貧者の宵―『わかれ道』』『語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』新曜社、一九九七年
- 千本暁子『日本における性別役割分業の形成―家計調査をとおして―』、『制度としての〈女〉―性・産・家族の比較社会史』平凡社、一九九〇年、所収
- 大門正克『第六章 農村社会と都市社会』、石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 二 産業革命期』東京大学出版会、二〇〇〇年、所収
- 高田知波『代表作ガイド わかれ道』、岩橋邦枝、他『群像日本の作家 三 樋口一葉』小学館、一九九二年、所収
- 高田知波『笑う女と泣く少年―『わかれ道』の位相』『樋口一葉論への射程』双文社出版、一九九七年
- 高田知波『第二部 項目篇 樋口泉太郎』『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 高田知波『第二部 項目篇 小学校制度』『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 田上貞一郎『第二部 項目篇 荷車請負業組合』『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 高柳真三『明治前期家族法の新装』有斐閣、一九八七年
- 立花雄一『再考横山源之助と米騒動』『大原社会問題研究所雑誌』No 四九九、二〇〇〇年六月
- 田中彰『日本の歴史 第二四巻 明治維新』小学館、一九七六年
- 田中優子『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』集英社新書、二〇〇四年
- ドーフアン、セシル『独身の女性たち』志賀亮一訳、ジョルジュ・デュビイ、ミシェル・ペロー監

- 修『女の歴史IV 十九世紀』藤原書店、一九九六年、所収 (Dauphin, Cécil, « La Femme Seule », Georges Duby and Michelle Perrot (dir.), *Histoire des Femmes en Occident*, t. 4 : XIX^e Siècle, Paris, Plon, 1991.)
- 戸松泉「交差した〈時間〉の意味―「わかれ道」の行方―」、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉II』おうふう、一九九八年
- 中村政則『日本の歴史 第二九巻 労働者と農民』小学館、一九七六年
- 名武なつ紀「近現代の日本における市街地政策と土地所有」、関西学院大学『経済系』第二二三集、二〇〇五年四月、インターネット公開資料
- <http://library.kanto.gakuin.ac.jp/e-Lib/bodyview.do?bodyid=N110000523&elmid=Body&lfname=5natake.html> (二〇一〇年四月、閲覧)
- 成田龍一「帝都東京 二 文明の首都／首都の暗黒」、『岩波講座日本通史 第一六巻 近代一』、岩波書店、一九九四年、所収
- 野口碩「第二部 項目篇 樋口則義」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 野口碩「第三部 資料篇 キイ・ワード事典」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 野邑理栄子『陸軍幼年学校体制の研究 エリート養成と軍事・教育・政治』吉川弘文館、二〇〇六年
- 旗手勲「日本資本主義の形成と不動産業」『国際連合大学 人間と社会の開発プログラム研究報告 技術の移転・変容・開発―日本の経験 プロジェクト 技術と都市社会研究部会』国際連合大学、一九八一年、インターネット公開資料
- http://d-arch.ide.go.jp/je_archive/society/wp_unu_jpn51.html (二〇一〇年四月、閲覧)
- 林葉子「第二十四章 日清戦争前後の『家庭雑誌』―英雄伝を物語る母／膨張する国家」、西田毅編『民友社とその時代』ミネルヴァ書房、二〇〇三年、所収
- 藤井貞和「共同討議 樋口一葉の作品を読む・わかれ道」『国文学』一九八四年一〇月
- 藤井淑禎「わかれ道」『国文学解釈と鑑賞』一九八〇年、一月号
- 堀経夫『増訂版 明治経済思想史』日本経済評論社、一九九一年
- 前田愛「暗喩としてのスラム」『近代日本の文学空間―歴史・ことば・状況』新曜社、一九八三年
- 前田愛編『新潮日本文学アルバム 三 樋口一葉』新潮社、一九八五年
- 前田愛『樋口一葉の世界』平凡社ライブラリー4、一九九三年
- 増田廣實『交通・運輸の発達と技術革新・歴史的考察』国際連合大学、一九八六年、日本貿易振興機構(ジエトロ)アジア経済研究所デジタルアーカイブス「日本の経験」を伝える―技術の移転・変容・開発、インターネット公開資料
- http://d-arch.ide.go.jp/je_archive/society/book_unu_jpe6_d03_01.html (二〇一〇年四月、閲覧)
- 三宅明正『技術革新と女性労働』国際連合大学、一九八五年、日本貿易振興機構(ジエトロ)アジア経済研究所デジタルアーカイブス「日本の経験」を伝える―技術の移転・変容・開発、インターネット公開資料
- http://d-arch.ide.go.jp/je_archive/society/book_unu_jpe9_d04.html (二〇一〇年四月、閲覧)
- 持田鋼一郎『高島易断を創った男』新潮新書、二〇〇三年
- 持田鋼一郎「高島嘉右衛門と「高島易断」明治の政局・横浜・占い」、有隣堂出版目録『有隣』第四六六号、二〇〇六年、所収
- http://www.yurindo.co.jp/static/yurin/back/yurin_466/yurin4.html (二〇一〇年四月、閲覧)
- 森下公夫「明治期に於る立身出世主義の系譜―マスコシの果たした役割―」、『福地重孝先生還暦記念近代日本形成過程の研究』雄山閣出版、一九七八年、所収
- 藪禎子『透谷・藤村・一葉』明治書院、一九九一年

山崎眞紀子「すれ違う物語―『わかれ道』論」、新・フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読みなおす』学林書林、一九九四年、所収
山田博光「明治における貧民ルポルタージュの系譜」『日本文学』一九六三年一月号
リオタール、ジャン フランソワ『ポスト・モダンの条件 知・社会・言語ゲーム』小林康夫訳、書肆風の薔薇、一九八六年 (Lyotard, Jean François, *La condition postmoderne*, Paris, Minuit, 1979.)
ロールズ、ジョン『正義論』川本隆史、福岡聡、神島裕訳、紀伊國屋書店、二〇一〇年 (Rawls, John, *A Theory of Justice*, Revised Edition, Massachusetts, Harvard University Press, 1999.)

第五章

(原典)

- 樋口一葉『わかれから』一八九六〔明治二九〕年(未定稿をふくむ)、『樋口一葉全集 第二卷』所収
樋口一葉『塵之中』一八九三〔明治二六〕年、「みづの上日記」一八九六〔明治二九〕年、『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収
前田愛編『全集樋口一葉 第三卷 日記編』小学館版、一九七九年
関礼子校注『わかれから』、関礼子、菅聡子校註『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四』岩波書店、二〇〇一年、所収
内田魯庵「三十年前の島田沼南」『おもひ出す人々』(一九二五〔大正一五〕年)所収、『内田魯庵全集』ゆまに書房、一九八七年
大橋新太郎編輯『訂正増補 華族名鑑 全』博文館、一八九四〔明治二七〕年
小野田翠雨「現代名士の演説振(抄)―速記者の見たる」(底本『現代名士の演説振』博文館、一九〇八〔明治四一〕年)、『明治文学全集 96 明治記録文学集』筑摩書房、一九六七年、所収
国分操子『日用宝鑑 貴女の葉 上』大倉書店、一八九五〔明治二八〕年
島田三郎「足尾銅山鉍毒事件」『明治文学全集 91 明治新聞人文学集』筑摩書房、一九七九年、所収
収《以下、『明治文学全集 91』とのみ記す》
島田三郎「慈善事業の方針と国民の思想」『明治文学全集 91』所収
島田三郎「公娼の非義を論ず」『明治文学全集 91』所収
島田三郎「横浜市民諸君に告ぐ」『明治文学全集 91』所収
島田三郎「愛読者諸君に告ぐ」『明治文学全集 91』所収
『われから』、『青年文』第参卷第五號、一八九六〔明治二九〕年六月一〇日
「一葉女史の『われから』」『太陽』第貳卷第拾貳號(二〇二)、一八九六〔明治二九〕年六月五日
脱天子・登仙坊・鐘礼舎「三人冗語 われから」『めざまし草 卷の五』一八九六〔明治二九〕年五月二四日
東京市役所編『東京市史稿 遊園篇第五』復刻版、臨川書店、一九七四年
中野了随『東京名所図會』小川尚栄堂、一八九〇〔明治二三〕年
西周『偶評 西先生論集』土居光華(出版)、一八八〇〔明治一三〕年
『日本紳士録 第一版』交詢社、一八八九〔明治二二〕年
『日本紳士録 第三版』交詢社、一八九六〔明治二九〕年
花下眠叟「われからの評を讀みて」『太陽』第貳卷第拾六號(九八)、一八九六〔明治二九〕年八月
『臨時増刊 風俗画報 第一四五號 芝公園之部 新撰東京名所図會 第七編』東陽堂、一八九七〔明治三〇〕年
「われから」『文學界』四十一號、一八九六〔明治二九〕年五月三〇日
「ホテルの懇親會」『毎日新聞』第一萬百八十三號、一九〇三〔明治三六〕年十一月一日

「時文 ◎われから」『明治評論』第五卷第七号、一八九六（明治二九）年六月一日
宮武外骨「新聞雑誌の愛読者」『滑稽新聞』第一四三号、一九〇七（明治四〇）年七月二〇日、吉野
孝雄監修『宮武外骨此中にあり 一一一 滑稽新聞』ゆまに書房、一九九四年、所収
『郵便報知新聞』一八七九（明治一二）年四月二八日
山路愛山『現代金権史』（初出『商工世界太平洋』一九〇七（明治四〇）年三―十二月）、大久保利謙
編『明治文學全集』35 山路愛山集』筑摩書房、一九六五年、所収
横山源之助『明治富豪史』一九一〇（明治四三）年、『明治文學全集』96 明治記録文學集』筑摩書
房、一九六七年、所収

（研究文献）

青木一男『われから』―人妻物語への試み』『国文学解釈と鑑賞』二〇〇三年五月号
朝倉治彦「解説」、島田三郎『幕末維新史料叢書 一 開国始末』（底本『開国始末』興論社、一八八
八（明治二一）年）人物往来社、一九六八年、所収
池野藤兵衛『料亭 東京芝・紅葉館―紅葉館を巡る人々―』砂書房、一九九四年
宇野俊一『日本の歴史 第二六卷 日清・日露』小学館、一九七六年
桐浴邦夫「東京芝公園の紅葉館について 明治期の和風社交施設の研究」『日本建築学界計画系論文
集』第五〇七号、一九九八年五月、インターネット公開資料
[http://ci.nii.ac.jp/els/110004655083.pdf?id=AR10007379888&type=pdf&lang=jp&host=cinii&ord
er_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1361025141&cp=\(110111年1月、閲覧\)](http://ci.nii.ac.jp/els/110004655083.pdf?id=AR10007379888&type=pdf&lang=jp&host=cinii&ord er_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1361025141&cp=(110111年1月、閲覧))
小森陽一「囚われた言葉／さまよい出す言葉」『文体としての物語』筑摩書房、一九八八年
鈴木博之『日本の近代 一〇 都市へ』中央公論新社、一九九九年
関礼子「物語としての『われから』―『われから』語る女たちの時代 一葉と明治女性表現」新
曜社、一九九七年
関礼子「女相撲・心中・狂気への想像力―一葉的エクリチュールの場を求めて」『国文学解釈と教
材の研究』39(11)、一九九四年一〇月
高田知波「距離の物語―『大つゝもり』への一視点」『樋口一葉論の射程』双文社出版、一九九七
年
高橋昌郎編「解題」「年譜」（島田三郎）『明治文學全集』91 明治新聞人文学集』筑摩書房、一九七
九年、所収
竹内洋「立身出世主義 近代日本のロマンと欲望」日本放送出版協会、一九九七年
坪内祐三「編集者大橋乙羽」、鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』思文閣出版、二〇〇一
年、所収
戸松泉『われから』試論―〈小説〉的世界の顕現』『国文学解釈と鑑賞』一九九五年六月号
永井秀夫『日本の歴史 第二五卷 自由民権』小学館、一九七六年
永谷健『富豪の時代 実業エリートと近代日本』新曜社、二〇〇七年
中丸宣明「第三部 資料篇 樋口則義旧蔵図書」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版、一九九七年
中村光夫『明治文学史』筑摩書房、一九六三年
西川祐子「第二部 資料篇 島田政子」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年、所収
平田由美『女性表現の明治史―樋口一葉以前』岩波書店、一九九九年
前田愛「露伴における立身出世主義」『近代日本の文学空間―歴史・ことば・状況』新曜社、一九八
三年

前田愛「正統と伝統―近代日本文学形成の条件―」『前田愛著作集第四巻 幻景の明治』筑摩書房、一九八九年
水野稔「後期草双紙の庶民教化」『江戸小説論叢』中央公論社、一九七六年
安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店、一九九二年
藪禎子『われから』論『透谷・藤村・一葉』明治書院、一九九一年
藪禎子「第一部 作品篇 『われから』」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年、所収
山田有策『われから』―与四郎の復讐―『国文学解釈と鑑賞』一九九五年六月号
山根賢吉「第二部 項目篇 萩の舎」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
渡辺澄子「一葉文学における新たな飛躍―『われから』論、新・フェミニズム批評の会編『樋口一葉をよみなおす』学林書林、一九九四年

第六章

(原典)

樋口一葉、前掲『にこりえ』、『ゆく雲』、『うもれ木』、『暗夜』（未定稿も含む）、『樋口一葉全集 第一巻』『樋口一葉全集 第二巻』所収
樋口一葉『につ記』『よもきふにつ記』一八九二（明治二五）年、『ミつの上日記』『みづの上日記』一八九六（明治二九）年、『樋口一葉全集 第三巻（上）』所収
樋口一葉「雑記7 やたらつけ」一八九二（明治二五）年ころ、『樋口一葉全集 第三巻（上）』所収
菅聡子校注『暗夜』、関礼子、菅聡子校註『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四』岩波書店、二〇〇一年、所収
緒方仙之助「醜業婦に付きての所感」『婦人矯風雑誌』第一〇号、一八九四（明治二七）年八月
北村透谷「徳川氏時代の平民的理想」、『明治文学全集 29 北村透谷集』筑摩書房、一九七六年、所収
北村透谷「三日幻境」、『明治文学全集 29 筑摩書房、一九七六年、所収
北村透谷「文学史骨」、『明治文学全集 29 筑摩書房、一九七六年、所収
北村透谷「他界に関する観念」、『明治文学全集 29 筑摩書房、一九七六年、所収
北村透谷「石坂ミナ宛て書簡草稿」、『明治文学全集 29 筑摩書房、一九七六年、所収
九鬼周造『いき』の構造 他二編（底本『いき』の構造）岩波書店、一九三〇年）岩波文庫、一九七九年
小島烏水「一葉女史」『文庫』一八九六（明治二九）年一月、『小島烏水全集 第十二巻』大修館書店、一九八七年、所収
澁澤榮一『青淵百話 坤』同文館、一九二二（明治四五）年
『鰻旦那』と『にこりえ』『青年文』第二巻五号、一八九五（明治二八）年一二月
田岡嶺雲「詩人と厭世観」『日本人』二号、一八九五（明治二八）年七月二〇日、西田勝解説『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』（底本、『第二嶺雲揺曳』新聲社、一八九九年）日本図書センター、一九九二年、所収
田岡嶺雲「天才と狂熱」『青年文』第二巻三三、一八九五（明治二八）年一〇月一〇日、西田勝解説『近代文藝評論叢書 30 嶺雲揺曳』（底本、『嶺雲揺曳』新聲社、一八九九（明治三二）年）日本図書センター、一九九二年、所収
田岡嶺雲「神来と狂熱」『青年文』第二巻五号、一八九五（明治二八）年一二月一〇日、『嶺雲揺曳』所収
田岡嶺雲「ヒューマニチー」『青年文』第二巻六号、一八九六（明治二九）年一月一〇日、『嶺雲揺曳』

所収

田岡嶺雲「京を去るの辞」『日本人』第二三号、一八九六〔明治二九〕年六月五日、『嶺雲揺曳』所収
田岡嶺雲「人才の閉塞」『日本人』第二六号、一八九六〔明治二九〕年九月五日、『嶺雲揺曳』所収
田岡嶺雲「写実と理想」『青年文』第二卷五号、一八九五〔明治二九〕年一月一日、『嶺雲揺曳』所収

田岡嶺雲「多感の詩人故中野逍遙」『日本人』一一、一二号、一八九五〔明治二九〕年一月五日、二〇日、『第一嶺雲揺曳』所収

田岡嶺雲「新春の第一喝」『日本人』第三四号、一八九七〔明治三〇〕年一月五日、『嶺雲揺曳』所収
田岡嶺雲「詩人の狂熱」『文庫』第五卷第五号附録『青年文』一八九七〔明治三〇〕年五月二〇日、『田岡嶺雲全集 第二卷』法政大学出版会、一八九七年、所収

田岡嶺雲「社会問題」『文庫』第九卷六号、一八九八〔明治三二〕年三月二〇日、『嶺雲揺曳』所収
田岡嶺雲「盛代の賜歟」『新聲』一編一号、一八九九〔明治三二〕年二月二五日、『嶺雲揺曳』所収
ちとせ女史「女子の読むべき書物」『婦人新報』第二号、一八九五〔明治二八〕年三月二八日

坪内逍遙『小説神髓 上巻』「小説の主眼」『小説の変遷』、『小説神髓 下巻』「主人公の設置」、『明治文學全集 16 坪内逍遙集』筑摩書房、一九六九年、所収

坪内逍遙「歴史小説の尊厳」『読売新聞』一八九五〔明治二八〕年一月二八日、『明治文學全集 16 坪内逍遙集』筑摩書房、一九六九年、所収

坪内逍遙「新作家某の親戚より所謂批評家連中に与へて「詩人小説家特待法」を請求する書」『太陽』第三卷第一号、一八九七〔明治三〇〕年一月五日

戸川秋骨『変調論』、『明治文學全集 32 女學雜誌・文學界集』筑摩書房、一九七三年、所収
永井荷風『つゆのあとさき』一九三一〔昭和六〕年、『荷風全集 第一六卷』岩波書店、一九九四年、所収

星野天知『侠客伝』、『明治文學全集 32 女學雜誌・文學界集』筑摩書房、一九七三年、所収

横山源之助『日本の下層社会』（底本『日本之下層社会』一八九九〔明治三二〕年、教文館発行）岩波文庫、一九四九年

横山源之助『明治富豪史』一九一〇〔明治四三〕年、『明治文學全集 96 明治記録文学集』筑摩書房、一九六七年、所収

吉田松陰「狂愚」（松陰詩稿 西征残稿）一八五七〔安政四〕年、山口県教育会編纂『吉田松陰全集 第六卷』大和書房、一九七三年、所収

吉田松陰「將及私言」一八五三〔嘉永六〕年、山口県教育会編纂『吉田松陰全集 第二卷』（大和書房、一九七三）年、所収、

吉田松陰『李氏焚書抄』一八五九〔安政六〕年、京都大学附属図書館尊攘堂所蔵史料、京都大学附属図書館維新資料公開データベース

http://edb.kuib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/ishin/kanren/sonjo_index_hunsho.html（二〇一二年二月、閲覧）

李卓吾（李贄）、増井経夫訳『焚書』平凡社、一九六九年

露伴・緑雨・學海・鷗外・篁村・紅葉・思軒「雲中語 に「こりえ」『めさまし草 卷之十五』一八九七〔明治三〇〕年三月三十一日

（研究文献）

愛知峰子「「こりえ」にわたる〈丸木橋〉」、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉』おうふう、一九九六年、所収

- 安藤良雄『日本の歴史 28 ブルジョワジーの群像』小学館、一九七六年
- 石井良助「近世賤民に関する若干の考察」『近世関東の被差別部落』明石書店、一九七七年
- 石丸久「『文學界』運動の性格(抄)」『明治文學全集 32 女學雜誌・文學界』筑摩書房、一九七三年、所収
- 色川大吉『色川大吉著作集 第一卷 新編 明治精神史』筑摩書房、一九九五年
- 大井田義彰『『文學界』の中の一葉―「大つごもり」と〈俠〉、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉目』おうふう、二〇〇二年、所収
- 加藤周一『日本文学史序説 下』ちくま学芸文庫、一九九九年
- 菅聡子『女が国家を裏切るとき―女学生、一葉、吉屋信子』岩波書店、二〇一一年
- 後藤積『われから』にみる発想の混乱』『改訂増補 商人としての樋口一葉』千秋社、一九八七年
- 笹淵友一『『文學界』とその時代』序説(抄)―『明治文學全集 32 女學雜誌・文學界』筑摩書房、一九七三年、所収
- 芝原拓自『日本の歴史 第二三卷 開国』小学館、一九七五年
- 鈴木博之『日本の近代 都市へ』中央公論新社、一九九九年
- 鈴木啓子「第二部 項目篇 砲兵工廠」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 高島俊男『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』大修館書店、一九九一年
- 高柳金芳『乞胸と江戸の大道芸』柏書房、一九八一年
- 田中彰『日本の歴史 第24卷 明治維新』小学館、一九七六年
- 田中優子『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』集英社新書、二〇〇四年
- 中尾健二『江戸社会と弾左衛門』解放出版社、一九九二年
- 永井秀夫『日本の歴史 第25卷 自由民権』小学館、一九七六年
- 永谷健『富豪の時代 実業エリートと近代日本』新曜社、二〇〇七年
- 中丸宣明「一葉読書目録」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 中村光夫『日本文学史』筑摩書房、一九六三年
- 中村幸彦『通俗忠義水滸伝』解題、中村幸彦編『近世白話小説翻訳集 第十一卷』汲古書院、一九八六年
- 成田龍一「新聞を読む樋口一葉」『文学』第一〇巻・第一号、一九九九年冬
- 西田勝「田岡嶺雲」、小田切進編『日本近代文学大事典 机上版』講談社、一九八四年、所収
- 西田勝「解題 詩人の狂熱」、西田勝編『田岡嶺雲全集 第二卷』法政大学出版会、一九八七、所収
- 野口碩「第三部 資料篇 キイワード事典 丸木橋」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 橋川文三「忠誠意識の変容」『近代日本の忠誠の問題』『橋川文三著作集 2』筑摩書房、一九八五年
- 橋川文三「明治政治思想史の一断面」『橋川文三著作集 3』筑摩書房、一九八五年
- 兵藤裕己『〈声〉の国民国家・日本』日本放送出版協会、二〇〇〇年
- 平田由美『女性表現の明治史』第2章 三「小説の時代」の女の読み物』岩波書店、一九九九年
- 藤田省三「書目撰定理由―松陰の精神的意味に関する一考察―」、吉田常吉・藤田省三・西田太一郎校注『日本思想体系³⁴ 吉田松陰』岩波書店、一九七八年、所収
- 前田愛「幕末維新の文体5 吉田松陰『講孟余話』――無私の文体――」『近代日本の文学空間―歴史・ことば・状況』新曜社、一九八三年《以降、『近代日本の文学空間』とのみ記す》
- 前田愛「露伴における立身出世主義」『近代日本の文学空間』新曜社、一九八三年
- 前田愛「明治歴史文学の原像」『近代日本の文学空間』新曜社、一九八三年
- 前田愛「中野逍遙」『近代日本の文学空間』新曜社、一九八三年
- 前田愛「小説神髓のリアリズムとは何か」『近代日本の文学空間』新曜社、一九八三年

- 前田愛「近世から近代へ——愛山・透谷の文学史をめぐって」『前田愛著作集第一巻 幕末・維新期の文学 成島柳北』筑摩書房、一九八九年《以降》、『前田愛著作集第一巻』とのみ記す》
- 前田愛「松陰における「狂愚」——下田踏海まで」『前田愛著作集第一巻』筑摩書房、一九八九年
- 前田愛「山陽と中斎——危機の予覚者たち」『前田愛著作集第一巻』筑摩書房、一九八九年
- 前田愛「正統と伝統——近代日本文学形成の条件」『前田愛著作集第四巻 幻景の明治』筑摩書房、一九八九年《以降》、『前田愛著作集第四巻』とのみ記す》
- 前田愛「馬琴と透谷——「侠」をめぐって」『前田愛著作集第四巻』筑摩書房、一九八九年
- 前田愛「維新」か「御一新」——明治維新と近代文学」『前田愛著作集第四巻』筑摩書房、一九八九年
- 前田愛「樋口一葉の世界」平凡社ライブラリー4、一九九三年
- 前田愛「明治立身出世主義の系譜」『近代読者の成立』岩波現代文庫、二〇〇一年
- 前田愛「鷗外の中国小説趣味」『近代読者の成立』岩波現代文庫、二〇〇一年
- 増井経夫「六 明代社会の過熱と思想展開 明代社会の嫡子李卓吾」『世界の歴史 第一巻 中華帝国』講談社、一九七七年
- 増田五良『文學界記傳』国書刊行会、一九七四年
- 丸山眞男『忠誠と反逆 転形期日本の精神的位相』筑摩書房、一九九二年
- 溝口雄三「「弧単」の知己——松陰における李卓吾」『日本思想体系 月報61』岩波書店、一九七八年一月、所収
- 森銑三『明治人物夜話』東京美術、一九六九年
- 森銑三 小出昌洋編『新編明治人物夜話』岩波文庫、二〇〇一年
- 安岡重明編『日本経営史講座 第3巻 日本の財閥』日本経済新聞社、一九七六年
- 安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店、一九九二年
- 山住正己『教育勅語』朝日選書¹⁵⁴、朝日新聞社、一九八〇年
- 藪禎子「第二部 項目篇 島崎藤村」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年
- 藪禎子「一葉と『文学界』、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉』」おうふう、一九九八年、所収
- 山中浩之「第三章 第4節 変革期の思想 吉田松陰」、古田光／子安宣邦編『日本思想史読本』東洋経済新報社、一九七九年
- 劉岸偉『明代の文人 李卓吾』中公新書、一九九四年

終章

(原典)

- 樋口一葉『たけくらべ』一八九五〔明治二八〕年——一八九六〔明治二九〕年（未定稿をふくむ）、『樋口一葉全集 第二巻』所収
- 『みづの上日記』一八九六〔明治二九〕年六月二日、『樋口一葉全集 第三巻(上)』所収
- 関礼子、菅聡子校註『たけくらべ』、『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四』岩波書店、二〇〇一年、所収
- 上田敏「一葉女史」『中央公論』第廿二年第六号(第二百十九號)、一九〇七〔明治四〇〕年六月一日 婦休庵「鶉翻搔」「詩人の閱歴に就きて」『めざまし草 まきの二』一八九六〔明治二九〕年二月十五日
- 「たけくらべ」『青年文』三巻四号、一八九六〔明治二九〕年五月一〇日
- 田山花袋『東京の三十年』、平岡敏夫、監修、解説『明治大正文学回想集成2 東京の三十年』(底本『東京の三十年』博文館、一九一七〔大正六〕年) 日本図書センター、一九八三年
- 永井荷風『里の今昔』一九三五〔昭和一〇〕年、『荷風全集 第十七巻』岩波書店、一九九四年

永井荷風『遷東綺譚』一九三七（昭和一二）年、『荷風全集 第十七卷』岩波書店、一九九四年
永井荷風『妾宅』一九二二（明治四五）年、『荷風全集 第八卷』岩波書店、一九九二年
永井荷風『桑中喜語』一九二六（大正一五）年、『荷風全集 第一五卷』岩波書店、一九九三年
永井荷風『断腸亭日乗』一九一七（大正六）年—一九五九（昭和三四）年、『荷風全集 第二二卷』岩波書店、一九九三年

中島歌子「緑陰苔話」『読売新聞』一八九六（明治二九）年五月二八・二九日
広津柳浪『今戸心中』一八九六（明治二九）年、『今戸心中他二篇』復刻版岩波文庫、一九五一年

（研究文献）

イーザー、ヴォルフガング『行為としての読書』轡田収訳、特装版岩波現代選書、一九九八年

(Iser, Wolfgang, *Der Akt des Lesens. Theorie ästhetischer Wirkung*, München, Wilhelm Fink Verlag, 1976.)

伊藤隆『日本の歴史 第30巻 十五年戦争』一九七六年、小学館

今村仁司『現代思想の系譜学』「破滅への願望」ちくま学芸文庫、一九九三年

宇野俊一『日本の歴史 第二六巻 日清・日露』小学館、一九七六年

江藤淳『荷風散策—紅茶のあとさき—』新潮社、一九九六年

大河晴美『第二部 項目篇 日暮里の火葬場』『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年

小川昌子「変貌する「一葉」——明治三十一—四十年代における「一葉」語りの諸相」『日本近代文学』二〇〇二年一〇月

折井美耶子「五 近代日本の公娼制と買春」、総合女性研究会編『日本女性史論集9 性と身体』吉川弘文館、一九九八年、所収

川本三郎『荷風と東京』『断腸亭日乗』私註』都市出版、一九九六年

川本三郎・荻野アンナ・井上ひさし・小森陽一「座談会昭和文学史 永井荷風と坂口安吾」『すばる』二〇〇〇年一月号

小森陽一『へゆらぎ』の日本文学』NHKブックス、日本放送出版会、一九九八年

高田知波『たけくらべ』における制度と〈他者〉』『樋口一葉論の射程』双文社出版、一九九七年

藤目ゆき『性の歴史学』不二出版、一九九九年

松坂俊夫「第一部 作品篇 たけくらべ」『樋口一葉事典』おうふう、一九九六年

ベンヤミン、ヴァルター「破壊的性格」『ヴァルター・ベンヤミン著作集1 暴力批判論』高原宏平、

野村修、編集解説、晶文社、一九六九年、所収 (Benjamin, Walter, *Der Destruktive Charakter* (1931), Werke,

Band 1, Frankfurt, Suhrkamp, 1969.)

前田愛『増補 文学テクスト入門』ちくま学芸文庫、一九九三年